

CLUSTERPRO® X 3.3 *for Windows*

スタートアップガイド

2018.07.26

第7版

CLUSTER **PRO**

改版履歴

版数	改版日付	内 容
1	2015/02/09	新規作成
2	2015/04/20	内部バージョン 11.31 に対応
3	2016/01/29	内部バージョン 11.32 に対応
4	2016/10/03	内部バージョン 11.33 に対応
5	2017/04/10	内部バージョン 11.34 に対応
6	2017/10/02	内部バージョン 11.35 に対応
7	2018/07/26	誤記修正

免責事項

本書の内容は、予告なしに変更されることがあります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任をおいしません。

また、お客様が期待される効果を得るために、本書に従った導入、使用および使用効果につきましては、お客様の責任とさせていただきます。

本書に記載されている内容の著作権は、日本電気株式会社に帰属します。本書の内容の一部または全部を日本電気株式会社の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは禁止されています。

商標情報

CLUSTERPRO® は日本電気株式会社の登録商標です。

Intel、Pentium、Xeonは、Intel Corporationの登録商標または商標です。

Microsoft、Windows、Windows Server、Windows Azure、Microsoft Azure は、米国 Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。

Amazon Web Services およびすべての AWS 関連の商標、ならびにその他の AWS のグラフィック、ロゴ、ページヘッダー、ボタンアイコン、スクリプト、サービス名は、米国および／またはその他の国における、AWS の商標、登録商標またはトレードドレスです。Oracle、JavaおよびすべてのJava関連の商標およびロゴは Oracleやその関連会社の 米国およびその他の国における商標または登録商標です。

WebOTX は日本電気株式会社の登録商標です。

Androidは、Google, Inc.の商標または登録商標です。

SVFはウイングアークテクノロジーズ株式会社の登録商標です。

Apache Tomcat、Tomcat、Apacheは、Apache Software Foundationの登録商標または商標です。

F5、F5 Networks、BIG-IP、およびiControl は、米国および他の国におけるF5 Networks, Inc. の商標または登録商標です。

Equalizer は米Coyote Point Systems 社の登録商標です。

SAP NetWeaver、および本文書に記載されたその他の SAP 製品、サービス、ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP AG の商標または登録商標です。

Python は、Python Software Foundation の登録商標です。

本書に記載されたその他の製品名および標語は、各社の商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
対象読者と目的	ix
本書の構成	ix
CLUSTERPRO マニュアル体系	x
本書の表記規則	xi
最新情報の入手先	xii
セクション I CLUSTERPRO の概要	13
第 1 章 クラスタシステムとは?	15
クラスタシステムの概要	16
HA (High Availability) クラスタ	17
共有ディスク型	18
ミラーディスク型	20
システム構成	21
障害検出のメカニズム	24
共有ディスクの排他制御	25
ネットワークパーティション症状 (Split-brain-syndrome)	25
クラスタリソースの引き継ぎ	26
データの引き継ぎ	26
IP アドレスの引き継ぎ	27
アプリケーションの引き継ぎ	27
フェイルオーバーについての総括	28
Single Point of Failure の排除	29
共有ディスク	30
共有ディスクへのアクセスパス	31
LAN	32
可用性を支える運用	33
運用前評価	33
障害の監視	33
第 2 章 CLUSTERPRO について	35
CLUSTERPRO とは?	36
CLUSTERPRO の製品構成	37
CLUSTERPRO のソフトウェア構成	38
CLUSTERPRO の障害監視のしくみ	38
サーバ監視とは	39
業務監視とは	39
内部監視とは	40
監視できる障害と監視できない障害	40
サーバ監視で検出できる障害とできない障害	40
業務監視で検出できる障害とできない障害	40
ネットワークパーティション解決	41
フェイルオーバーのしくみ	42
CLUSTERPRO で構築する共有ディスク型クラスタのハードウェア構成	44
CLUSTERPRO で構築するミラーディスク型クラスタのハードウェア構成	45
CLUSTERPRO で構築するハイブリッドディスク型クラスタのハードウェア構成	47
クラスタオブジェクトとは?	49
リソースとは?	50
ハートビートリソース	50

ネットワークパーティション解決リソース	50
グループリソース	50
モニタリソース	53
CLUSTERPRO を始めよう!	57
最新情報の確認	57
クラスタシステムの設計	57
クラスタシステムの構築	57
クラスタシステムの運用開始後の障害対応	57
セクション II リリースノート (CLUSTERPRO 最新情報)	59
第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境	61
ハードウェア動作環境	62
必要スペック	62
Express5800/A1080a,A1040a シリーズとの連携に対応したサーバ	62
CLUSTERPRO Server の動作環境	63
対応 OS	63
必要メモリ容量とディスクサイズ	64
監視オプションの動作確認済アプリケーション情報	64
仮想マシンリソースの動作環境	73
SNMP 連携機能の動作環境	74
JVM監視の動作環境	75
システム監視及びシステムリソース情報を収集する機能の動作環境	77
AWS Elastic IPリソース、AWS 仮想IPリソース、AWS Elastic IP監視リソース、AWS 仮想IP監視リソース、 AWS AZ監視リソースの動作環境	83
Azure プローブポートリソース、Azure プローブポート監視リソース、Azure ロードバランス監視リソースの 動作環境	83
SAP連携コネクタの動作環境	84
Builder の動作環境	85
動作確認済 OS、ブラウザ	85
Java 実行環境	87
必要メモリ容量/ディスク容量	87
対応する CLUSTERPRO の内部バージョン	87
WebManager の動作環境	89
動作確認済 OS、ブラウザ	89
Java 実行環境	91
必要メモリ容量/ディスク容量	91
統合WebManager の動作環境	92
動作確認済 OS、ブラウザ	92
Java 実行環境	94
必要メモリ容量/ディスク容量	94
WebManager Mobile の動作環境	95
動作確認済OS、ブラウザ	95
第 4 章 最新バージョン情報	97
CLUSTERPRO とマニュアルの対応一覧	98
最新バージョン	99
機能強化情報	100
第 5 章 注意制限事項	111
システム構成検討時	112
Builder、WebManager の動作 OS について	112
ミラーディスク/ハイブリッドディスクの要件について	112
IPv6環境について	113
ネットワーク構成について	113

共有ディスクの要件について	113
NIC Link Up/Down 監視リソース	114
ミラーディスク/ハイブリッドディスクの write 性能について	114
非同期ミラーの履歴ファイルについて	115
複数の非同期ミラー間のデータ整合性について	115
マルチブートについて	115
JVM監視リソースについて	115
ネットワーク警告灯の要件について	116
CLUSTERPRO インストール前	117
ファイルシステムについて	117
通信ポート番号	117
通信ポート番号の自動割り当て範囲の変更	119
ポート数不足を回避する設定について	121
時刻同期の設定	121
共有ディスクについて	121
ミラーディスク用のパーティションについて	121
ハイブリッドディスク用のパーティションについて	121
データパーティション上のフォルダやファイルのアクセス許可について	122
OS 起動時間の調整	122
ネットワークの確認	122
ESMPRO/AutomaticRunningController との連携について	123
ipmiutil について	123
Server Core へのインストールについて	124
メール通報について	124
システムディスクが接続された HBA のアクセス制限について	124
Microsoft Azure におけるクラスタ構築前の注意事項	124
AWS環境における時刻同期	124
AWS環境におけるIAMの設定について	125
CLUSTERPRO の構成情報作成時	129
CLUSTERPROインストールパス配下のフォルダやファイルについて	129
グループリソースの非活性異常時の最終アクション	129
遅延警告割合	129
ディスク監視リソースとハイブリッドディスク TUR 監視リソースの監視方法 TUR について	129
WebManager の画面更新間隔について	129
ハートビートリソースの設定について	130
統合 WebManager 用 IP アドレス (パブリック LAN IP アドレス) の設定について	130
スクリプトのコメントなどで取り扱える 2 バイト系文字コードについて	130
グループの起動可能サーバに設定可能なサーバグループ数について	130
JVM監視の設定について	130
システム監視の設定について	131
Windows Server 2008 R2 における OS の Server サービスについて	131
PostgreSQL監視の設定について	131
AWS Elastic IPリソースの設定について	131
AWS 仮想IPリソースの設定について	131
Azure プローブポートリソースの設定について	132
Azure ロードバランスマニタリソースの設定について	132
Windows Server 2012 ベースのシステムにおけるサービス失敗時の回復操作について	132
CLUSTERPRO 運用後	133
回復動作中の操作制限	133
コマンドリファレンスに記載されていない実行形式ファイルやスクリプトファイルについて	133
クラスタシャットダウン・クラスタシャットダウンリポート	133
特定サーバのシャットダウン、リポート	134
ネットワークパーティション状態からの復旧	134
WebManager について	134
Builder について	135
CLUSTERPRO Disk Agent サービスについて	136
ミラー構築中のクラスタ構成情報の変更について	136

ミラーディスクの待機系のクラスタ復帰について	136
ミラーディスク-ハイブリッドディスク間の構成変更について	136
[chkdsk] コマンドとデフラグについて	136
インデックスサービスについて	137
Windows Server 2008 環境におけるユーザーアカウント制御の影響について	137
Windows Server 2008 / 2012 環境におけるアプリケーションリソース / スクリプトリソースの画面表示につ いて	139
ネットワークインターフェイスカード (NIC) が二重化されている環境について	139
CLUSTERPROのサービスのログオンアカウントについて	139
CLUSTERPROの常駐プロセスの監視について	139
外部連携モニタリソースについて	140
JVM監視リソースについて	140
システム監視リソースについて	140
ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携に伴うイベントログ出力について	141
Windows Server 2008 / 2012 環境における[対話型サービスダイアログの検出]ポップアップ表示について	142
AWS 環境におけるAMIのリストアについて	142
CLUSTERPROの構成変更時	143
グループプロパティのフェイルオーバー排他属性について	143
リソースプロパティの依存関係について	143
グループリソースの追加、削除について	143
CLUSTERPROアップデート時	144
アップデートに伴う既定値の変更について	144
旧バージョンとの互換性	146
CLUSTERPRO X 1.0/2.0/2.1/3.0/3.1/3.2 との互換性について	146
CLUSTERPRO Ver8.0 以前との互換機能について	146
互換 API について	147
スクリプトファイルについて	147
付録.....	149
付録 A 用語集.....	151
付録 B 索引	155

はじめに

対象読者と目的

『CLUSTERPRO® X スタートアップガイド』の構成は、セクション I とセクション II の 2 部に分かれています。セクション I では、CLUSTERPRO を初めてご使用になるユーザを対象に、CLUSTERPRO の製品概要と基本的な使用方法について説明します。

セクション II では、CLUSTERPRO を導入前のユーザ、および導入後のアップデートを行うユーザを対象に、最新の動作環境情報や制限事項などについて紹介します。

本書の構成

セクション I CLUSTERPRO の概要

第 1 章 「クラスタシステムとは?」: クラスタシステムの概要について説明します。

第 2 章 「CLUSTERPRO について」: CLUSTERPRO の使用方法および関連情報について説明します。

セクション II リリースノート

第 3 章 「CLUSTERPRO の動作環境」: 導入前に確認が必要な最新情報について説明します。

第 4 章 「最新バージョン情報」: CLUSTERPRO の最新バージョンについての情報を示します。

第 5 章 「注意制限事項」: 既知の問題と制限事項について説明します。

付録

付録 A 「用語集」

付録 B 「索引」

CLUSTERPRO マニュアル体系

CLUSTERPRO のマニュアルは、以下の 5 つに分類されます。各ガイドのタイトルと役割を以下に示します。

『CLUSTERPRO X スタートアップガイド』 (Getting Started Guide)

CLUSTERPRO を使用するユーザを対象読者とし、製品概要、動作環境、アップデート情報、既知の問題などについて記載します。

『CLUSTERPRO X インストール&設定ガイド』 (Install and Configuration Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入を行うシステムエンジニアと、クラスタシステム導入後の保守・運用を行うシステム管理者を対象読者とし、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステム導入から運用開始前までに必須の事項について説明します。実際にクラスタシステムを導入する際の順番に則して、CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの設計方法、CLUSTERPRO のインストールと設定手順、設定後の確認、運用開始前の評価方法について説明します。

『CLUSTERPRO X リファレンスガイド』 (Reference Guide)

管理者、および CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの導入を行うシステムエンジニアを対象とし、CLUSTERPRO の運用手順、各モジュールの機能説明、メンテナンス関連情報およびトラブルシューティング情報等を記載します。『インストール&設定ガイド』を補完する役割を持ちます。

『CLUSTERPRO X 統合WebManager 管理者ガイド』 (Integrated WebManager Administrator's Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムを CLUSTERPRO 統合WebManager で管理するシステム管理者、および 統合WebManager の導入を行うシステムエンジニアを対象読者とし、統合WebManager を使用したクラスタシステム導入時に必須の事項について、実際の手順に則して詳細を説明します。

『CLUSTERPRO X WebManager Mobile 管理者ガイド』 (WebManager Mobile Administrator's Guide)

CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムを CLUSTERPRO WebManager Mobile で管理するシステム管理者、およびWebManager Mobile の導入を行うシステム エンジニアを対象読者とし、WebManager Mobile を使用したクラスタ システム導入時に必須の事項について、実際の手順に則して詳細を説明します。

本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項および関連情報を以下のように表記します。

注：は、重要ではあるがデータ損失やシステムおよび機器の損傷には関連しない情報を表します。

重要：は、データ損失やシステムおよび機器の損傷を回避するために必要な情報を表します。

関連情報：は、参照先の情報の場所を表します。

また、本書では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角かっこ	コマンド名の前後 画面に表示される語 (ダイアログ ボックス、メニューなど) の前後	[スタート] をクリックします。 [プロパティ] ダイアログボックス
コマンドライン中の [] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します。	clpstat -s[-h host_name]
モノスペース フォント (courier)	パス名、コマンドライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)、ディレクトリ、ファイル名、関数、パラメータ	c:¥Program files¥CLUSTERPRO
モノスペース フォント 太字 (courier)	ユーザが実際にコマンドプロンプトから入力する値を示します。	以下を入力します。 clpcl -s -a
モノスペース フォント 斜体 (courier)	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目	clpstat -s [-h host_name]

最新情報の入手先

最新の製品情報については、以下のWebサイトを参照してください。

<http://jpn.nec.com/clusterpro/>

セクション I CLUSTERPRO の概要

このセクションでは、CLUSTERPRO の製品概要と動作環境について説明します。

- 第 1 章 クラスタシステムとは？
- 第 2 章 CLUSTERPRO について

第 1 章 クラスタシステムとは？

本章では、クラスタシステムの概要について説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

• クラスタシステムの概要.....	16
• HA (High Availability) クラスタ.....	17
• システム構成	21
• 障害検出のメカニズム	24
• クラスタリソースの引き継ぎ	26
• Single Point of Failure の排除.....	29
• 可用性を支える運用.....	33

クラスタシステムの概要

現在のコンピュータ社会では、サービスを停止させることなく提供し続けることが成功への重要なカギとなります。例えば、1 台のマシンが故障や過負荷によりダウンしただけで、顧客へのサービスが全面的にストップしてしまうことがあります。そうすると、莫大な損害を引き起こすだけでなく、顧客からの信用を失いかねません。

クラスタシステムを導入することにより、万一のときのシステム停止時間（ダウンタイム）を最小限に食い止めたり、負荷を分散させたりすることで可用性を高めます。

クラスタとは、「群れ」「房」を意味し、その名の通り、「複数のコンピュータを一群（または複数群）にまとめて、信頼性や処理性能の向上を狙うシステム」です。クラスタシステムには様々な種類があり、以下の 3 つに分類できます。この中で、CLUSTERPRO は HA (High Availability) クラスタに分類されます。

◆ HA (High Availability) クラスタ

通常時は一方が現用系として業務を稼働させ、現用系障害発生時に待機系に業務を引き継ぐような形態のクラスタです。高可用性を目的としたクラスタです。共有ディスク型、ミラーディスク型があります。

◆ 負荷分散クラスタ

クライアントからの要求を適切な負荷分散ルールに従って、各ノードに割り当てるクラスタです。高スケーラビリティを目的としたクラスタで、一般的にデータの引き継ぎはできません。ロードバランスクラスタ、並列データベースクラスタがあります。

◆ HPC (High Performance Computing) クラスタ

非常に計算量が多いクラスタのこと。スーパーコンピュータを用いて単一の業務を実行するためのクラスタです。全てのノードの CPU を利用し、単一の業務を実行するグリッドコンピューティングという技術も近年話題に上ることが多くなっています。

HA (High Availability) クラスタ

一般的にシステムの可用性を向上させるには、そのシステムを構成する部品を冗長化し、Single Point of Failure をなくすことが重要であると考えられます。Single Point of Failure とは、コンピュータの構成要素（ハードウェアの部品）が 1 つしかないために、その個所で障害が起きると業務が止まってしまう弱点のことを指します。HA クラスタとは、ノードを複数台使用して冗長化することにより、システムの停止時間を最小限に抑え、業務の可用性（availability）を向上させるクラスタシステムをいいます。

システムの停止が許されない基幹業務システムなどのダウンタイムがビジネスに大きな影響を与えてしまうシステムに、HA クラスタの導入が求められています。

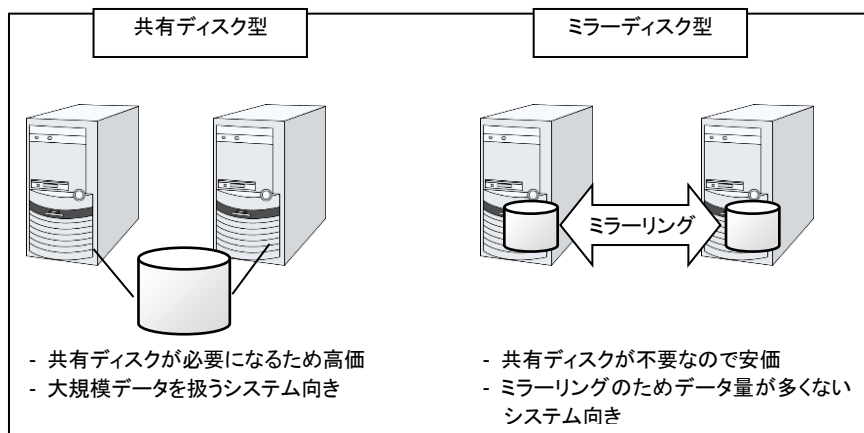


図 1-1 HA クラスタ構成図

HA クラスタは、共有ディスク型とミラーディスク型に分けることができます。次ページからそれぞれのタイプについて説明します。

共有ディスク型

クラスタシステムでは、サーバ間でデータを引き継がなければなりません。このデータを、SAN 接続の FibreChannel ディスクアレイ装置のように複数のサーバからアクセス可能な外付けディスク（共有ディスク）上に置き、このディスクを介してサーバ間でデータを引き継ぐ形態を共有ディスク型といいます。

業務アプリケーションを動かしているサーバ（現用系サーバ）で障害が発生した場合、クラスタシステムが障害を検出し、障害発生時に業務を引き継ぐサーバ（待機系サーバ）で業務アプリケーションを自動起動させ、業務を引き継がせます。これをフェイルオーバーといいます。クラスタシステムによって引き継がれる業務は、ディスク、IP アドレス、アプリケーションなどのリソースと呼ばれるもので構成されています。

クラスタ化されていないシステムでは、アプリケーションをほかのサーバで再起動させると、クライアントは異なる IP アドレスに再接続しなければなりません。しかし、多くのクラスタシステムでは、業務単位にサーバに付与している IP ではなく別ネットワークの IP アドレス（仮想 IP アドレス）を割り当てています。このため、クライアントは業務を行っているサーバが現用系か待機系かを意識する必要はなく、まるで同じサーバに接続しているように業務を継続できます。

現用系のダウンによりフェイルオーバーが発生すると、共有ディスク上のデータは適切な終了処理が行われなまま待機系に引き継がれることになります。このため、待機系では引き継いだデータの論理チェックをする必要があります。これは一般に、クラスタ化されていないシステムでダウン後の再起動時に行われるのと同様の処理になります。例えば、データベースならばロールバックやロールフォワードの処理が必要になります。これらによって、クライアントは未コミットの SQL 文を再実行するだけで、業務を継続することができます。

障害発生後は、障害が検出されたサーバを物理的に切り離して修理後、クラスタシステムに接続すれば待機系として復帰できます。業務の継続性を重視する実際の運用の場合は、グループのフェイルバックを行わなくても良いです。どうしても、元のサーバで業務を行いたい場合は、グループの移動を実行してください。

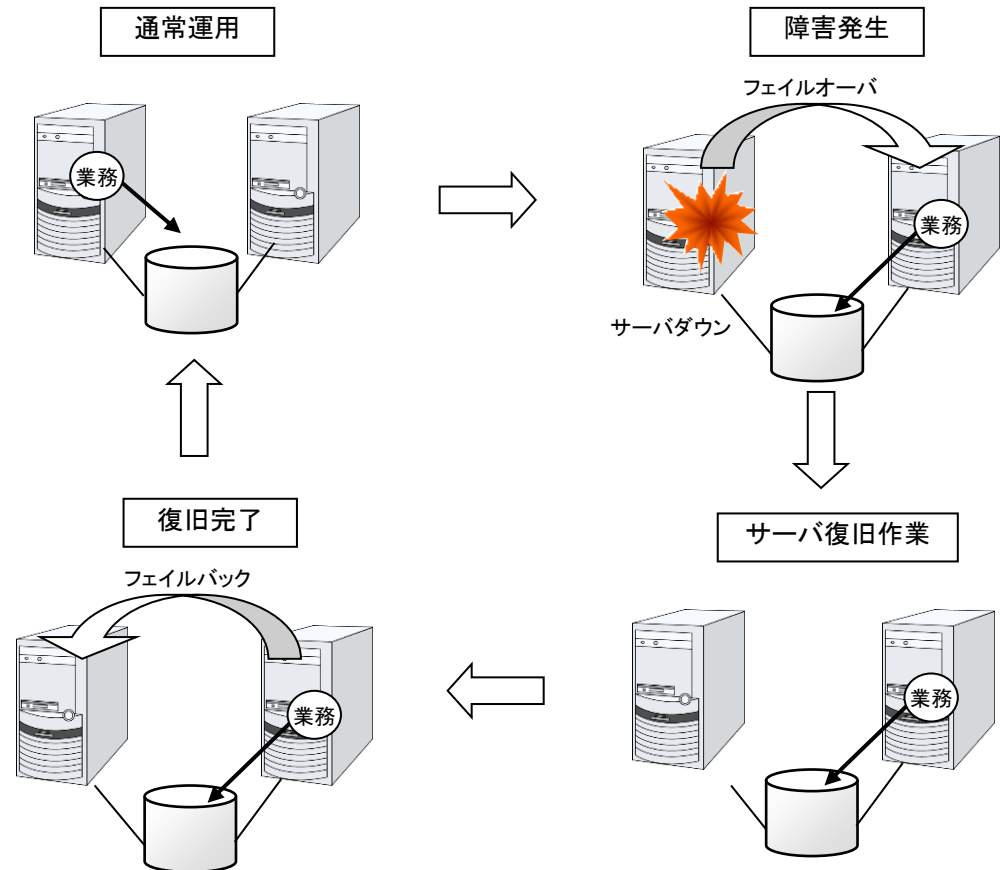


図 1-2 障害発生から復旧までの流れ

フェイルオーバー先のサーバのスペックが不十分、双方向スタンバイのため過負荷になる、などの理由で元のサーバで業務を行うのが望ましい場合には、元のノードの復旧作業が完了してから一旦業務を停止し、元のノードで業務を再開します。フェイルオーバーしたグループを元のサーバに戻すことをフェイルバックといいます。

また、下記の図のように、業務が 1 つであり、待機系では業務が動作しないスタンバイ形態を片方向スタンバイといいます。業務が 2 つ以上で、それぞれのノードが現用系かつ待機系である形態を双方向スタンバイといいます。

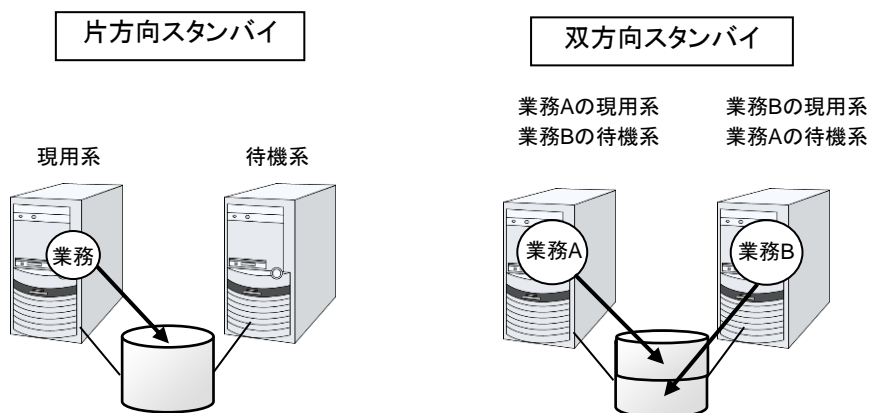


図 1-3 HA クラスタの運用形態

ミラーディスク型

前述の共有ディスク型は大規模なシステムに適していますが、共有ディスクはおおむね高価なためシステム構築のコストが膨らんでしまいます。そこで共有ディスクを使用せず、各サーバのディスクをサーバ間でミラーリングすることにより、同等の機能をより低価格で実現したクラスタシステムをミラーディスク型といいます。

しかし、サーバ間でデータをミラーリングする必要があるため、大量のデータを必要とする大規模システムには向きません。

アプリケーションからの Write 要求が発生すると、データミラーエンジンはローカルディスクにデータを書き込みます。書き込んだデータを、インタコネクトを通して待機系サーバにも Write 要求を振り分けます。インタコネクトとは、サーバ間をつなぐケーブルのことで、クラスタシステムではサーバの死活監視のために必要になります。データミラータイプでは死活監視に加えてデータの転送に使用することがあります。待機系のデータミラーエンジンは、受け取ったデータを待機系のローカルディスクに書き込むことで、現用系と待機系間のデータを同期します。

アプリケーションからの Read 要求に対しては、単に現用系のディスクから読み出すだけです。

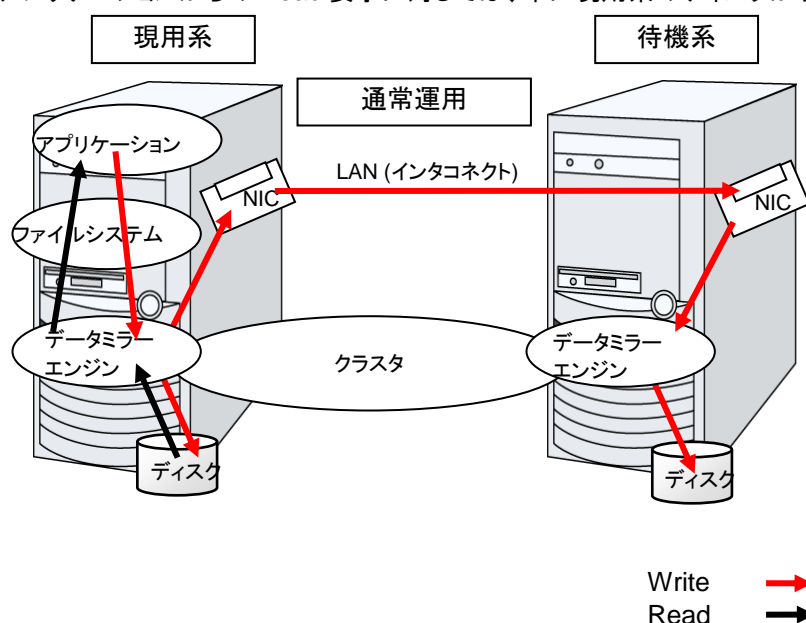


図 1-4 データミラーの仕組み

データミラーの応用例として、スナップショットバックアップの利用があります。データミラータイプのクラスタシステムは 2 カ所に共有のデータを持っているため、待機系のサーバをクラスタから切り離すだけで、スナップショットバックアップとしてデータを保存する運用が可能です。

HA クラスタの仕組みと問題点

次に、クラスタの実装と問題点について説明します。

システム構成

共有ディスク型クラスタは、ディスクアレイ装置をクラスタサーバ間で共有します。サーバ障害時には待機系サーバが共有ディスク上のデータを使用し業務を引き継ぎます。

ミラーディスク型クラスタは、クラスタサーバ上のデータディスクをネットワーク経由でミラーリングする構成です。サーバ障害時には待機系サーバ上のミラーデータを使用し業務を引き継ぎます。データのミラーリングは I/O 単位で行うため上位アプリケーションから見ると共有ディスクと同様に見えます。

以下の図は、共有ディスク型クラスタの構成例です。

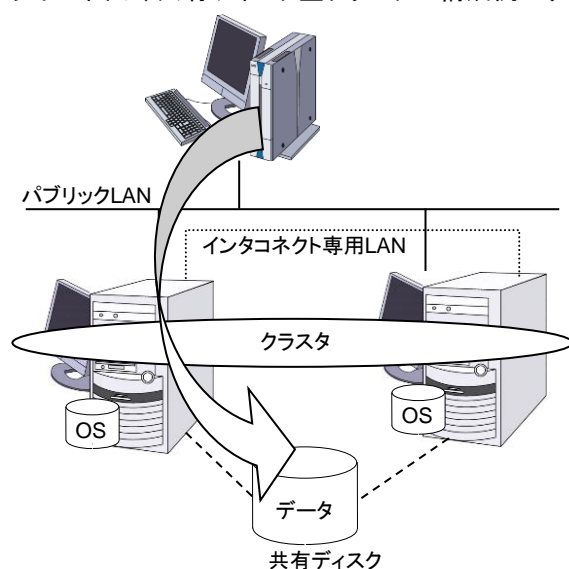


図 1-5 システム構成

フェイルオーバー型クラスタは、運用形態により、次のように分類できます。

片方向スタンバイクラスタ

一方のサーバを運用系として業務を稼働させ、他方のサーバを待機系として業務を稼働させない運用形態です。最もシンプルな運用形態でフェイルオーバー後の性能劣化のない可用性の高いシステムを構築できます。

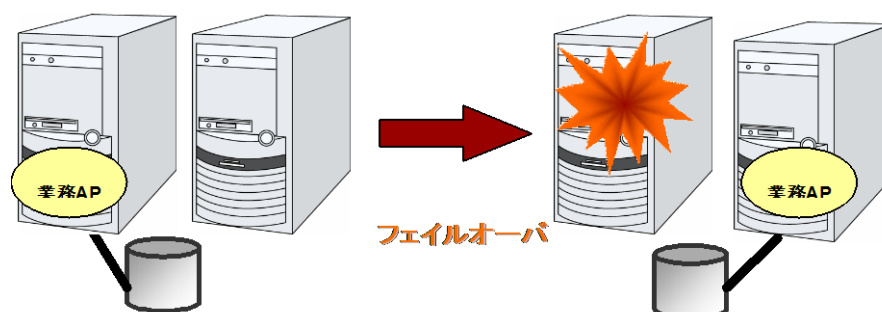


図 1-6 片方向スタンバイクラスタ

同一アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

複数のサーバで同じ業務アプリケーションを稼働させ相互に待機する運用形態です。各業務アプリケーションは独立して動作します。フェイルオーバー時には 1 台のサーバ上で同一業務アプリケーションが複数動作することになりますので、このような運用が可能なアプリケーションでなければなりません。ある業務データを複数の分割できる場合に、アクセスしようとしているデータによってクライアントからの接続先サーバを変更することで、データ分割単位での負荷分散システムを構築できます。

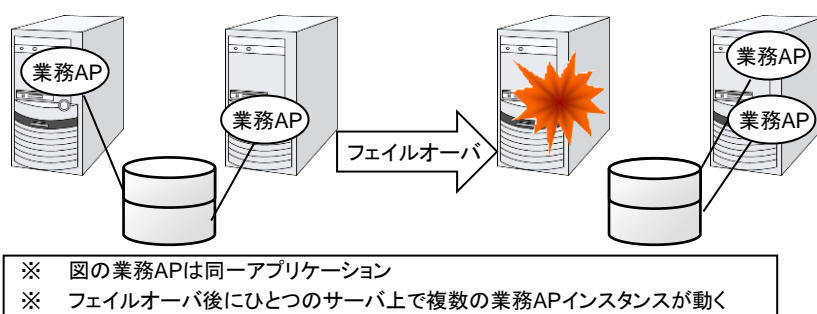


図 1-7 同一アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

異種アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

複数の種類の業務アプリケーションをそれぞれ異なるサーバで稼働させ相互に待機する運用形態です。フェイルオーバー時には 1 台のサーバ上に複数の業務アプリケーションが動作することになりますので、これらのアプリケーションは共存可能でなければなりません。業務単位での負荷分散システムを構築できます。

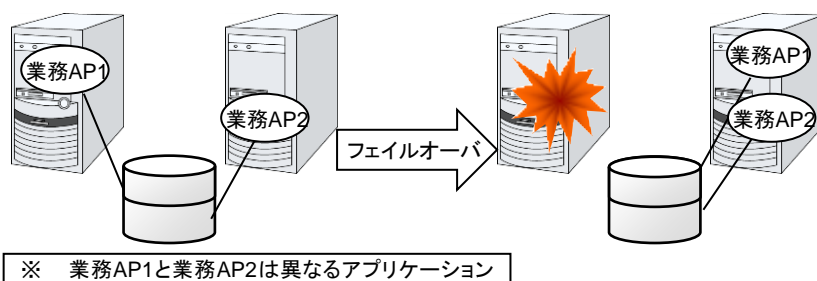


図 1-8 異種アプリケーション双方向スタンバイクラスタ

N + N 構成

ここまでの構成を応用し、より多くのノードを使用した構成に拡張することも可能です。下図は、3 種の業務を 3 台のサーバで実行し、いざ問題が発生した時には 1 台の待機系にその業務を引き継ぐという構成です。片方向スタンバイでは、正常時には待機系サーバが何も業務を行わないため、無駄なリソースの比率が 1/2 になっていたのですが、この構成の場合無駄なリソースの比率が 1/4 となり、コストの削減ができます。また、1 台までの異常発生であればパフォーマンスの低下もありません。

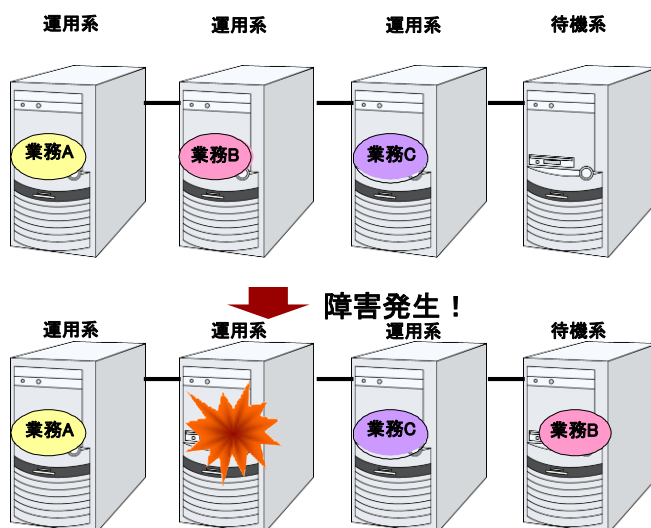


図 1-9 N + N 構成

障害検出のメカニズム

クラスタソフトウェアは、業務継続に問題をきたす障害を検出すると業務の引き継ぎ（フェイルオーバー）を実行します。フェイルオーバー処理の具体的な内容に入る前に、簡単にクラスタソフトウェアがどのように障害を検出するか見ておきましょう。

CLUSTERPRO はサーバ監視のために、定期的にサーバ同士で生存確認を行います。この生存確認をハートビートと呼びます。

ハートビートとサーバの障害検出

クラスタシステムにおいて、検出すべき最も基本的な障害はクラスタを構成するサーバのダウンです。サーバの障害には、電源異常やメモリエラーなどのハードウェア障害や OS のパニックなどが含まれます。このような障害を検出するために、サーバの死活監視としてハートビートが使用されます。

ハートビートは、ping の応答を確認するような死活監視だけでもよいのですが、クラスタソフトウェアによっては、自サーバの状態情報などを相乗りさせて送るものもあります。クラスタソフトウェアはハートビートの送受信を行い、ハートビートの応答がない場合はそのサーバの障害とみなしてフェイルオーバー処理を開始します。ただし、サーバの高負荷などによりハートビートの送受信が遅延することもあり、サーバ障害と判断するまである程度の猶予時間が必要です。このため、実際に障害が発生した時間とクラスタソフトウェアが障害を検知する時間とにはタイムラグが生じます。

リソースの障害検出

業務の停止要因はクラスタを構成するサーバのダウンだけではなくありません。例えば、業務アプリケーションが使用するディスク装置や NIC の障害、もしくは業務アプリケーションそのものの障害などによっても業務は停止してしまいます。可用性を向上するためには、このようなリソースの障害も検出してフェイルオーバーを実行しなければなりません。

リソース異常を検出する手法として、監視対象リソースが物理的なデバイスの場合は、実際にアクセスしてみるという方法が取られます。アプリケーションの監視では、アプリケーションプロセスそのものの死活監視のほか、業務に影響のない範囲でサービスポートを試してみるような手段も考えられます。

共有ディスクの排他制御

共有ディスク型のフェイルオーバークラスタでは、複数のサーバでディスク装置を物理的に共有します。一般的に、ファイルシステムはサーバ内にデータのキャッシュを保持することで、ディスク装置の物理的な I/O 性能の限界を超えるファイル I/O 性能を引き出しています。

あるファイルシステムを複数のサーバから同時にマウントしてアクセスするとどうなるでしょうか？

通常のファイルシステムは、自分以外のサーバがディスク上のデータを更新するとは考えていないので、キャッシュとディスク上のデータとに矛盾を抱えることとなり、最終的にはデータを破壊します。フェイルオーバークラスタシステムでは、次に説明するネットワークパーティション症状などによる複数サーバからのファイルシステムの同時マウントを防ぐために、ディスク装置の排他制御を行っています。

ネットワークパーティション症状 (Split-brain-syndrome)

サーバ間をつなぐすべてのインタコネクトが切断されると、ハートビートによる死活監視だけではサーバのダウンと区別できません。この状態でサーバダウンとみなし、フェイルオーバー処理を実行し、複数のサーバでファイルシステムを同時にマウントすると、共有ディスク上のデータが破壊されてしまいます。

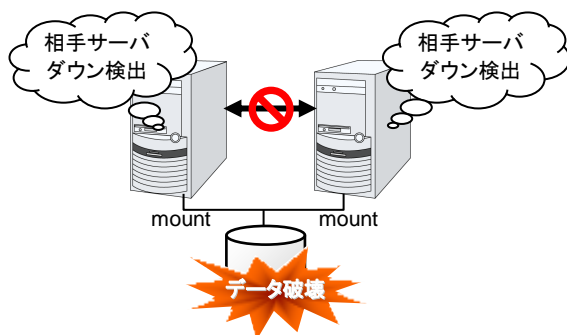


図 1-10 ネットワークパーティション症状

このような問題を「ネットワークパーティション症状」またはスプリットブレインシンドローム (Split-brain-syndrome) と呼びます。この問題を解決するため、フェイルオーバークラスタでは、すべてのインタコネクトが切断されたときに、確実に共有ディスク装置の排他制御を実現するためのさまざまな対応策が考えられています。

クラスタリソースの引き継ぎ

クラスタが管理するリソースにはディスク、IP アドレス、アプリケーションなどがあります。これらのクラスタリソースを引き継ぐための、フェイルオーバークラスタシステムの機能について説明します。

データの引き継ぎ

共有ディスク型クラスタでは、サーバ間で引き継ぐデータは共有ディスク装置上のパーティションに格納します。すなわち、データを引き継ぐとは、アプリケーションが使用するファイルが格納されているファイルシステムを健全なサーバ上でマウントしなおすことにほかなりません。共有ディスク装置は引き継ぐ先のサーバと物理的に接続されているので、クラスタソフトウェアが行うべきことはファイルシステムのマウントだけです。

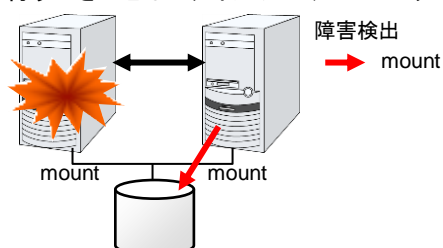


図 1-11 データの引き継ぎ

単純な話のようですが、クラスタシステムを設計・構築するうえで注意しなければならない点があります。

1 つは、ファイルシステムやデータベースの復旧時間の問題です。引き継ごうとしているファイルは、障害が発生する直前までほかのサーバで使用され、もしかしたらまさに更新中であったかもしれません。このため、ファイルシステムによっては引き継ぐ際に整合性チェックが必要となりますし、データベースであればロールバック等の処理が必要となります。これは電源障害などでダウンした単体サーバを再起動した場合と同様です。このような復旧処理に長時間を要する場合、それがそのままフェイルオーバー時間（業務の引き継ぎ時間）に追加されてしまい、システムの可用性を低下させる要因になります。

もう 1 つは、書き込み保証の問題です。アプリケーションが共有ディスクにデータを書き出す際に、通常はファイルシステムを介しての書き出しになりますが、アプリケーションが書き込みを完了していても、ファイルシステムがディスクキャッシュ上に保持しているだけで、共有ディスクへの書き込みを行っていない場合、この状態で現用系のサーバがダウンすると、ディスクキャッシュ上のデータは待機系に引き継がれないことになります。このため、障害発生時に確実に待機系に引き継ぐ必要がある大切なデータは、同期書き込みなどにより確実にディスクに書き込む必要があります。これは単体サーバがダウンした際にデータが揮発しないようにするのと同じです。つまり、待機系に引き継がれるのは共有ディスクに記録されたデータのみであり、ディスクキャッシュのようなメモリ上のデータは引き継がれないということを考慮してクラスタシステムを設計する必要があります。

IP アドレスの引き継ぎ

次にクラスタソフトウェアが行うことは、IP アドレスの引き継ぎです。フェイルオーバーした際に、IP アドレスを引き継ぐことで、業務がどのサーバで動作しているのか、気にすることなく作業を行うことができます。クラスタソフトウェアは、そのための IP アドレスの引き継ぎを行います。

アプリケーションの引き継ぎ

クラスタソフトウェアが業務引き継ぎの最後に行う仕事は、アプリケーションの引き継ぎです。フォールトトレラントコンピュータ (FTC) とは異なり、一般的なフェイルオーバークラスタでは、アプリケーション実行中のメモリ内容を含むプロセス状態などを引き継ぎません。すなわち、障害が発生したサーバで実行していたアプリケーションを健全なサーバで再実行することでアプリケーションの引き継ぎを行います。

例えば、DB のインスタンスをフェイルオーバーする場合、障害発生直前の状態で再開されるのではなく、一旦ダウンした状態から再起動した場合と同様にトランザクションのロールバック等が行われ、クライアントからも再接続が必要になります。このデータベース復旧に必要な時間は、DBMS のチェックポイントインターバルの設定などによってある程度の制御ができますが、一般的には数分程度必要となるようです。

多くのアプリケーションは再実行するだけで業務を再開できますが、障害発生後の業務復旧手順が必要なアプリケーションもあります。このようなアプリケーションのためにクラスタソフトウェアは業務復旧手順を記述できるよう、アプリケーションの起動の代わりにスクリプトを起動できるようにになっています。スクリプト内には、スクリプトの実行要因や実行サーバなどの情報をもとに、必要に応じて更新途中であったファイルのクリーンアップなどの復旧手順を記述します。

フェイルオーバーについての総括

ここまでの内容から、次のようなクラスタソフトの動作が分かります。

- ◆ 障害検出 (ハートビート/リソース監視)
- ◆ ネットワークパーティション症状解決 (NP解決)
- ◆ クラスタ資源切り替え
 - データの引き継ぎ
 - IP アドレスの引き継ぎ
 - アプリケーションの引き継ぎ

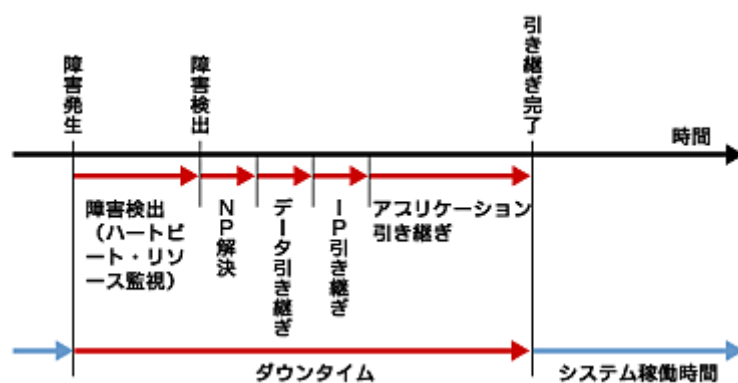


図 1-12 フェイルオーバータイムチャート

クラスタソフトウェアは、フェイルオーバー実現のため、これらの様々な処置を 1 つ 1 つ確実に、短時間で実行することで、高可用性 (High Availability) を実現しているのです。

Single Point of Failure の排除

高可用性システムを構築するうえで、求められるもしくは目標とする可用性のレベルを把握することは重要です。これはすなわち、システムの稼働を阻害し得るさまざまな障害に対して、冗長構成をとることで稼働を継続したり、短い時間で稼働状態に復旧したりするなどの施策を費用対効果の面で検討し、システムを設計するということです。

Single Point of Failure (SPOF) とは、システム停止につながる部位を指す言葉であると前述しました。クラスタシステムではサーバの多重化を実現し、システムの SPOF を排除することができますが、共有ディスクなど、サーバ間で共有する部分については SPOF となり得ます。この共有部分を多重化もしくは排除するようシステム設計することが、高可用性システム構築の重要なポイントとなります。

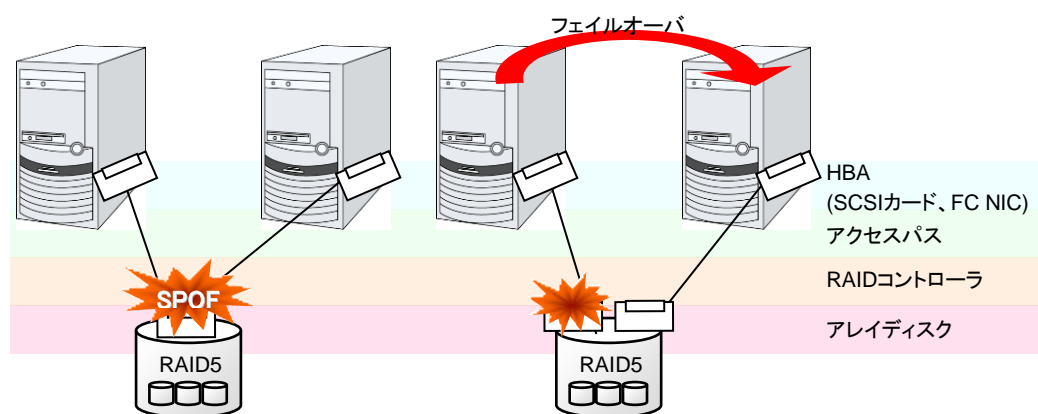
クラスタシステムは可用性を向上させますが、フェイルオーバーには数分程度のシステム切り替え時間が必要となります。従って、フェイルオーバー時間は可用性の低下要因の 1 つともいえます。このため、高可用性システムでは、まず単体サーバの可用性を高める ECC メモリや冗長電源などの技術が本来重要なのですが、ここでは単体サーバの可用性向上技術には触れず、クラスタシステムにおいて SPOF となりがちな下記の 3 つについて掘り下げて、どのような対策があるか見ていきたいと思います。

- ◆ 共有ディスク
- ◆ 共有ディスクへのアクセスパス
- ◆ LAN

共有ディスク

通常、共有ディスクはディスクアレイにより RAID を組むので、ディスクのベアドライブは SPOF となりません。しかし、RAID コントローラを内蔵するため、コントローラが問題となります。多くのクラスタシステムで採用されている共有ディスクではコントローラの二重化が可能になっています。

二重化された RAID コントローラの利点を生かすためには、通常は共有ディスクへのアクセスパスの二重化を行う必要があります。ただし、二重化された複数のコントローラから同時に同一の論理ディスクユニット (LUN) へアクセスできるような共有ディスクの場合、それぞれのコントローラにサーバを 1 台ずつ接続すればコントローラ異常発生時にノード間フェイルオーバーを発生させることで高可用性を実現できます。



※HBA: Host Bus Adapter の略で、共有ディスク側ではなく、サーバ本体側のアダプタのことです。

図 1-13 共有ディスクの RAID コントローラとアクセスパスが SPOF となっている例 (左) と RAID コントローラとアクセスパスを分割した例

一方、共有ディスクを使用しないデータミラー型のフェイルオーバークラスタでは、すべてのデータをほかのサーバのディスクにミラーリングするため、SPOF が存在しない理想的なシステム構成を実現できます。ただし、次のような点について考慮する必要があります。

- ◆ ネットワークを介してデータをミラーリングすることによるディスク I/O 性能 (特に write 性能) の低下
- ◆ サーバ障害後の復旧における、ミラー再同期中のシステム性能 (ミラーコピーはバックグラウンドで実行される) の低下
- ◆ ミラー再同期時間 (ミラー再同期が完了するまでフェイルオーバーできない)

すなわち、データの参照が多く、データ容量が多くないシステムにおいては、データミラー型のフェイルオーバークラスタを採用するというのも可用性を向上させるのに有効といえます。

共有ディスクへのアクセスパス

共有ディスク型クラスタの一般的な構成では、共有ディスクへのアクセスパスはクラスタを構成する各サーバで共有されます。SCSI を例に取れば、1 本の SCSI バス上に 2 台のサーバと共有ディスクを接続するということです。このため、共有ディスクへのアクセスパスの異常はシステム全体の停止要因となり得ます。

対策としては、共有ディスクへのアクセスパスを複数用意することで冗長構成とし、アプリケーションには共有ディスクへのアクセスパスが 1 本であるかのように見せることが考えられます。これを実現するデバイスドライバをパスフェイルオーバードライバなどと呼びます。

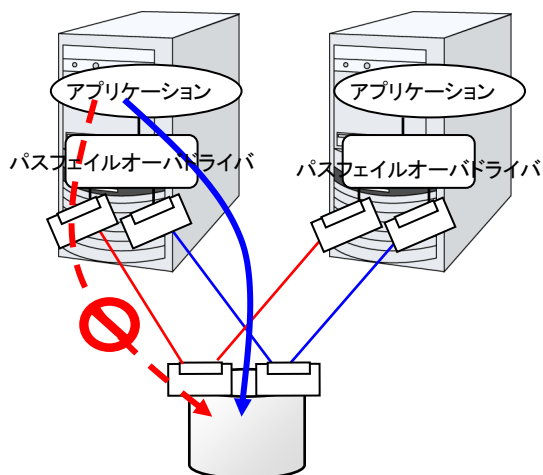


図 1-14 パスフェイルオーバードライバ

LAN

クラスタシステムに限らず、ネットワーク上で何らかのサービスを実行するシステムでは、LAN の障害はシステムの稼働を阻害する大きな要因です。クラスタシステムでは適切な設定を行えば NIC 障害時にノード間でフェイルオーバーを発生させて可用性を高めることは可能ですが、クラスタシステムの外側のネットワーク機器が故障した場合はやはりシステムの稼働を阻害します。

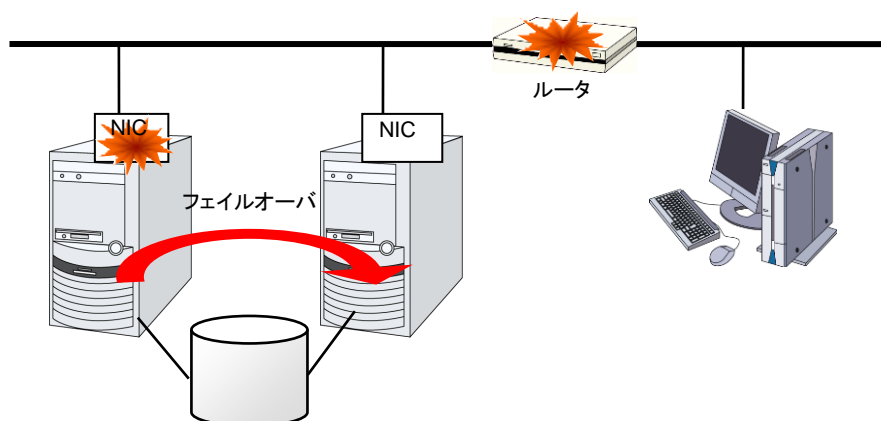


図 1-15 ルータが SPOF となる例

このようなケースでは、LAN を冗長化することでシステムの可用性を高めます。クラスタシステムにおいても、LAN の可用性向上には単体サーバでの技術がそのまま利用可能です。例えば、予備のネットワーク機器の電源を入れずに準備しておき、故障した場合に手動で入れ替えるといった原始的な手法や、高機能のネットワーク機器を冗長配置してネットワーク経路を多重化することで自動的に経路を切り替える方法が考えられます。また、インテル社の ANS ドライバのように NIC の冗長構成をサポートするドライバを利用することも考えられます。

ロードバランス装置 (Load Balance Appliance) やファイアウォールサーバ (Firewall Appliance) も SPOF となりやすいネットワーク機器です。これらもまた、標準もしくはオプションソフトウェアを利用することで、フェイルオーバー構成を組めるようになっているのが普通です。同時にこれらの機器は、システム全体の非常に重要な位置に存在するケースが多いため、冗長構成をとることはほぼ必須と考えるべきです。

可用性を支える運用

運用前評価

システムトラブルの発生要因の多くは、設定ミスや運用保守に起因するものであるともいわれています。このことから考えても、高可用性システムを実現するうえで運用前の評価と障害復旧マニュアルの整備はシステムの安定稼働にとって重要です。評価の観点としては、実運用に合わせて、次のようなことを実践することが可用性向上のポイントとなります。

- ◆ 障害発生箇所を洗い出し、対策を検討し、擬似障害評価を行い実証する
- ◆ クラスタの「一連の状態遷移」を想定した評価を行い、縮退運転時のパフォーマンスなどの検証を行う
- ◆ これらの評価をもとに、システム運用、障害復旧マニュアルを整備する

クラスタシステムの設計をシンプルにすることは、上記のような検証やマニュアルが単純化でき、システムの可用性向上のポイントとなることが分かります。

障害の監視

上記のような努力にもかかわらず障害は発生するものです。ハードウェアには経年劣化があり、ソフトウェアにはメモリリークなどの理由や設計当初のキャパシティプランニングを超えた運用をしてしまうことにより、長期間運用を続けると障害が発生することがあります。このため、ハードウェア、ソフトウェアの可用性向上と同時に、さらに重要となるのは障害を監視して障害発生時に適切に対処することです。万が一サーバに障害が発生した場合を例にとると、クラスタシステムを組むことで数分の切り替え時間でシステムの稼働を継続できますが、そのまま放置しておけばシステムは冗長性を失い次の障害発生時にはクラスタシステムは何の意味もなさなくなってしまうです。

このため、障害が発生した場合、すぐさまシステム管理者は次の障害発生に備え、新たに発生した SPOF を取り除くなどの対処をしなければなりません。このようなシステム管理業務をサポートするうえで、リモートメンテナンスや障害の通報といった機能が重要になります。

以上、クラスタシステムを利用して高可用性を実現するうえで必要とされる周辺技術やそのほかのポイントについて説明しました。注意すべき点を簡単にまとめます。

- ◆ Single Point of Failure を排除または把握する
- ◆ 障害に強いシンプルな設計を行い、運用前評価に基づき運用・障害復旧手順のマニュアルを整備する
- ◆ 発生した障害を早期に検出し適切に対処する

第 2 章 CLUSTERPRO について

本章では、CLUSTERPRO を構成するコンポーネントの説明と、クラスタシステムの設計から運用手順までの流れについて説明します。

本章で説明する項目は以下のとおりです。

• CLUSTERPRO とは?.....	36
• CLUSTERPRO の製品構成.....	37
• CLUSTERPRO のソフトウェア構成	38
• ネットワークパーティション解決	41
• フェイルオーバーのしくみ.....	42
• リソースとは?	50
• CLUSTERPRO を始めよう!.....	57

CLUSTERPRO とは？

クラスタについて理解したところで、CLUSTERPRO の紹介を始めましょう。CLUSTERPRO とは、HA クラスタシステムを実現するためのソフトウェアです。

CLUSTERPRO の製品構成

CLUSTERPRO は大きく分けると 3 つのモジュールから構成されています。

- ◆ CLUSTERPRO Server

CLUSTERPRO の本体です。クラスタシステムを構成する各サーバマシンにインストールします。Server には、CLUSTERPRO の高可用性機能の全てが含まれています。また、WebManager および Builder のサーバ側機能も含まれます。

- ◆ CLUSTERPRO WebManager (WebManager)

CLUSTERPRO の運用管理を行うための管理ツールです。ユーザインターフェイスとして Web ブラウザを利用します。実体は CLUSTERPRO Server に組み込まれていますが、操作は管理端末上の Web ブラウザで行うため、CLUSTERPRO Server とは区別されています。

- ◆ CLUSTERPRO Builder (Builder)

CLUSTERPRO の構成情報を作成するためのツールです。WebManager と同じく、ユーザインターフェイスとして Web ブラウザを利用します。Builder を利用する端末上で、CLUSTERPRO Server とは別にインストールして利用するオフライン版と WebManager 画面のツールバー左端のドロップダウンメニューから設定モードを選択するか、または [表示] メニューの [設定モード] をクリックして転換するオンライン版があります。通常インストール不要であり、オフラインで使用する場合のみ別途インストールします。

CLUSTERPRO のソフトウェア構成

CLUSTERPRO のソフトウェア構成は次の図のようになります。クラスタを構成するサーバ上には「CLUSTERPRO Server (CLUSTERPRO 本体)」をインストールします。WebManager や Builder の本体機能は CLUSTERPRO Server に含まれるため、別途インストールする必要がありません。ただし、CLUSTERPRO Server にアクセスできない環境で Builder を使用する場合は、オフライン版の Builder を PC にインストールする必要があります。WebManager や Builder は管理 PC 上の Web ブラウザから利用するほか、クラスタを構成する各サーバ上の Web ブラウザでも利用できます。

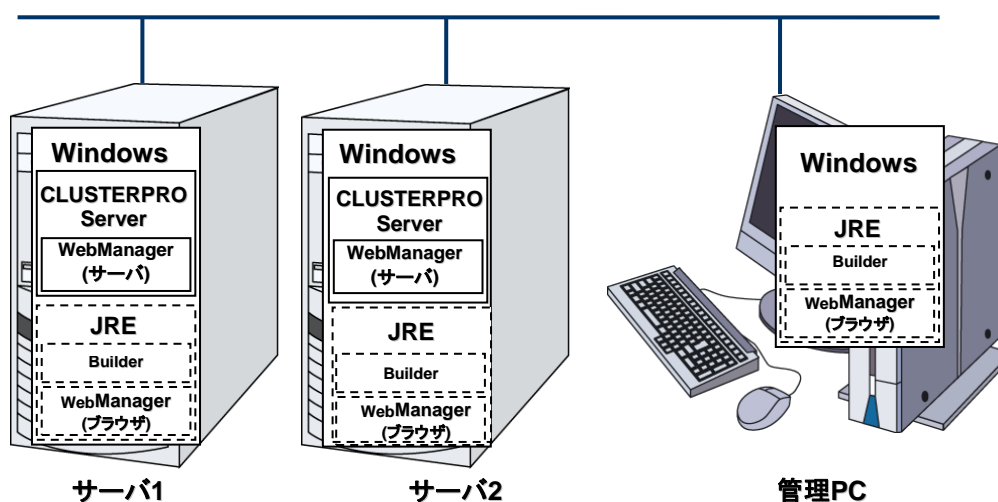


図 2-1 CLUSTERPRO のソフトウェア構成

注: JRE とは、Java Runtime Environment のことです。

CLUSTERPRO の障害監視のしくみ

CLUSTERPRO では、サーバ監視、業務監視、内部監視の 3 つの監視を行うことで、迅速かつ確実な障害検出を実現しています。以下にその監視の詳細を示します。

サーバ監視とは

サーバ監視とはフェイルオーバ型クラスタシステムの最も基本的な監視機能で、クラスタを構成するサーバが停止していないかを監視する機能です。

サーバ監視(ハートビート)は以下の通信パスを使用して行います。

- ◆ プライマリインタコネクト
クラスタサーバ間通信専用の LAN です。ハートビートを行うと同時にサーバ間の情報交換に使用します。
- ◆ セカンダリインタコネクト
クライアントとの通信に用いるパスとして使用します。サーバ間の情報交換や、インタコネクトのバックアップ用としても使用します。
- ◆ BMC
フェイルオーバ型クラスタを構成するサーバ間を、BMC を介してハートビート通信を行い、他サーバの生存を確認します。

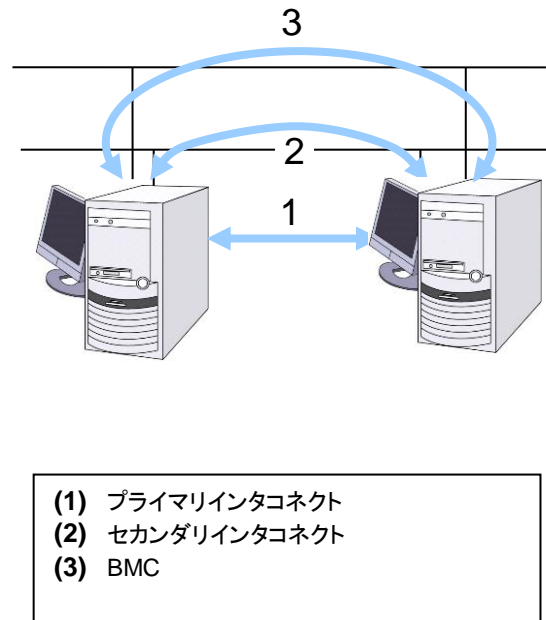


図 2-2 サーバ監視

業務監視とは

業務監視とは、業務アプリケーションそのものや業務が実行できない状態に陥る障害要因を監視する機能です。

- ◆ 監視オプションによるアプリケーション/プロトコルのストール/結果異常監視
別途ライセンスの購入が必要となりますが、データベースアプリケーション (Oracle, DB2 等)、プロトコル (FTP, HTTP 等)、アプリケーションサーバ (WebSphere, WebLogic 等) のストール/結果異常監視を行うことができます。詳細は、『リファレンスガイド』の「第 6 章 モニタリソースの詳細」を参照してください。
- ◆ アプリケーションの死活監視
アプリケーションを起動用のリソース (アプリケーションリソース、サービスリソースと呼びます) により起動し、監視用のリソース (アプリケーション監視リソース、サービス監視リソースと呼びます) により定期的にプロセスの生存を確認することで実現します。業務停止要因が業務アプリケーションの異常終了である場合に有効です。

注1: CLUSTERPRO が直接起動したアプリケーションが監視対象の常駐プロセスを起動し終了してしまうようなアプリケーションでは、常駐プロセスの異常を検出することはできません。

注2: アプリケーションの内部状態の異常 (アプリケーションのストールや結果異常) を検出することはできません。

- ◆ リソースの監視

CLUSTERPRO のモニタリソースによりクラスタリソース（ディスクパーティション、IP アドレスなど）やパブリック LAN の状態を監視することで実現します。業務停止要因が業務に必要なリソースの異常である場合に有効です。

内部監視とは

内部監視とは、CLUSTERPRO 内部のモジュール間相互監視です。CLUSTERPRO の各監視機能が正常に動作していることを監視します。

次のような監視を CLUSTERPRO 内部で行っています。

- ◆ CLUSTERPRO プロセスの死活監視

監視できる障害と監視できない障害

CLUSTERPRO には、監視できる障害とできない障害があります。クラスタシステム構築時、運用時に、どのような障害が検出可能なのか、または検出できないのかを把握しておくことが重要です。

サーバ監視で検出できる障害とできない障害

監視条件: 障害サーバからのハートビートが途絶

- ◆ 監視できる障害の例
 - ・ ハードウェア障害 (OS が継続動作できないもの)
 - ・ STOP エラー
- ◆ 監視できない障害の例
 - ・ OS の部分的な機能障害 (マウス/キーボードのみが動作しない等)

業務監視で検出できる障害とできない障害

監視条件: 障害アプリケーションの消滅、継続的なリソース異常、あるネットワーク装置への通信路切断

- ◆ 監視できる障害の例
 - ・ アプリケーションの異常終了
 - ・ 共有ディスクへのアクセス障害 (HBA の故障など)
 - ・ パブリック LAN NIC の故障
- ◆ 監視できない障害の例
 - ・ アプリケーションのストール/結果異常

アプリケーションのストール/結果異常を CLUSTERPRO で直接監視することはできません※1が、アプリケーションを監視し異常検出時に自分自身を終了するプログラムを作成し、そのプログラムをアプリケーションリソースで起動、アプリケーション監視リソースで監視することで、フェイルオーバを発生させることは可能です。

※1 監視オプションで取り扱う、データベースアプリケーション (Oracle,DB2等)、プロトコル (FTP,HTTP等)、アプリケーションサーバ (Websphere, Weblogic等) については、ストール/結果異常監視を行うことができます。

ネットワークパーティション解決

CLUSTERPRO は、あるサーバからのハートビート途絶を検出すると、その原因が本当にサーバ障害なのか、あるいはネットワークパーティション症状によるものなのかの判別を行います。サーバ障害と判断した場合は、フェイルオーバー（健全なサーバ上で各種リソースを活性化し業務アプリケーションを起動）を実行しますが、ネットワークパーティション症状と判断した場合には、業務継続よりもデータ保護を優先させるため、緊急シャットダウンなどの処理を実施します。

ネットワークパーティション解決方式には下記の方法があります。

- ◆ COM 方式
- ◆ PING 方式
- ◆ 共有ディスク方式
- ◆ COM + 共有ディスク方式
- ◆ PING + 共有ディスク方式
- ◆ 多数決方式
- ◆ ネットワークパーティション解決しない

関連情報： ネットワークパーティション解決方法の設定についての詳細は、『リファレンスガイド』の「第 8 章 ネットワークパーティション解決リソースの詳細」を参照してください。

フェイルオーバーのしくみ

CLUSTERPRO は他サーバからのハートビートの途絶を検出すると、フェイルオーバー開始前にサーバの障害かネットワークパーティション症状かを判別します。この後、健全なサーバ上で各種リソースを活性化し業務アプリケーションを起動することでフェイルオーバーを実行します。

このとき、同時に移動するリソースの集まりをフェイルオーバーグループと呼びます。フェイルオーバーグループは利用者から見た場合、仮想的なコンピュータとみなすことができます。

注: クラスタシステムでは、アプリケーションを健全なノードで起動しなおすことでフェイルオーバーを実行します。このため、アプリケーションのメモリ上に格納されている実行状態をフェイルオーバーすることはできません。

障害発生からフェイルオーバー完了までの時間は数分間必要です。以下にタイムチャートを示します。

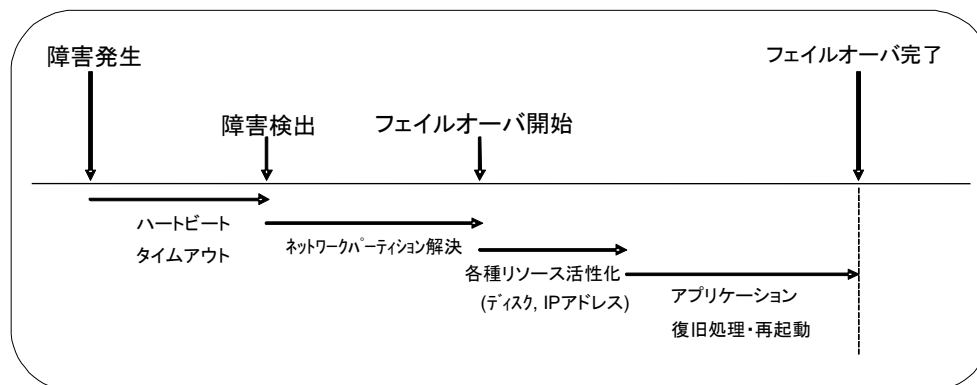


図 2-3 フェイルオーバーのタイムチャート

- ◆ ハートビートタイムアウト
 - 業務を実行しているサーバの障害発生後、待機系がその障害を検出するまでの時間です。
 - 業務の負荷等による遅延も考慮して、クラスタプロパティの設定値を調整します。(既定値では 30 秒です。)
- ◆ ネットワークパーティション解決
 - 相手サーバからのハートビートの途絶（ハートビートタイムアウト）が、ネットワークパーティション症状によるものか、実際に相手サーバが障害を起こしたのかを確認するための時間です。
 - ネットワークパーティション方式として共有ディスク方式が指定されている場合には、ディスク I/O の遅延を考慮した待ち時間が必要なため、既定値の設定で 30 秒～60 秒程の時間を要します。この所要時間はクラスタパーティションへのアクセス時間や、ハートビートタイムアウト値などに連動して変化します。その他の方式の場合、通常はほぼ瞬時に確認が完了します。
- ◆ 各種リソース活性化
 - 業務で必要なリソースを活性化するための時間です。
 - 一般的な設定では数秒で活性化しますが、フェイルオーバーグループに登録されている資源の種類や数によって必要時間は変化します。(詳しくは、『インストール&設定ガイド』を参照してください。)
- ◆ アプリケーション復旧処理・再起動
 - 業務で使用するアプリケーションの起動に要する時間です。データベースのロールバック/ロールフォワードなどのデータ復旧処理の時間も含まれます。
 - ロールバック/ロールフォワード時間などはチェックポイントインターバルの調整である程度予測可能です。詳しくは、各ソフトウェア製品のドキュメントを参照してください。

CLUSTERPRO で構築する共有ディスク型クラスタのハードウェア構成

共有ディスク型クラスタの CLUSTERPRO の HW 構成は下図のようになります。

サーバ間の通信用に

- ◆ NIC を 2 枚 (1 枚は外部との通信と流用、1 枚は CLUSTERPRO 専用)
- ◆ RS-232C ケーブルで接続された COM ポート
- ◆ 共有ディスクの特定領域

を利用する構成が一般的です。

共有ディスクとの接続インターフェイスは SCSI や Fibre Channel、iSCSI ですが、最近では Fibre Channel か iSCSI による接続が一般的です。

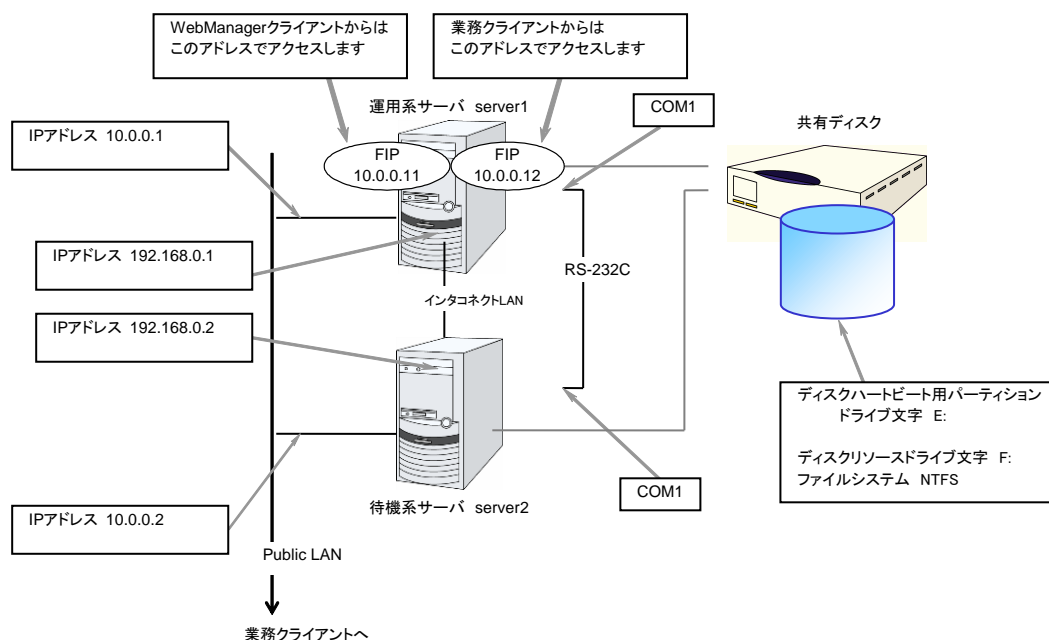


図 2-4 共有ディスク使用時のクラスタ環境のサンプル

上記は、共有ディスク使用時のクラスタ環境のサンプルです。

CLUSTERPROで構築するミラーディスク型クラスタのハードウェア構成

各サーバのディスク上のパーティションをミラーリングすることによって、共有ディスク装置の代替とする構成です。共有ディスク型に比べて小規模で低予算のシステムに向いています。

注：ミラーディスクを使用するには、Replicator オプションまたは Replicator DR オプションをご購入いただく必要があります。

ミラーディスクデータコピー用のネットワークが必要となりますが、通常、インタコネクト (CLUSTERPRO の内部通信用 NIC) で兼用します。

CLUSTERPRO で構築するデータミラー型クラスタのハードウェア構成は、下図のような構成になります。

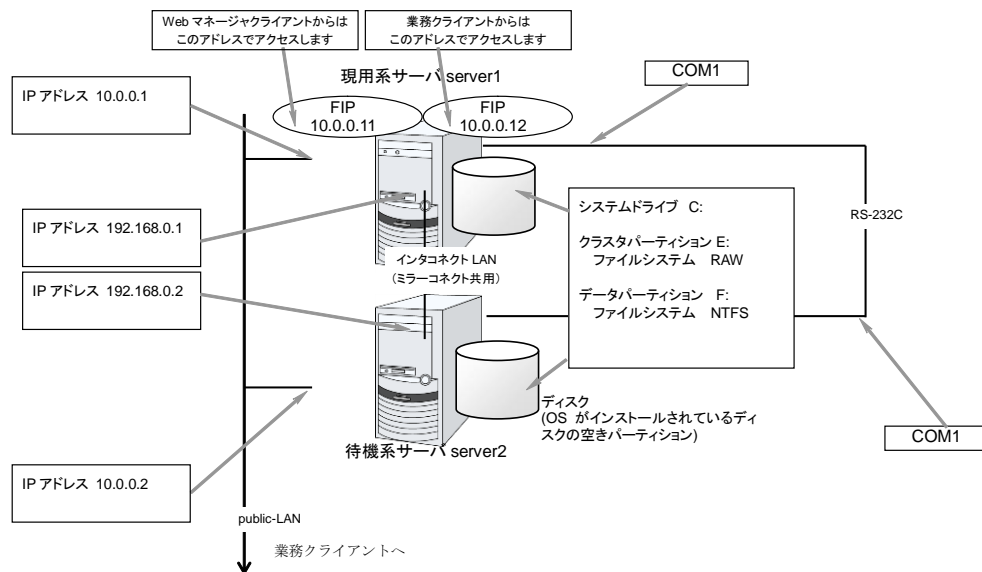


図 2-5 ミラーディスク使用時のクラスタ環境のサンプル

上記は、ミラーディスク使用時のクラスタ環境のサンプル（OS がインストールされているディスクにクラスタパーティション、データパーティションを確保する場合）です。

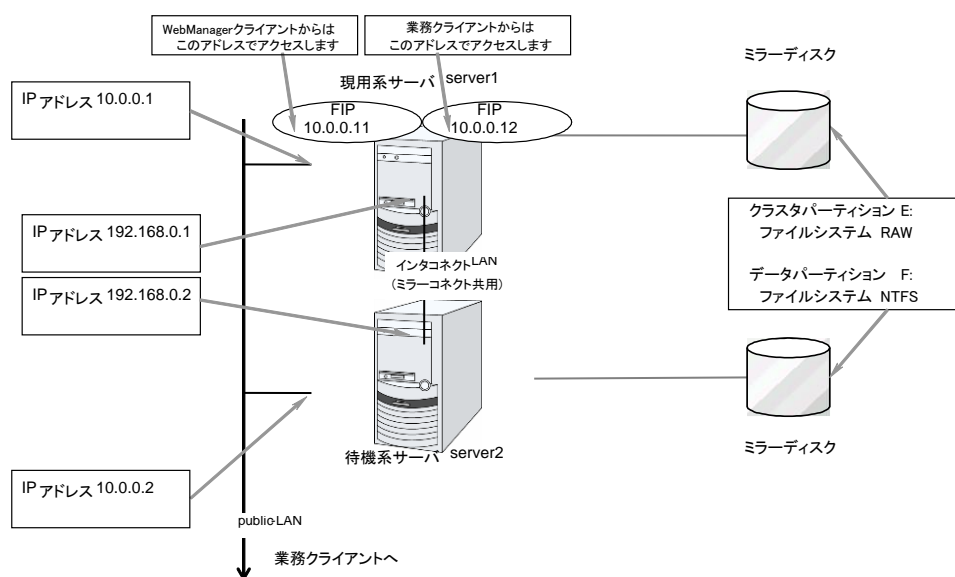


図 2-6 ミラーディスク使用時のクラスタ環境のサンプル

ミラーディスク使用時のクラスタ環境のサンプル (クラスタパーティション、データパーティション用のディスクを用意する場合) です。

CLUSTERPRO で構築するハイブリッドディスク型クラスタのハードウェア構成

共有ディスク型とミラーディスク型を組み合わせ、共有ディスク上のパーティションをミラーリングすることによって、共有ディスク装置の障害に対しても業務継続を可能とする構成です。リモートサイト間でミラーリングすることにより、災害対策としても利用できます。

注： ハイブリッドディスクを使用するには、Replicator DR オプションをご購入いただく必要があります。

ミラーディスクの場合と同様、データコピー用のネットワークが必要となりますが、通常、インタコネクト (CLUSTERPRO の内部通信用 NIC) で兼用します。

CLUSTERPRO で構築するハイブリッドディスク型クラスタのハードウェア構成は、下図のようになります。

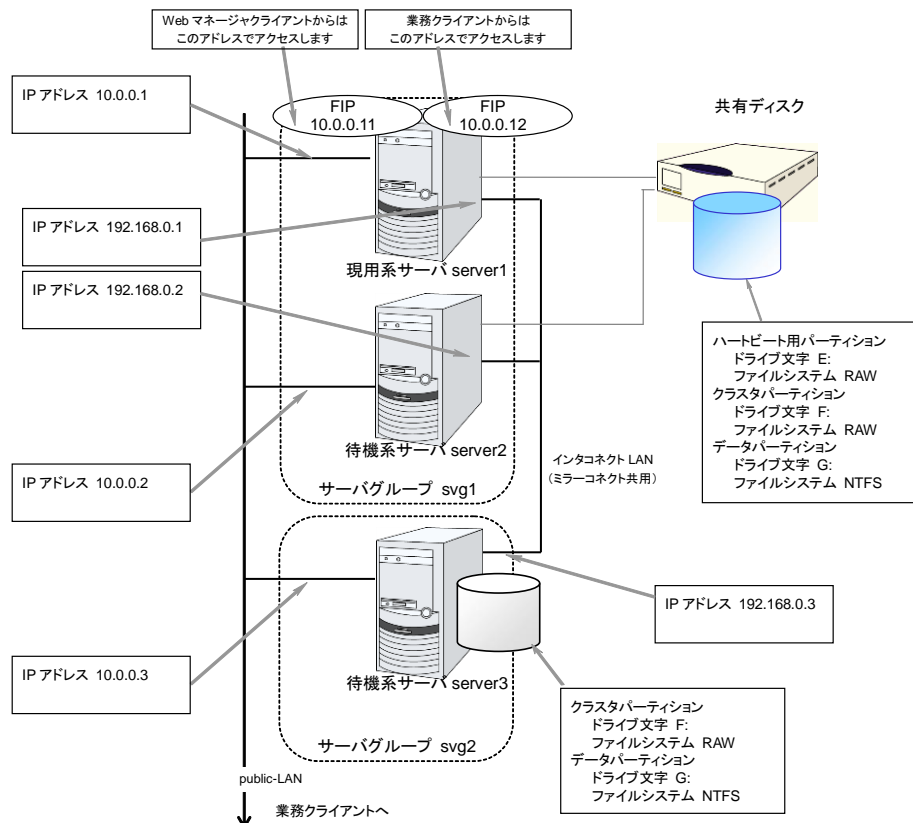


図 2-7 ハイブリッドディスク使用時のクラスタ環境のサンプル

上記は、同じネットワーク内で共有ディスクをミラーリングする場合のクラスタ環境のサンプルです。ハイブリッドディスクでは同じ共有ディスク装置に接続されたサーバグループの間でミラーリングを行います。上記の例では共有ディスクを server3 のローカルディスクにミラーリングするため、待機系サーバグループ svg2 はメンバサーバが server3 ののみとなります。

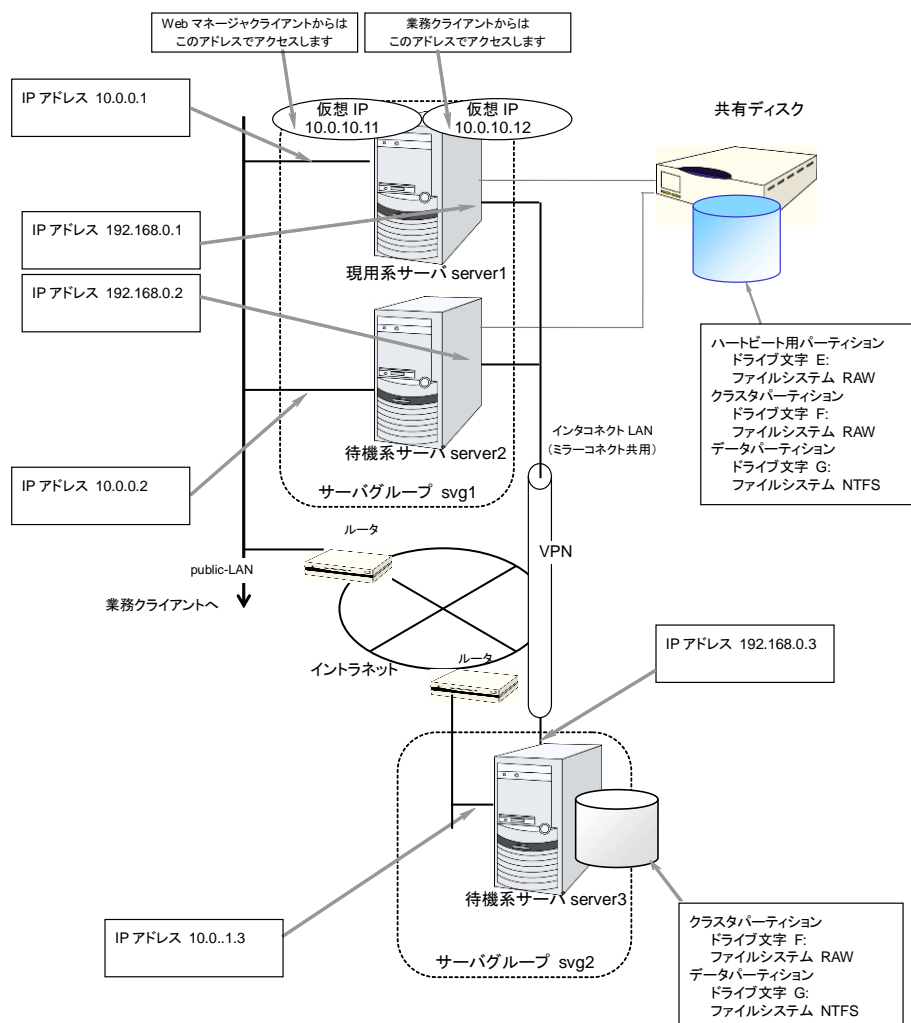


図 2-8 ハイブリッドディスク使用時の遠隔クラスタ環境のサンプル

上記は、リモートサイト間でミラーリングを行う場合のクラスタ環境のサンプルです。この例では Public-LAN のネットワークセグメントがサーバグループ間で異なるため、フローティング IP アドレスではなく仮想 IP アドレスを使用しています。仮想 IP アドレスを使用する場合、途中のルータは全てホストルートを伝播するように設定されている必要があります。また、ミラーのモードを非同期にし、データ圧縮機能を有効にすることをお勧めします。

クラスタオブジェクトとは？

CLUSTERPRO では各種リソースを下のような構成で管理しています。

- ◆ クラスタオブジェクト
一群のサーバをまとめたクラスタシステムです。
- ◆ サーバオブジェクト
実体サーバを示すオブジェクトで、クラスタオブジェクトに属します。
- ◆ サーバグループオブジェクト
サーバを束ねるオブジェクトで、クラスタオブジェクトに属します。ハイブリッドディスクリソースを使用する場合に必要です。
- ◆ ハートビートリソースオブジェクト
実体サーバの NW 部分を示すオブジェクトで、サーバオブジェクトに属します。
- ◆ ネットワークパーティション解決リソースオブジェクト
ネットワークパーティション解決機構を示すオブジェクトで、サーバオブジェクトに属します。
- ◆ グループオブジェクト
仮想のサーバを示すオブジェクトで、クラスタオブジェクトに属します。
- ◆ グループリソースオブジェクト
仮想サーバの持つ資源 (NW、ディスク) を示すオブジェクトでグループオブジェクトに属します。
- ◆ モニタリソースオブジェクト
監視機構を示すオブジェクトで、クラスタオブジェクトに属します。

リソースとは？

CLUSTERPRO では、監視する側とされる側の対象をすべてリソースと呼び、監視する側とされる側のリソースを分類して管理します。このことにより、より明確に監視/被監視の対象を区別できるほか、クラスタ構築や障害検出時の対応が容易になります。リソースはハートビートリソース、ネットワークパーティション解決リソース、グループリソース、モニタリソースの 4 つに分類されます。以下にその概略を示します。

関連情報： 各リソースの詳細については、『リファレンスガイド セクション II』を参照してください。

ハートビートリソース

サーバ間で、お互いの生存を確認するためのリソースです。

以下に現在サポートされているハートビートリソースを示します。

- ◆ LAN ハートビートリソース
Ethernet を利用した通信を示します。
- ◆ BMC ハートビートリソース
BMC 経由で Ethernet を利用した通信を示します。BMC のハードウェアおよびファームウェアが対応している場合のみ利用可能です。

ネットワークパーティション解決リソース

ネットワークパーティション症状を解決するためのリソースを示します。

- ◆ COM ネットワークパーティション解決リソース
COM 方式によるネットワークパーティション解決リソースです。
- ◆ DISK ネットワークパーティション解決リソース
DISK 方式によるネットワークパーティション解決リソースです。共有ディスク構成の場合のみ利用可能です。
- ◆ PING ネットワークパーティション解決リソース
PING 方式によるネットワークパーティション解決リソースです。
- ◆ 多数決ネットワークパーティション解決リソース
多数決方式によるネットワークパーティション解決リソースです。

グループリソース

フェイルオーバーを行う際の単位となる、フェイルオーバーグループを構成するリソースです。

以下に現在サポートされているグループリソースを示します。

- ◆ アプリケーションリソース (appli)
アプリケーション (ユーザ作成アプリケーションを含む) を起動/停止するための仕組みを提供します。
- ◆ フローティング IP リソース (fip)
仮想的な IP アドレスを提供します。クライアントからは一般の IP アドレスと同様にアクセス可能です。
- ◆ ミラーディスクリソース (md)

ローカルディスク上の特定のパーティションのミラーリングとアクセス制御を行う機能を提供します。ミラーディスク構成の場合のみ利用可能です。

- ◆ レジストリ同期リソース (regsync)
クラスタを構成するサーバ間でアプリケーションやサービスを同一設定で動作させるために、複数サーバの特定レジストリを同期する仕組みを提供します。
- ◆ スクリプトリソース (script)
ユーザ作成スクリプト等のスクリプト (BAT) を起動/停止するための仕組みを提供します。
- ◆ ディスクリソース (sd)
共有ディスク上の特定のパーティションのアクセス制御を行う機能を提供します。共有ディスク装置が接続されている場合にのみ利用可能です。
- ◆ サービスリソース (service)
データベースや Web 等のサービスを起動/停止するための仕組みを提供します。
- ◆ プリントスプーラリソース (spool)
プリントスプーラをフェイルオーバーするための機能を提供します
- ◆ 仮想コンピュータ名リソース (vcom)
仮想的なコンピュータ名を提供します。クライアントからは一般のコンピュータ名と同様にアクセス可能です。
- ◆ ダイナミックDNSリソース (ddns)
Dynamic DNS サーバに仮想ホスト名と活性サーバの IP アドレスを登録します。
- ◆ 仮想 IP リソース (vip)
仮想的な IP アドレスを提供します。クライアントからは一般の IP アドレスと同様にアクセス可能です。ネットワークアドレスの異なるセグメント間で遠隔クラスタを構成する場合に使用します。
- ◆ CIFS リソース (cifs)
共有ディスク/ミラーディスク上のフォルダを共有公開するための機能を提供します。
- ◆ NAS リソース (nas)
ファイルサーバ上の共有フォルダをネットワークドライブとしてマウントするための機能を提供します。
- ◆ ハイブリッドディスクリソース (hd)
ディスクリソースとミラーディスクリソースを組み合わせたリソースで、共有ディスクまたはローカルディスク上の特定のパーティションのミラーリングとアクセス制御を行う機能を提供します。
- ◆ 仮想マシンリソース (vm)
仮想マシンの起動、停止、マイグレーションを行います。
- ◆ AWS Elastic IPリソース (awseip)
AWS 上で CLUSTERPRO を利用する場合、EIP を付与する仕組みを提供します。
- ◆ AWS 仮想IPリソース (awsvip)
AWS 上で CLUSTERPRO を利用する場合、VIP を付与する仕組みを提供します。
- ◆ Azure プローブポートリソース (azurepp)
Azure 上で CLUSTERPRO を利用する場合、業務が稼働するノードで特定のポートを開放する仕組みを提供します。

注: ミラーディスクリソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Replicator』 または『CLUSTERPRO X Replicator DR』 のライセンスが必要です。
ハイブリッドディスクリソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Replicator DR』 のライセンスが必要です。
ライセンスが登録されていないリソースは、Builder(オンライン版)の一覧に表示されません。

モニタリソース

クラスタシステム内で、監視を行う主体であるリソースです。

以下に現在サポートされているモニタリソースを示します。

- ◆ アプリケーション監視リソース (appliw)
アプリケーションリソースで起動したプロセスの死活監視機能を提供します。
- ◆ ディスク RW 監視リソース (diskw)
ファイルシステムへの監視機構を提供します。また、ファイルシステム I/O ストール時に意図的な STOP エラーまたは、HW リセットによりフェイルオーバーを実施する機能を提供します。共有ディスクのファイルシステムへの監視にも利用できます。
- ◆ フローティング IP 監視リソース (fipw)
フローティング IP リソースで起動した IP アドレスの監視機構を提供します。
- ◆ IP 監視リソース (ipw)
ネットワークの疎通を監視する機構を提供します
- ◆ ミラーディスク監視リソース (mdw)
ミラーディスクの監視機構を提供します。
- ◆ ミラーコネクタ監視リソース (mdnw)
ミラーコネクタの監視機構を提供します。
- ◆ NIC Link Up/Down 監視リソース (miiw)
LAN ケーブルのリンクステータスの監視機構を提供します。
- ◆ マルチターゲット監視リソース (mtw)
複数のモニタリソースを束ねたステータスを提供します。
- ◆ レジストリ同期監視リソース (regsyncw)
レジストリ同期リソースによる同期処理の監視機構を提供します。
- ◆ ディスク TUR 監視リソース (sdw)
SCSI の [TestUnitReady] コマンドにより共有ディスクへのアクセスパスの動作を監視する機構を提供します。FibreChannel の共有ディスクに対しても使用できます。
- ◆ サービス監視リソース (servicew)
サービスリソースで起動したプロセスの死活監視機能を提供します。
- ◆ プリントスプーラ監視リソース (spoolw)
プリントスプーラリソースで起動したプリントスプーラの監視機構を提供します。
- ◆ 仮想コンピュータ名監視リソース (vcomw)
仮想コンピュータ名リソースで起動した仮想コンピュータの監視機構を提供します。
- ◆ ダイナミックDNS監視リソース (ddnsw)
定期的に Dynamic DNS サーバに仮想ホスト名と活性サーバの IP アドレスを登録します。

- ◆ 仮想 IP 監視リソース (vipw)
仮想 IP リソースで起動した IP アドレスの監視機構を提供します。
- ◆ CIFS 監視リソース (cifsw)
CIFS リソースで公開した共有フォルダの監視機構を提供します。
- ◆ NAS 監視リソース (nasw)
NAS リソースでマウントしたネットワークドライブの監視機構を提供します。
- ◆ ハイブリッドディスク監視リソース (hdw)
ハイブリッドディスクの監視機構を提供します。
- ◆ ハイブリッドディスク TUR 監視リソース (hdtw)
SCSI の [TestUnitReady] コマンドにより、ハイブリッドディスクとして使用する共有ディスク装置へのアクセスパスの動作を監視する機構を提供します。FibreChannel の共有ディスクに対しても使用できます。
- ◆ カスタム監視リソース (genw)
監視処理を行うコマンドやスクリプトがある場合に、その動作結果によりシステムを監視する機構を提供します。
- ◆ プロセス名監視リソース (psw)
プロセス名を指定することで、任意のプロセスの死活監視機能を提供します。
- ◆ DB2 監視リソース (db2w)
IBM DB2 データベースへの監視機構を提供します。
- ◆ ODBC 監視リソース (odbcw)
ODBC でアクセス可能なデータベースへの監視機構を提供します。
- ◆ Oracle 監視リソース (oraclew)
Oracle データベースへの監視機構を提供します。
- ◆ OracleAS 監視リソース (oracleasw)
Oracle アプリケーションサーバへの監視機構を提供します。
- ◆ VB Corp CL 監視リソース (oscw)
ウイルスバスター Corp. クライアントへの監視機構を提供します。
- ◆ VB Corp SV 監視リソース (ossw)
ウイルスバスター Corp. サーバへの監視機構を提供します。
- ◆ PostgreSQL 監視リソース (psqlw)
PostgreSQL データベースへの監視機構を提供します。
- ◆ SQL Server 監視リソース (sqlserverw)
SQL Server データベースへの監視機構を提供します。
- ◆ FTP 監視リソース (ftpw)
FTP サーバへの監視機構を提供します。

- ◆ HTTP 監視リソース (httpw)
HTTP サーバへの監視機構を提供します。
- ◆ IMAP4 監視リソース (imap4w)
IMAP サーバへの監視機構を提供します。
- ◆ POP3 監視リソース (pop3w)
POP サーバへの監視機構を提供します。
- ◆ SMTP 監視リソース (smtpw)
SMTP サーバへの監視機構を提供します。
- ◆ Tuxedo 監視リソース (tuxw)
Tuxedo アプリケーションサーバへの監視機構を提供します。
- ◆ Websphere 監視リソース (wasw)
WebSphere アプリケーションサーバへの監視機構を提供します。
- ◆ Weblogic 監視リソース (wls w)
WebLogic アプリケーションサーバへの監視機構を提供します。
- ◆ WebOTX 監視リソース (otxw)
WebOTX アプリケーションサーバへの監視機構を提供します。
- ◆ 仮想マシン監視リソース (vmw)
仮想マシンリソースで起動した仮想マシンの監視機構を提供します。
- ◆ 外部連携監視リソース (mrw)
”異常発生通知受信時に実行する異常時動作の設定”と”異常発生通知の WebManager 表示”を実現するためのモニタリソースです。
- ◆ JVM 監視リソース (jraw)
Java VM への監視機構を提供します。
- ◆ システム監視リソース (sraw)
プロセス個別のリソース、システム全体のリソース、ディスク使用率の監視機構を提供します。
- ◆ ユーザ空間監視リソース (userw)
ユーザ空間のストール監視機構を提供します。また、ユーザ空間ストール時に意図的な STOP エラーまたは、HW リセットによりフェイルオーバーを実施する機能を提供します。
- ◆ AWS Elastic IP監視リソース (awseipw)
AWS Elastic IPリソースで付与した Elastic IP(以下、EIP)の監視機構を提供します。
- ◆ AWS 仮想IP監視リソース (awsvipw)
AWS 仮想IPリソースで付与した仮想IP(以下、VIP)の監視機構を提供します。
- ◆ AWS AZ監視リソース (awsazw)
Availability Zone(以下、AZ) の監視機構を提供します。
- ◆ Azure プローブポート監視リソース (azureppw)
Azure プローブポートリソースが起動しているノードに対して、死活監視のためのポートの監視機構を提供します。
- ◆ Azure ロードバランス監視リソース (azurelbw)
Azure プローブポートリソースが起動していないノードに対して、プローブ ポートと同じポート番号が開放されていないかの監視機構を提供します。

注: DB2 監視リソース、ODBC 監視リソース、Oracle 監視リソース、PostgreSQL 監視リソース、SQL Server 監視リソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Database Agent』のライセンスが必要です。

FTP 監視リソース、HTTP 監視リソース、IMAP4 監視リソース、POP3 監視リソース、SMTP 監視リソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Internet Server Agent』のライセンスが必要です。

OracleAS 監視リソース、Tuxedo 監視リソース、Weblogic 監視リソース、Websphere 監視リソース、WebOTX 監視リソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Application Server Agent』のライセンスが必要です。

VB Corp CL 監視リソース、VB Corp SV 監視リソースを使用するためには、『CLUSTERPRO X Anti-Virus Agent』のライセンスが必要です。

JVM 監視リソースを使用するためには『CLUSTERPRO X Java Resource Agent』のライセンスが必要です。

システム監視リソースを使用するためには『CLUSTETRPRO X System Resoruce Agent』のライセンスが必要です。

ライセンスが登録されていない監視リソースは、Builder(オンライン版)の一覧に表示されません。

CLUSTERPRO を始めよう!

以上で CLUSTERPRO の簡単な説明が終了しました。

以降は、以下の流れに従い、対応するガイドを読み進めながら CLUSTERPRO を使用したクラスタシステムの構築を行ってください。

最新情報の確認

本ガイドのセクション II 『リリースノート (CLUSTERPRO 最新情報)』を参照してください。

クラスタシステムの設計

『インストール&設定ガイド』の「セクション I クラスタシステムの設計」および

『リファレンスガイド』の「セクション II リソース詳細」を参照してください。

クラスタシステムの構築

『インストール&設定ガイド』の全編を参照してください。

クラスタシステムの運用開始後の障害対応

『リファレンスガイド』の「セクション III メンテナンス情報」を参照してください。

セクション II リリースノート (CLUSTERPRO 最新情報)

このセクションでは、CLUSTERPRO の最新情報を記載します。サポートするハードウェアやソフトウェアについての最新の詳細情報を記載します。また、制限事項や、既知の問題とその回避策についても説明します。

- 第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境
- 第 4 章 最新バージョン情報
- 第 5 章 注意制限事項

第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境

本章では、CLUSTERPRO の動作環境について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

• ハードウェア動作環境	62
• CLUSTERPRO Server の動作環境	63
• Builder の動作環境	85
• WebManager の動作環境	89
• 統合 WebManager の動作環境	92
• WebManager Mobile の動作環境	95

ハードウェア動作環境

CLUSTERPRO は以下のアーキテクチャのサーバで動作します。

- ◆ IA32
- ◆ x86_64

必要スペック

CLUSTERPRO Server に必要なスペックは下記の通りです。

- ◆ RS-232C ポート 1 つ (3 ノード以上のクラスタを構築する場合は不要)
- ◆ Ethernet ポート 2 つ以上
- ◆ 共有ディスク、ミラー用ディスクまたはミラー用空きパーティション (ミラーディスクを使用する場合)
- ◆ CD-ROM ドライブ

オフラインで Builder を使用する場合は、クラスタ構成情報のやりとりのため以下のいずれかが必要です (オンラインの場合は不要)。

- ◆ FD ドライブや USB メモリなどのリムーバブルメディア
- ◆ CLUSTERPRO Server をインストール済のサーバマシンとファイルを共有する手段

Express5800/A1080a,A1040a シリーズとの連携に対応したサーバ

BMC ハートビートリソースおよび外部連携モニタリソースの Express5800/A1080a,A1040a シリーズ連携機能が利用可能なサーバは下記の通りです。本機能は下記のサーバ以外では利用できません。

サーバ	備考
Express5800/A1080a-E	最新のファームウェアにアップデートしてください。
Express5800/A1080a-D	最新のファームウェアにアップデートしてください。
Express5800/A1080a-S	最新のファームウェアにアップデートしてください。
Express5800/A1040a	最新のファームウェアにアップデートしてください。

CLUSTERPRO Server の動作環境

対応 OS

CLUSTERPRO は、下記の OS に対応しています。

IA32 版

OS	備考
Microsoft Windows Server 2003, Standard Edition Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Standard Edition R2 Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition R2 Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2008 Standard Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 Standard Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Service Pack 2	

x86_64 版

OS	備考
Microsoft Windows Server 2003, Standard x64 Edition Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Enterprise x64 Edition Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Standard x64 Edition R2 Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2003, Enterprise x64 Edition R2 Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2008 Standard Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 Standard Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Service Pack 2	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter Service Pack 1	
Microsoft Windows Server 2012 Standard	
Microsoft Windows Server 2012 Datacenter	
Microsoft Windows Server 2012 R2 Standard	
Microsoft Windows Server 2012 R2 Datacenter	
Microsoft Windows Server 2016 Standard	
Microsoft Windows Server 2016 Datacenter	

必要メモリ容量とディスクサイズ

	必要メモリサイズ		必要ディスクサイズ		備考
	ユーザモード	kernel モード	インストール直後	運用時最大	
IA32 版	192MB(*1)	32MB + 4MB(*2) × (ミラーディス クリソース数+ハイブリッ ドディスクリソース数)	34MB	1290MB	
X86_64 版	256MB(*1)	32MB + 4MB(*2) × (ミラーディス クリソース数+ハイブリッ ドディスクリソース数)	41MB	1300MB	

(*1) オプション類を除く

(*2) ミラーディスクリソースおよびハイブリッドディスクリソース使用時に必要なメモリサイズです。

非同期方式に変更時やキューサイズ変更時は、構成時に指定したサイズのメモリが追加で必要になります。また、ミラーディスクへの I/O に対応してメモリを使用するため、ディスク負荷の増加にともない使用するメモリサイズも増加します。

監視オプションの動作確認済アプリケーション情報

監視オプションは、下記のアプリケーションを監視対象として動作確認しています。

IA32 版

モニタリソース	監視対象の アプリケーション	CLUSTERPRO Version	備考
Oracle 監視	Oracle 10g Release 2 (10.2)	11.00~	
	Oracle 11g Release 1 (11.1)	11.00~	
	Oracle 11g Release 2 (11.2)	11.00~	
DB2 監視	DB2 V9.5	11.00~	
	DB2 V9.7	11.00~	
	DB2 V10.1	11.13~	
	DB2 V10.5	11.19~	
PostgreSQL 監視	PostgreSQL 8.1	11.00~	
	PostgreSQL 8.2	11.00~	
	PostgreSQL 8.3	11.00~	

	PostgreSQL 8.4	11.00~	
	PostgreSQL 9.0	11.03~	
	PostgreSQL 9.1	11.13~	
	PostgreSQL 9.2	11.17~	
	PostgreSQL 9.3	11.19~	
	PostgreSQL 9.4	11.30~	
	PostgreSQL 9.5	11.33~	
	PostgreSQL 9.6	11.34~	
	PowerGres on Windows V6.0	11.00~	
	PowerGres on Windows V6.1	11.00~	
	PowerGres on Windows V6.2	11.00~	
	PowerGres on Windows V6.3	11.00~	
	PowerGres on Windows V7.0	11.00~	
	PowerGres on Windows V7.1	11.00~	
	PowerGres on Windows V9.0	11.03~	
SQL Server 監視	SQL Server 2005	11.00~	
	SQL Server 2008	11.00~	
	SQL Server 2008 R2	11.00~	
	SQL Server 2012	11.13~	
	SQL Server 2014	11.13~	
Tuxedo 監視	Tuxedo 10g R3	11.00~	
	Tuxedo 11g R1	11.10~	
	Tuxedo 12c Release 2 (12.1.3)	11.32~	

OracleAS 監視	Oracle Application Server 10g Release 3 (10.1.3)	11.00~	
	Oracle Application Server 10g Release 3 (10.1.4)	11.00~	
Weblogic 監視	WebLogic Server 10g R3	11.00~	
	WebLogic Server 11g R1	11.00~	
	WebLogic Server 11g R2	11.00~	
	WebLogic Server 12c Release 1 (12.1.1)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 2 (12.1.2)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 3 (12.1.3)	11.13~	
	WebLogic Server 12c R2 (12.2.1)	11.33~	
Websphere 監視	WebSphere 6.1	11.00~	
	WebSphere 7.0	11.00~	
	WebSphere 8.0	11.15~	
	WebSphere 8.5	11.18~	
	WebSphere 8.5.5	11.34~	
	WebSphere 9.0	11.34~	
WebOTX 監視	WebOTX V8.0	11.00~	
	WebOTX V8.1	11.00~	
	WebOTX V8.2	11.00~	
	WebOTX V8.3	11.03~	
	WebOTX V8.4	11.10~	
	WebOTX V9.1	11.1a~	
	WebOTX V9.2	11.21~	
	WebOTX V9.3	11.32~	

	WebOTX V9.4	11.34~	
VB Corp CL 監視	ウイルスバスター コーポレートエディション 10.5	11.00~11.04	
VB Corp SV 監視			
JVM監視	WebLogic Server 11g R1	11.10~	
	WebLogic Server 12c Release 1 (12.1.1)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 2 (12.1.2)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 3 (12.1.3)	11.13~	
	WebLogic Server 12c R2 (12.2.1)	11.33~	
	WebOTX V8.2	11.10~	
	WebOTX V8.3	11.10~	
	WebOTX V8.4	11.10~	
	WebOTX V9.1	11.1a~	
	WebOTX V9.2	11.21~	プロセスグループ監視にはWebOTX updateが必要
	WebOTX V9.3	11.32~	
	WebOTX V9.4	11.34~	
	WebOTX Enterprise Service Bus V8.4	11.13~	
	WebOTX Enterprise Service Bus V8.5	11.15~	
	Apache Tomcat 6.0	11.13~	
	Apache Tomcat 7.0	11.13~	
	Apache Tomcat 8.0	11.32~	
	Apache Tomcat 8.5	11.34~	
	WebSAM SVF for PDF 9.0	11.13~	

	WebSAM SVF for PDF 9.1	11.14~	
	WebSAM SVF for PDF 9.2	11.32~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.0	11.13~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.1	11.15~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.2	11.32~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.0	11.13~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.1	11.15~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.2	11.32~	
システム監視	バージョン指定無し	11.10~	

x86_64 版

モニタリソース	監視対象のアプリケーション	CLUSTERPRO Version	備考
Oracle 監視	Oracle 10g Release 2 (10.2)	11.00~	
	Oracle 11g Release 1 (11.1)	11.00~	
	Oracle 11g Release 2 (11.2)	11.00~	
	Oracle 12c Release 1 (12.1)	11.19~	
	Oracle 12c Release 2 (12.2)	11.35~	
DB2 監視	DB2 V9.5	11.00~	
	DB2 V9.7	11.00~	
	DB2 V10.1	11.13~	
	DB2 V10.5	11.19~	
	DB2 V11.1	11.34~	
PostgreSQL 監視	PostgreSQL 9.0	11.03~	
	PostgreSQL 9.1	11.13~	
	PostgreSQL 9.2	11.17~	
	PostgreSQL 9.3	11.19~	
	PostgreSQL 9.4	11.30~	
	PostgreSQL 9.5	11.33~	
	PostgreSQL 9.6	11.34~	
	PowerGres on Windows V9.0	11.03~	
	PowerGres on Windows V9.1	11.19~	

	PowerGres on Windows V9.4	11.30~	
SQL Server 監視	SQL Server 2005	11.00~	
	SQL Server 2008	11.00~	
	SQL Server 2008 R2	11.00~	
	SQL Server 2012	11.13~	
	SQL Server 2014	11.13~	
	SQL Server 2016	11.33~	
Tuxedo 監視	Tuxedo 11g R1	11.10~	
	Tuxedo 12c Release 2 (12.1.3)	11.32~	
Weblogic 監視	WebLogic Server 10g R3	11.00~	
	WebLogic Server 11g R1	11.00~	
	WebLogic Server 11g R2	11.00~	
	WebLogic Server 12c Release 1 (12.1.1)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 2 (12.1.2)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 3 (12.1.3)	11.13~	
	WebLogic Server 12c R2 (12.2.1)	11.33~	
Websphere 監視	WebSphere 6.1	11.00~	
	WebSphere 7.0	11.00~	
	WebSphere 8.0	11.15~	
	WebSphere 8.5	11.18~	
	WebSphere 8.5.5	11.34~	

	WebSphere 9.0	11.34~	
WebOTX 監視	WebOTX V8.0	11.00~	
	WebOTX V8.1	11.00~	
	WebOTX V8.2	11.00~	
	WebOTX V8.3	11.03~	
	WebOTX V8.4	11.10~	
	WebOTX V9.1	11.1a~	
	WebOTX V9.2	11.21~	
	WebOTX V9.3	11.32~	
	WebOTX V9.4	11.34~	
	WebOTX V9.5	11.35~	
VB Corp CL 監視	ウイルスバスター コーポレートエディション 10.5	11.00~11.04	
VB Corp SV 監視			
JVM監視	WebLogic Server 11g R1	11.10~	
	WebLogic Server 12c Release 1 (12.1.1)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 2 (12.1.2)	11.13~	
	WebLogic Server 12c Release 3 (12.1.3)	11.13~	
	WebLogic Server 12c R2 (12.2.1)	11.33~	
	WebOTX V8.2	11.10~	
	WebOTX V8.3	11.10~	
	WebOTX V8.4	11.10~	
	WebOTX V9.1	11.1a~	

	WebOTX V9.2	11.21~	プロセスグループ監視にはWebOTX updateが必要
	WebOTX V9.3	11.32~	
	WebOTX V9.4	11.34~	
	WebOTX V9.5	11.35~	
	WebOTX Enterprise Service Bus V8.4	11.13~	
	WebOTX Enterprise Service Bus V8.5	11.15~	
	Apache Tomcat 6.0	11.13~	
	Apache Tomcat 7.0	11.13~	
	Apache Tomcat 8.0	11.32~	
	Apache Tomcat 8.5	11.34~	
	WebSAM SVF for PDF 9.0	11.13~	
	WebSAM SVF for PDF 9.1	11.14~	
	WebSAM SVF for PDF 9.2	11.32~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.0	11.13~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.1	11.15~	
	WebSAM Report Director Enterprise 9.2	11.32~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.0	11.13~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.1	11.15~	
	WebSAM Universal Connect/X 9.2	11.32~	
システム監視	バージョン指定無し	11.10~	

注: x86_64 環境で監視オプションをご利用される場合、監視対象のアプリケーションも x86_64 版のアプリケーションをご利用ください。

仮想マシンリソースの動作環境

仮想マシンリソースの動作確認を行った仮想化基盤のバージョン情報を下記に提示します。

仮想化基盤	バージョン	備考
Hyper-V	Hyper-V 1.0	
	Hyper-V 2.0	
	Windows Server 2012 Hyper-V	
	Windows Server 2012 R2 Hyper-V	

注：仮想マシンリソースは Windows Server 2016 上では動作しません。

SNMP 連携機能の動作環境

SNMP 連携機能の動作確認を行った OS を下記に提示します。

IA32 版

OS	CLUSTERPRO Version	備考
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 2	11.10~	
Microsoft Windows Server 2003 R2 Service Pack 2	11.10~	
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 2	11.10~	

x86_64 版

OS	CLUSTERPRO Version	備考
Microsoft Windows Server 2003 x64 Edition Service Pack 2	11.10~	
Microsoft Windows Server 2003 x64 Edition R2 Service Pack 2	11.10~	
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 2	11.10~	
Microsoft Windows Server 2008 R2 Service Pack 1	11.10~	
Microsoft Windows Server 2012	11.17~	

注: IPv6 による SNMP 情報取得は、Microsoft Windows Server 2008 以降でご利用ください。

JVM監視の動作環境

JVM 監視を使用する場合には、Java 実行環境が必要です。

Java(TM) Runtime Environment
Version6.0 Update 21 (1.6.0_21) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version7.0 Update 6 (1.7.0_6) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version8.0 Update 11 (1.8.0_11) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version9.0 (1.9.0) 以降

JVM 監視 ロードバランサ連携機能(BIG-IP Local Traffic Manager と連携する場合)を使用するには、Microsoft .NET Framework の実行環境が必要です。

Microsoft .NET Framework 3.5 Service Pack 1

Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 日本語 Language Pack

JVM 監視 ロードバランサ連携機能の動作確認を行ったロードバランサを下記に提示します。

IA32 版

ロードバランサ	CLUSTERPRO Version	備考
Express5800/LB400h以降	11.10~	
InterSec/LB400i 以降	11.10~	
InterSecVM/LB V1.0 以降 ※Rel1.0以降適用時のみ	11.10~	
BIG-IP v11	11.13~	
MIRACLE LoadBalancer	11.13~	
CoyotePoint Equalizer	11.13~	

x86_64 版

ロードバランサ	CLUSTERPRO Version	備考
Express5800/LB400h以降	11.10~	
InterSec/LB400i 以降	11.10~	
InterSecVM/LB V1.0 以降 ※Rel1.0以降適用時のみ	11.10~	
BIG-IP v11	11.13~	

MIRACLE LoadBalancer	11.13~	
CoyotePoint Equalizer	11.13~	

システム監視及びシステムリソース情報を収集する機能の動作環境

System Resource Agent を使用するには、Microsoft .NET Framework の実行環境が必要です。

Microsoft .NET Framework 3.5 Service Pack 1

Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 日本語 Language Pack

注 1: Microsoft .NET Framework のバージョンは、必ず 3.5 を使用してください。

注 2: 環境により、Microsoft .NET Framework 3.5 Service Pack 1 をインストールすると、自動で Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 日本語 Language Pack がインストールされる場合があります。

Windows Server 2008 R2 でのインストール手順

[スタート] メニュー → [管理ツール] → [サーバー マネージャー]

上記手順で、[サーバー マネージャー] が表示されますので、[操作(A)] を選択し、表示されたメニューから [機能の追加] を選択してください。

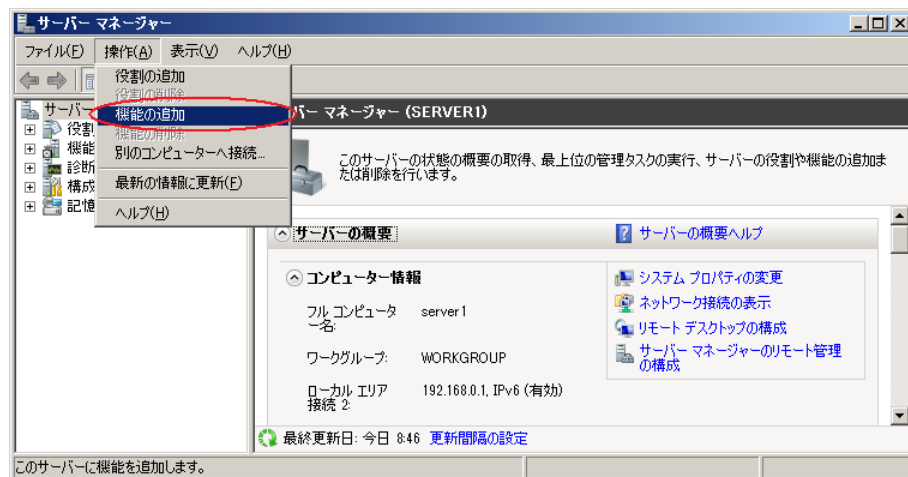


図 1 サーバー マネージャー画面

[機能の追加ウィザード] が表示されますので、[.Net Framework 3.5.1 の機能] にチェックを入れ、画面の指示にしたがい、インストールしてください。

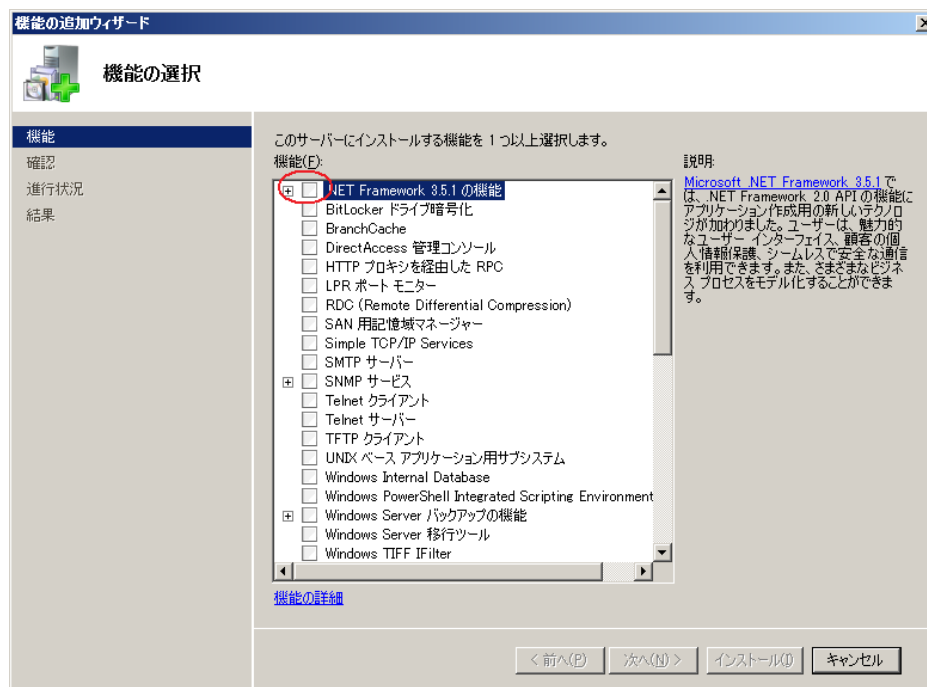


図 2 機能の追加ウィザード

.Net Framework 3.5 がインストールされているかどうかは [機能の削除ウィザード] で確認できます。

[サーバー マネージャー] 画面で、[操作(A)] を選択し、表示されたメニューから [機能の削除] を選択すると下記画面が表示されます。

[.Net Framework 3.5.1 の機能] がチェックできる場合、インストールされています。

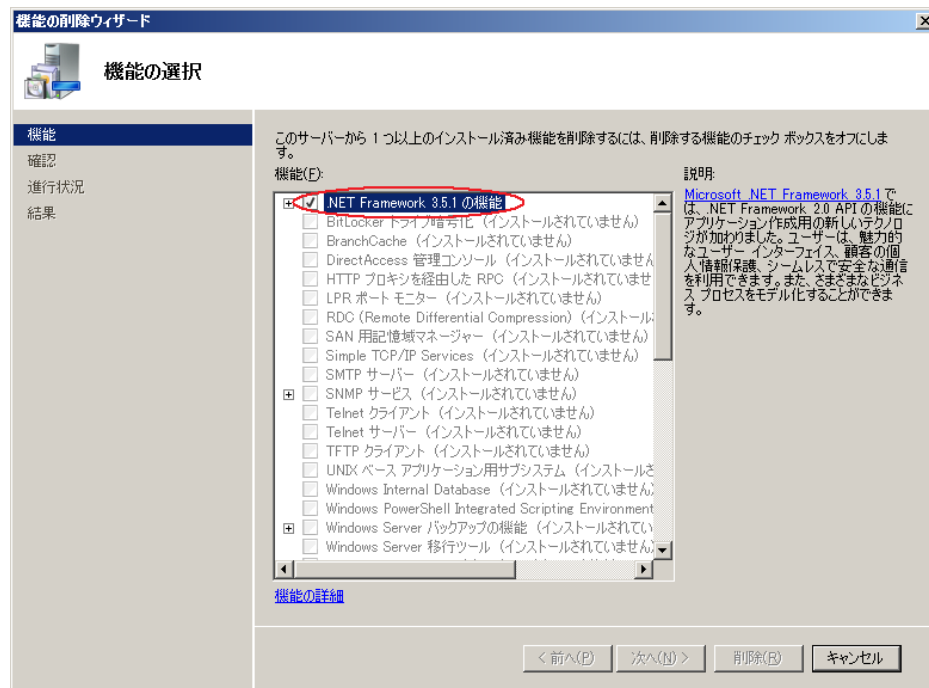


図 3 機能の削除ウィザード

System Resource Agent を Windows Server 2008 R2 に導入する場合、Microsoft が提供している以下のパッチを適用する必要があります。

パッチ番号: KB981314

以下の URL からパッチを取得し、適用してください。

<http://support.microsoft.com/kb/981314/ja>

Windows Server 2012 でのインストール手順

サーバがインターネットにつながらない状態の場合、OS のインストール媒体を用意してください。インターネットにつながる状態の場合は必要ありません。

[サーバー マネージャー] を起動し、[ダッシュボード] 画面で[クイックスタート] を選択してください。

表示されたメニューから[②役割と機能の追加] を選択し、[役割と機能の追加ウィザード] を表示します。

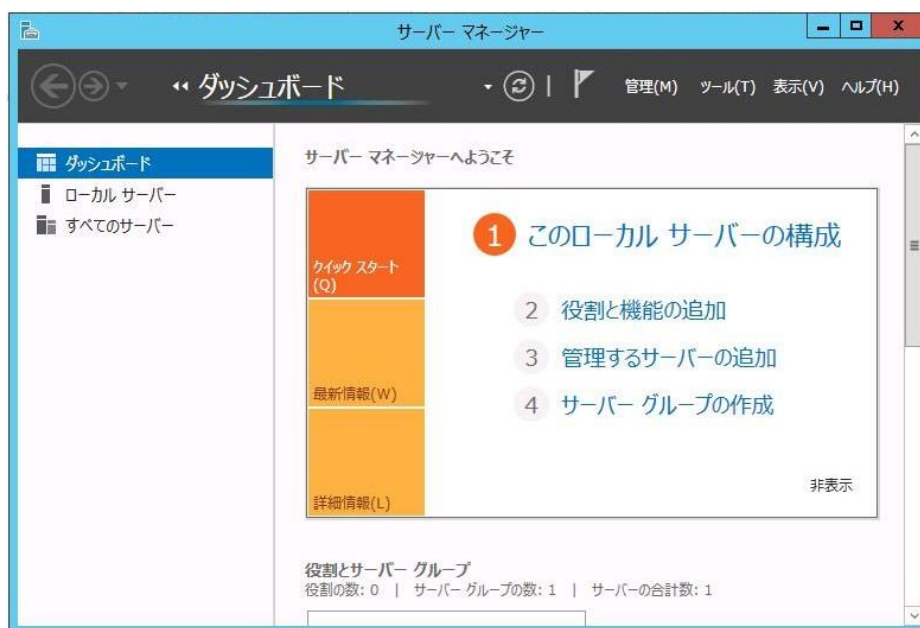


図 4 サーバーマネージャー

[開始する前に] 画面が表示された場合、[次へ] をクリックします。

[インストールの種類] 画面で[役割ベースまたは機能ベースのインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。

[サーバーの選択] 画面で[サーバー プールからサーバーを選択] を選択し、一覧から対象サーバを選択して[次へ] をクリックします。

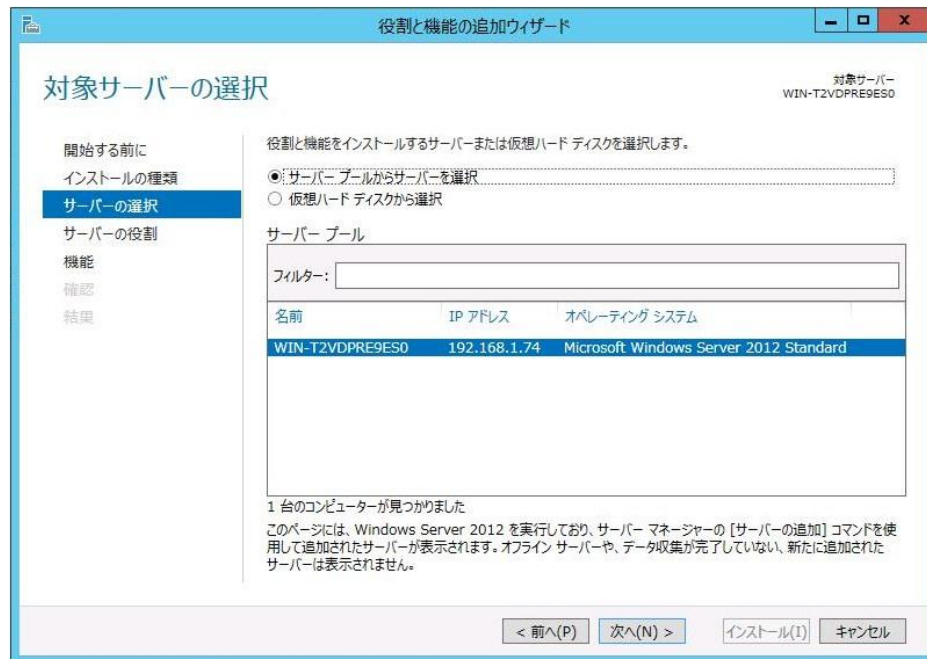


図 5 対象サーバの選択

[サーバーの役割] 画面で[次へ] をクリックしてください。

[機能] 画面で[.Net Framework 3.5 Features] にチェックを入れ、[次へ] をクリックします。



図 6 機能の選択

サーバがインターネットにつながる状態の場合、[確認] 画面で[インストール] をクリックし、.Net Framework 3.5 をインストールしてください。

サーバがインターネットにつながらない状態の場合、[確認] 画面で[代替ソースパスの指定] を選択してください。

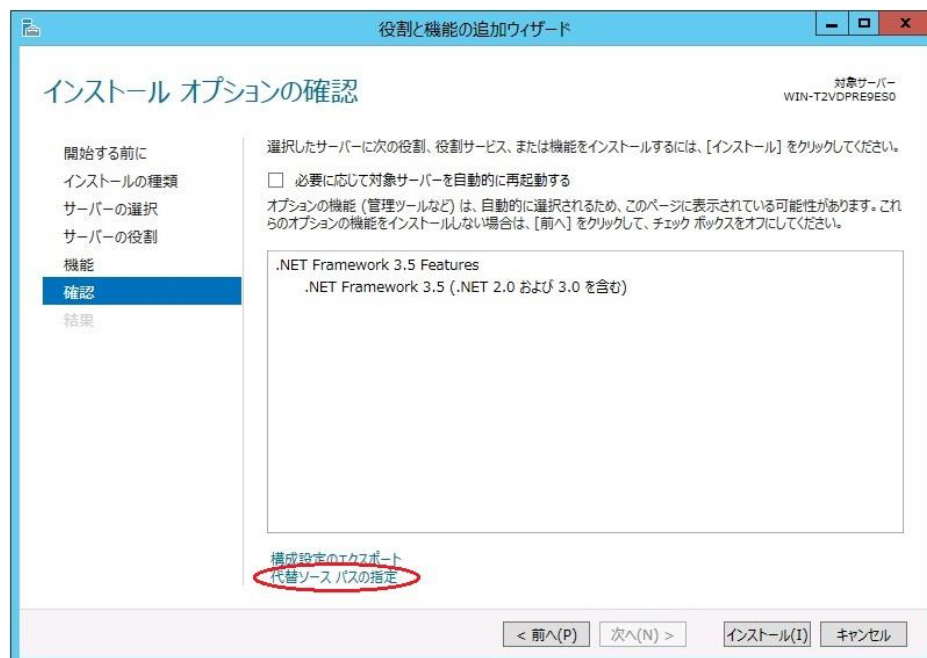


図 7 インストール オプションの確認

表示された画面の説明を参考に[パス] 欄へ OS インストール媒体のパスを指定し、[OK] をクリックしてください。その後[インストール] をクリックし、.Net Framework 3.5 をインストールしてください。

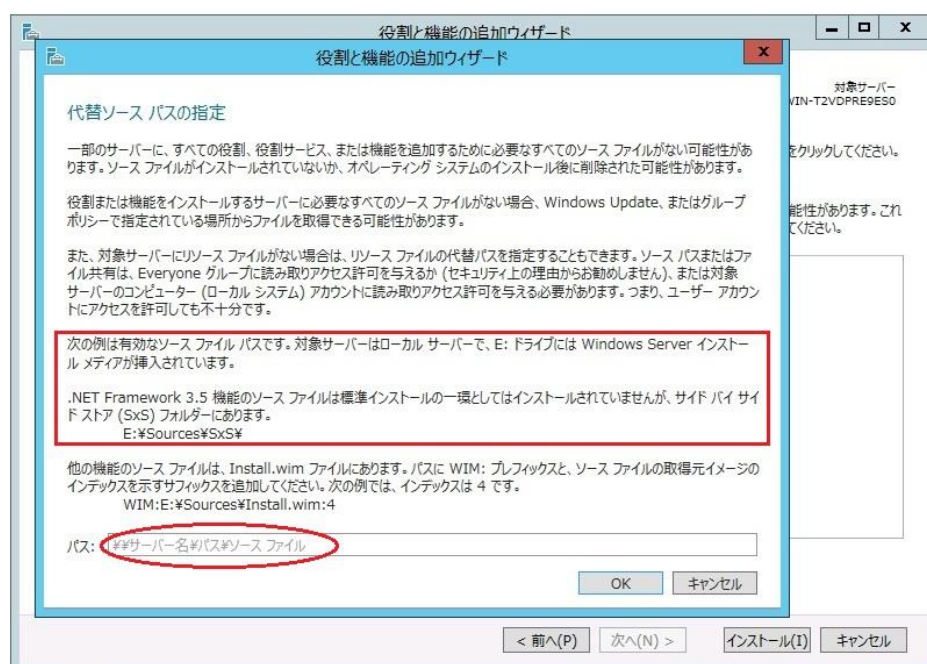


図 8 代替ソース パスの指定

AWS Elastic IPリソース、AWS 仮想IPリソース、AWS Elastic IP監視リソース、AWS 仮想IP監視リソース、AWS AZ監視リソースの動作環境

AWS Elastic IP リソース、AWS 仮想 IP リソース、AWS Elastic IP 監視リソース、AWS 仮想 IP 監視リソース、AWS AZ 監視リソースを使用する場合には、以下のソフトウェアが必要です。

ソフトウェア	Version	備考
AWS CLI	1.6.0~	
Python	2.7.5~	3.*系は不可

AWS Elastic IP リソース、AWS 仮想 IP リソース、AWS Elastic IP 監視リソース、AWS 仮想 IP 監視リソース、AWS AZ 監視リソースの動作確認を行った AWS 上の OS のバージョン情報を下記に提示します。

x86_64

ディストリビューション	CLUSTERPRO Version	備考
Microsoft Windows Server 2012	11.30~	
Microsoft Windows Server 2012 R2	11.30~	
Microsoft Windows Server 2016	11.34~	

Azure プローブポートリソース、Azure プローブポート監視リソース、Azure ロードバランス監視リソースの動作環境

Azure プローブポートリソース、Azure プローブポート監視リソース、Azure ロードバランス監視リソースの動作確認を行った Microsoft Azure 上の OS のバージョン情報を下記に提示します。

x86_64

ディストリビューション	CLUSTERPRO Version	備考
Microsoft Windows Server 2012	11.30~	
Microsoft Windows Server 2012 R2	11.30~	
Microsoft Windows Server 2016	11.34~	

Azure プローブポートリソースの動作確認を行った Microsoft Azure 上のデプロイモデルを下記に提示します。ロードバランサーの追加方法は Microsoft のドキュメント (<https://azure.microsoft.com/ja-jp/documentation/articles/load-balancer-arm/>)を参照してください。

x86_64

デプロイモデル	CLUSTERPRO Version	備考
クラシック	11.30~	
リソースマネージャー	11.33~	ロードバランサー の追加が必要

SAP連携コネクタの動作環境

SAP 連携コネクタの動作確認を行った OS および SAP NetWeaver(以降、SAP NW) のバージョン情報を下記に提示します。

x86_64

SAP NW Version	CLUSTERPRO Version	OS	クラスタ構成	備考
7.4	11.32~	Microsoft Windows Server 2012	SAN接続、共有ディスク型 ミラーディスク型	
7.5	11.33~	Microsoft Windows Server 2012 R2		
	11.35~	Microsoft Windows Server 2016		

SAP NW のハードウェア要件およびソフトウェア要件は、SAP NW のドキュメントを参照してください。

Builder の動作環境

CLUSTERPRO Builder を動作させるために必要な環境について記載します。

動作確認済 OS、ブラウザ

最新情報は CLUSTERPRO のホームページで公開されている最新ドキュメントを参照してください。現在の対応状況は下記の通りです。

OS	ブラウザ	言語
Microsoft Windows XP Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows XP Service Pack 3 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 1 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Micorsoft Windows 7	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 7 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 40.0.3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8.1	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 47.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 49.0.2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 10	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 46.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 1	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 R2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 R2 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語

Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 2	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2 Service Pack 1	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012 R2	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2016	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 48.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語

注:x86_64 のマシン上で Builder を動作させるには 32bit 用のブラウザを使用する必要があります。

注: Internet Explorer 9 以降をご利用の場合、http://<IP アドレス>:29003 で接続する場合、事前に該当の IP アドレスを [ローカル イントラネット] の [サイト] に登録する必要があります。

Java 実行環境

Builder を使用する場合には、Java 実行環境が必要です。

Java(TM) Runtime Environment
Version6.0 Update 21 (1.6.0_21) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version7.0 Update 2 (1.7.0_2) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version8.0 Update 5 (1.8.0_5) 以降

注:x86_64 のマシン上で Builder を動作させるには 32bit 用の Java Runtime を使用する必要があります。

注:バージョン 3.1.8-1 以前のオフライン版 Builder は Java Runtime Environment Version 7 Update 25 で動作しません。

注:オフライン版 Builder は Java Runtime Environment Version 7 Update 45 で動作しません。

必要メモリ容量/ディスク容量

必要メモリ容量 32MB 以上

必要ディスク容量 5MB (Java 実行環境を除く)

対応する CLUSTERPRO の内部バージョン

オフライン版 Builder のバージョンと CLUSTERPRO の内部バージョンは下記の対応表の組み合わせで使用してください。それ以外の組み合わせで使用すると正常に動作しない可能性があります。

オフライン版Builderのバージョン	CLUSTERPROの内部バージョン
3.0.0-1	11.00
	11.01
3.0.2-1	11.02
3.0.3-1	11.03
	11.04
3.1.0-1	11.10
3.1.1-1	11.11
3.1.3-1	11.13
3.1.4-1	11.14
3.1.5-1	11.15
	11.16
3.1.7-1	11.17
3.1.8-1	11.18
	11.19
3.1.10-1	11.1a
3.1.11-1	11.1b
3.2.0-1	11.20

3.2.1-1	11.21
	11.22
	11.23
3.3.0-1	11.30
3.3.1-1	11.31
3.3.2-1	11.32
3.3.3-1	11.33
3.3.4-1	11.34
3.3.5-1	11.35

WebManager の動作環境

CLUSTERPRO WebManager を動作させるために必要な環境について記載します。

動作確認済 OS、ブラウザ

最新情報は CLUSTERPRO のホームページで公開されている最新ドキュメントを参照してください。現在の対応状況は下記の通りです。

OS	ブラウザ	言語
Microsoft Windows XP Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows XP Service Pack 3 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 1 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Micorsoft Windows 7	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 7 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 40.0.3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8.1	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 47.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 49.0.2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 10	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 46.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 1	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 R2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 R2 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語

Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 2	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2 Service Pack 1	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012 R2	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2016	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 48.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語

注: x86_64 のマシン上で WebManager を動作させるには 32bit 用のブラウザを使用する必要があります。

注: Internet Explorer 9 以降をご利用の場合、http://<IP アドレス>:29003 で接続する場合、事前に該当の IP アドレスを [ローカル イントラネット] の [サイト] に登録する必要があります。

Java 実行環境

WebManager を使用する場合には、Java 実行環境が必要です。

Java(TM) Runtime Environment
Version6.0 Update 21 (1.6.0_21) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version7.0 Update 2 (1.7.0_2) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version8.0 Update 5 (1.8.0_5) 以降

注:x86_64 のマシン上で WebManager を動作させるには 32bit 用の Java Runtime を使用する必要があります。

必要メモリ容量/ディスク容量

必要メモリ容量 40MB 以上

必要ディスク容量 300KB 以上 (Java 実行環境に必要な容量を除く)

統合 WebManager の動作環境

Java アプレット版の 統合 WebManager を動作させるために必要な環境について記載します。Java アプリケーション版の 統合 WebManager については、『統合 WebManager 管理者ガイド』を参照してください。

動作確認済 OS、ブラウザ

最新情報は CLUSTERPRO のホームページで公開されている最新ドキュメントを参照してください。現在の対応状況は下記の通りです。

OS	ブラウザ	言語
Microsoft Windows XP Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows XP Service Pack 3 (IA32のみ)	Internet Explorer 6 Service Pack 3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 1 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Vista Service Pack 2 (IA32のみ)	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Micorsoft Windows 7	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 7 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 40.0.3	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 8.1	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 47.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 49.0.2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows 10	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 46.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 1	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2003 R2	Internet Explorer 6 Service Pack 1	日本語/英語/中国語

Microsoft Windows Server 2003 R2 Service Pack 2	Internet Explorer 6 Service Pack 2	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 1	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 Service Pack 2	Internet Explorer 7	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2008 R2 Service Pack 1	Internet Explorer 8	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 9	日本語/英語/中国語
	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012	Internet Explorer 10	日本語/英語/中国語
	Firefox 15	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2012 R2	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 41.0	日本語/英語/中国語
Microsoft Windows Server 2016	Internet Explorer 11	日本語/英語/中国語
	Firefox 48.0	日本語/英語/中国語
	Firefox 50.1.0	日本語/英語/中国語

注:x86_64 のマシン上で 統合 WebManager を動作させるには 32bit 用のブラウザを使用する必要があります。

注: Internet Explorer 9 以降をご利用の場合、<http://<IP アドレス>:29003> で接続する場合、事前に該当の IP アドレスを [ローカル イントラネット] の [サイト] に登録する必要があります。

Java 実行環境

統合 WebManager を使用する場合には、Java 実行環境が必要です。

Java(TM) Runtime Environment
Version6.0 Update 21 (1.6.0_21) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version7.0 Update 2 (1.7.0_2) 以降

Java(TM) Runtime Environment
Version8.0 Update 5 (1.8.0_5) 以降

注:x86_64 のマシン上で 統合 WebManager を動作させるには 32bit 用の Java Runtime を使用する必要があります。

必要メモリ容量/ディスク容量

必要メモリ容量 40MB 以上

必要ディスク容量 300KB 以上 (Java 実行環境に必要な容量を除く)

WebManager Mobile の動作環境

WebManager Mobile を動作させるために必要な環境について記載します。

動作確認済OS、ブラウザ

現在の対応状況は下記の通りです。

OS	ブラウザ	言語
Android	ブラウザ(標準)	日本語/英語/中国語
iOS	Safari(標準)	日本語/英語/中国語

第 4 章 最新バージョン情報

本章では、CLUSTERPRO の最新情報について説明します。新しいリリースで強化された点、改善された点などをご紹介します。

• CLUSTERPRO とマニュアルの対応一覧	98
• 最新バージョン	99
• 機能強化情報	100

CLUSTERPRO とマニュアルの対応一覧

本書では下記のバージョンの CLUSTERPRO を前提に説明してあります。CLUSTERPRO のバージョンとマニュアルの版数に注意してください。

CLUSTERPROの 内部バージョン	マニュアル	版数	備考
11.35	インストール & 設定ガイド	第7版	
	スタートアップガイド	第7版	
	リファレンスガイド	第8版	
	統合WebManager 管理者ガイド	第14版	
	WebManager Mobile 管理者ガイド	第3版	

最新バージョン

2017 年 10 月時点での CLUSTERPRO X 3.3 for Windows の最新内部バージョンは 11.35 です。最新情報は CLUSTERPRO のホームページで公開されている最新ドキュメントを参照してください。

CLUSTERPRO の内部バージョンは、WebManager で確認してください。

WebManager のツリービューからサーバのアイコンを選択すると、そのサーバの内部バージョンがリストビューに表示されます。

内部バージョンが 11.34 以前の場合、アップデート CPRO-XW030-25 を適用することにより 11.35 にバージョンアップすることができます。アップデートの適用手順と、アップデートにより修正される障害情報については、アップデート手順書を参照してください。

機能強化情報

各バージョンにおいて以下の機能強化を実施しています。

項番	内部バージョン	機能強化項目
1	11.00	WebManager と Builder が同一ブラウザ画面から操作可能になりました。
2	11.00	クラスタ構成ウィザードを刷新しました。
3	11.00	クラスタ構成ウィザードで一部設定項目の自動取得が可能になりました。
4	11.00	設定情報のアップロード時、設定されている IP アドレスをチェックする機能を追加しました。
5	11.00	障害発生時に各サーバの監視リソースの状態やグループの起動状態に応じて自動的にフェイルオーバー先を選択することが可能になりました。
6	11.00	サーバグループを跨ぐフェイルオーバーを抑制する機能を追加しました。
7	11.00	障害検出時のフェイルオーバー対象として [全グループ] が選択可能になりました。
8	11.00	クラスタ起動時に他サーバの起動を待ち合わせる同期待ち処理をキャンセルする [clpbwctrl] コマンドを追加しました。
9	11.00	クラスタの外部や CLUSTERPRO 以外の監視ツールからクラスタサーバに対して障害の通知等を行う [clprexec] コマンドと、通知された障害に対して復旧動作を実行する外部連携監視リソースを追加しました。
10	11.00	Oracle 監視のタイムアウト発生時、監視プロセスのダンプ情報を取得することが可能になりました。
11	11.00	Oracle 監視で異常を検出した際に Oracle の詳細情報を取得することが可能になりました。
12	11.00	対応ネットワーク警告灯を拡充しました。
13	11.00	ミラー復帰時および非同期ミラー時にミラーデータを圧縮して転送することが可能になりました。
14	11.00	ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースのフルコピー処理を高速化しました。
15	11.00	Hyper-V のホスト OS をクラスタ化した場合、ゲスト OS をリソースとして扱えるようにしました。
16	11.00	Hyper-V のホスト OS をクラスタ化した場合、障害検出時や操作時に、クイックマイグレーションを実行することが可能になりました。
17	11.00	ミラーコネクットの冗長化設定が可能になりました。

18	11.00	アプリケーションリソースで起動したアプリケーションとスクリプトリソースで起動したバッチファイルについて、終了コードで異常の有無を判別して異常検出時の復旧動作を行えるようになりました。
19	11.00	リソース登録を行っていない共有ディスク上のボリュームに対してアクセス制御を操作する [clpvolctrl] コマンドを追加しました。
20	11.02	スクリプトリソースの開始スクリプトおよび終了スクリプトの [正常な戻り値] に異なる値を設定できるようになりました。
21	11.02	[clpmonctrl] コマンドにモニタリソースの回復動作の回数を表示およびリセットするオプションを追加しました。
22	11.02	CIFS リソース起動時の共有設定復元時に、ユーザが存在しない場合またはドメイン環境などでユーザ情報の取得処理に失敗した場合、エラーとせず、CIFS リソースを起動する設定を追加しました。
23	11.10	グループ/リソースの最大数が倍増しました。
24	11.10	ダイナミックフェイルオーバーのオプションを追加しました。
25	11.10	フェイルオーバーグループの起動/停止待ち合わせが行えるようになりました。
26	11.10	外部連携監視リソース (mrw) の回復動作に、サーバグループ外へのフェイルオーバーを追加しました。
27	11.10	WebManagerとclpmonctrlコマンドで、意図的に疑似障害を発生させるための障害検証機能を実装しました。
28	11.10	Android端末から接続可能なWebManagerを実装しました。
29	11.10	CLUSTERPROのMIBを定義しました。
30	11.10	SNMP による情報取得要求に対応しました。
31	11.10	SNMP トラップ送信機能を追加しました。
32	11.10	モニタリソースの回復時の動作として、任意のスクリプトを実行する機能を実装しました。また、再活性処理、フェイルオーバー処理の前にもスクリプトを実行できるようにしました。
33	11.10	モニタリソースで異常を検出した場合に、回復動作を行わない回復動作抑制機能を実装しました。
34	11.10	モニタリソース異常による全グループフェイルオーバー実行時、処理を並列に実行するようになりました。
35	11.10	DB監視Agentの監視機能を強化しました。
36	11.10	スクリプトに使用できる環境変数を追加しました。
37	11.10	スクリプトテンプレートを用いて、容易にスクリプトの設定を行えるようになりました。
38	11.10	設定モード画面が800*600の画面サイズでも不足なく表示されるようにしました。
39	11.10	ブラウザのポップアップブロックが設定されていてもログのダウンロードが可能になりました。

40	11.10	ライセンスが未登録の機能は設定時に表示されないようになりました。
41	11.10	自動的に登録されるモニタリソースの種類を拡充しました。
42	11.10	clprexecコマンドのコマンドタイムアウトのデフォルトを30秒から180秒に変更しました。
43	11.10	プロセス名監視リソース (psw) を追加しました。
44	11.10	JVM監視リソース (jraw) を追加しました。
45	11.10	システム監視リソース (sraw) を追加しました。
46	11.10	ミラーディスクのパフォーマンスデータをログとして保存する機能を追加しました。
47	11.10	ミラーディスク関連コマンドでショートオプションが利用可能になりました。
48	11.10	ミラーディスクコネクタの設定画面を生成ウィザード前後で共通になるようにしました。
49	11.10	サービスリソース設定時に、クラスタサーバにインストールされているサービスの一覧を取得する機能を追加しました。
50	11.11	グループ停止待ち合わせの条件を設定できるようになりました。(クラスタ停止時、サーバ停止時)
51	11.11	クラスタ生成ウィザードの最後に表示される回復動作抑制機能ポップアップの表現を改善しました。
52	11.11	System Resource Agentのディスク容量監視登録数を10台から26台に拡張しました。
53	11.11	x64環境において、フローティングIPアドレスリソースと仮想コンピュータ名リソースの関連付けを行わない設定が禁止されていた制限を解除しました。
54	11.13	BMC の系間ネットワークを利用したハートビートを行えるようになりました。(Express5800/A1040, A1080専用)
55	11.13	マシンリセットが発生するようなHW異常発生時、フェイルオーバーを実行するまでマシンリセットを抑制できるようになりました。(Express5800/A1040, A1080専用)
56	11.13	WebManagerに時刻情報表示機能を追加しました。
57	11.13	仮想マシン強制停止機能を追加しました。
58	11.13	構成情報反映後、クラスタ起動、リジュームを自動実行する機能を追加しました。
59	11.13	WebManagerの設定モードで設定情報の編集を行った場合、ブラウザの終了やリロード等をガードする機能を追加しました。
60	11.13	WebManagerで物理マシン、仮想マシンを区別して設定、表示できるようにしました。
61	11.13	ディスク RW 監視リソースに、ディスクフル検出時に異常としない設定を追加しました。
62	11.13	プロセス名監視リソースにプロセス個数監視機能を追加しました。
63	11.13	Oracle 監視リソースにおいて Oracle 起動中 (ORA-1033) のエラーを異常として検出しないようになりました。

64	11.13	システム監視リソースのディスクリソース監視機能にて、システム起動後にドライブレターを割り当てられたディスクやミラーディスクも監視可能になりました。
65	11.13	ディスクリソース/ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースの活性時に行っているチェック処理にリトライ機能を追加しました。
66	11.13	ディスクリソース/ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースの強制切断時処理を改善しました。
67	11.13	CIFS監視リソースの[アクセスチェック]の対象として、特定の共有フォルダ配下のフォルダ/ファイルを指定できるようになりました。
68	11.13	フローティング IP 監視リソース、及び外部連携監視リソースにおいて、サーバ別設定が可能となりました。
69	11.13	物理マシン強制停止機能、筐体 ID ランプ連携において、対応可能な ipmiutil コマンドの書式を拡充しました。
70	11.14	WebManager が Java SE Runtime Environment 7 の環境に対応しました。
71	11.15	Windows Server 2012 に対応しました。
72	11.15	仮想マシンリソースが Windows Server 2012 Hyper-Vに対応しました。
73	11.15	Windows Server 2012 Hyper-Vの場合、仮想マシンリソースでライブマイグレーションを実行することが可能になりました。
74	11.15	共有ディスク型のクラスタ構築を容易にする、簡易版クラスタ生成ウィザードを実装しました。
75	11.15	両系活性検出時でも生存させるサーバを選択できるようにしました。
76	11.15	両系活性等の要因でサーバ間情報に不整合が生じた場合、警告メッセージを出力するようにしました。
77	11.15	ダイナミックフェイルオーバー判定時に用いられる監視リソースの除外モニタを編集可能にしました。除外モニタについては『リファレンスガイド』の「第5章 グループリソースの詳細」の「グループのプロパティを表示/設定変更する」を参照してください。
78	11.15	他に生存サーバが存在しない場合、OSシャットダウンを伴う最終動作を抑制することが可能になりました。
79	11.15	仮想マシングループにスクリプトリソースも登録可能としました。
80	11.15	WebManagerからライセンス情報一覧の参照が可能になりました。
81	11.15	CLUSTERPROインストール時、デスクトップにWebManagerのショートカットを作成するようにしました。
82	11.15	CLUSTERPRO X Alert Service オプションの対応警告灯にISA社のDN-1500GLシリーズを追加しました。
83	11.15	CLUSTERPRO X Alert Service オプションにて、DN-1500GLと連携した場合、DN-1500GLの音声再生機能と連携可能になりました。
84	11.15	除外モニタに登録されている監視リソースに異常が発生した際、同サーバでの再起動も禁止されていたのを解除しました。
85	11.15	Websphere監視リソースが WebSphere 8.0 に対応しました。
86	11.15	JVM監視リソースのロードバランサ連携機能がBIG-IP LTMに対応しました。

87	11.15	JVM監視リソースが WebOTX ESB 8.5, WebSAM SVF for PDF 9.1, WebSAM Report Director Enterprise 9.1, WebSAM Universal Connect/X 9.1 に対応しました。
88	11.15	ディスクRW監視リソースにwrite throughで監視するモードを追加しました。
89	11.15	システムリソース使用状況の時系列データから将来値予測を行い、キャパシティプランニング等に活用可能なコマンド(clpprer)を追加しました。
90	11.15	システムリソース不足を起因とした障害の原因特定を容易にする、システムリソース情報の定期採取機能を追加しました。
91	11.15	Oracle監視リソースにて、Windows 2008以降の環境でUAC環境下におけるOS認証設定が行えなかった制限を解除しました。
92	11.17	PostgreSQL監視がPostgreSQL9.2 に対応しました。
93	11.17	フローティング IP リソース活性時、NIC Link down 状態の場合、異常と判断することを可能にしました。
94	11.17	仮想 IP リソース活性時、NIC Link down 状態の場合、異常と判断することを可能にしました。
95	11.17	CLUSTERPRO X Alert Service オプションの対応警告灯にPATLITE社のNH-SPLを追加しました。
96	11.17	CLUSTERPRO X Alert Service オプションの対応警告灯にISA社のDN-1300GLを追加しました。
97	11.17	警告灯の制御用インターフェースとして、PATLITE社のPRSHIに対応しました。
98	11.17	警告灯の制御用インターフェースとして、ISA社のIRSHIに対応しました。
99	11.17	SNMP連携機能が Windows Server 2012 に対応しました。
100	11.17	フローティングIPリソース/仮想IPリソースの"強制活性"機能を設定不可に仕様変更しました。
101	11.17	NP発生時動作に設定可能な動作を拡張しました。
102	11.18	ログ収集のタイプを追加しました(既定値ではJava Resource Agent, System Resource Agent のログを採取しないようになりました)。
103	11.18	グループリソースの活性/非活性ストール発生時動作の種類を選択可能としました。
104	11.18	Websphere 監視リソースが WebSphere 8.5 に対応しました。
105	11.1a	オフライン版Builder が Java Runtime Environment Version 7 Update 25 に対応しました。
106	11.1a	WebOTX監視リソースが WebOTX V9.1 に対応しました。
107	11.1a	JVM監視リソースが WebOTX V9.1 に対応しました。
108	11.1a	WebLogic監視リソースで管理対象サーバも監視できるようになりました。
109	11.1a	グループリソース管理プロセスの起動時に、リソース一覧の取得処理でレジストリアクセスに失敗してもリトライするようにしました。
110	11.20	Windows Server 2012 R2 に対応しました。

111	11.18	clpgrpコマンドにグループ起動サーバを表示するための-nオプションを追加しました。
112	11.18	clprscコマンドにグループ起動サーバを表示するための-nオプションを追加しました。
113	11.21	ダイナミックDNSリソース(ddns)、ダイナミックDNS監視リソース (ddnsw) を追加しました。
114	11.21	フローティングIPリソース、フローティングIP監視リソース、仮想IPリソース、NIC Link Up/Down 監視リソースが Windows Server 2012 のNICチーム機能に対応しました。
115	11.21	WebOTX監視リソースが WebOTX V9.2 に対応しました。
116	11.21	JVM監視リソースが WebOTX V9.2 に対応しました。
117	11.21	JVM監視リソースが異常検出時に障害原因別にコマンドを実行できるようになりました。
118	11.21	JVM監視リソースがJava VM起動時のオプションを設定できるようになりました。
119	11.21	アプリケーションリソースの非活性時、カスタム監視リソースの停止時にアプリケーションを強制終了する機能を追加しました。
120	11.21	Weblogic監視リソースがWebLogicの監視で利用する webLogic.WLST コマンドへ渡すオプションを指定できるようになりました。
121	11.21	clpgrpコマンドに内部通信タイムアウトを指定するための--apitoオプションを追加しました。
122	11.21	clprscコマンドに内部通信タイムアウトを指定するための--apitoオプションを追加しました。
123	11.21	clpclコマンドに内部通信タイムアウトを指定するための--apitoオプションを追加しました。
124	11.21	オフライン版Builder が Java Runtime Environment Version 7 Update 40 と Java Runtime Environment Version 7 Update 51 に対応しました。
125	11.21	WebManagerとオンライン版Builder が Java Runtime Environment Version 7 Update 51 に対応しました。
126	11.21	ユーザ空間監視リソース (userw) を追加しました。
127	11.21	ログ収集で収集する項目(Windows ファイアウォールの設定、セキュリティのイベントログ、タスクスケジューラの設定)を強化しました。
128	11.21	CIFSリソースでフォルダがすでに共有済みの場合に活性異常としない機能を追加しました。
129	11.21	ミラーディスク・ハイブリッドディスクの全面コピー中断後の再コピーにおいて中断時点からコピーを再開するように機能強化しました。
130	11.21	SQL Server監視リソースにおいて、[監視(固有)] タブでSQL Server 2012対応のODBCドライバ「SQL Server Native Client 11.0」を選択できるようにしました。
131	11.21	clpstatコマンドに二重起動をチェックする機能を追加しました。
132	11.23	共有ディスク型クラスタが4Kネイティブのディスクに対応しました。
133	11.30	AWS Elastic IPリソース(awseip)、AWS仮想IPリソース(awsvip)、AWS Elastic IP監視リソース(awseipw)、AWS仮想IP監視リソース(awsvipw)、AWS AZ監視リソース

		ス(awsazw)を追加しました。
134	11.30	Azure プローブポートリソース (azurepp)、Azure プローブポート監視リソース (azureppw)、Azureロードバランス監視リソース(azurelbw)を追加しました。
135	11.30	AWS/Azure上でのCLUSTERPRO構築を容易にしました。
136	11.30	ダイナミックDNSリソースが、Active DirectoryのKerberos認証に対応しました。
137	11.30	ダイナミックDNSリソースが、「セキュリティで保護された動的更新のみを許可する」設定が有効である環境に対応しました。
138	11.30	アプリケーションリソースの「常駐」モードで終了パスを実行できるようになりました。
139	11.30	サービスリソースの活性/非活性の完了を指定された時間待ち合わせる機能を追加しました。
140	11.30	ミラーディスク型クラスタおよびハイブリッドディスク型クラスタが4Kネイティブのディスクに対応しました。
141	11.30	JVM監視リソースがJava 8に対応しました。
142	11.30	JVM監視リソースが、監視対象のJava VMのGC方式にG1 GCが指定されている環境に対応しました。
143	11.30	PostgreSQL監視にてデータベースの初期化処理中/終了処理中は監視異常としないようにしました。
144	11.30	モニタリソースの監視タイムアウト発生時にリトライしない機能を追加しました。
145	11.30	モニタリソースの監視タイムアウト発生時に回復動作を実行しない機能を追加しました。
146	11.30	サーバダウンを契機としたフェイルオーバー処理において、フェイルオーバー先検索処理の精度を向上しました。
147	11.30	ログ収集で収集する項目(route printの結果、clpstat --localの結果、自サーバのクラスタの状態)を強化しました。
148	11.30	オンライン版Builder起動時に自動でライセンス情報を取得するようにしました。
149	11.30	clprscコマンドにて、グループリソースのフェイルオーバーの回数カウンタを表示する機能を追加しました。
150	11.30	clpstatコマンドにて自ノードだけのステータスを表示するための --local オプションを追加しました。
151	11.30	PostgreSQL監視がPostgreSQL9.4 に対応しました。
152	11.31	ウイルス対策ソフトとの共存問題(CLUSTERPROの動作遅延)を回避する処理を追加しました。
153	11.30	PostgreSQL監視リソースがPowerGres on Windows 9.4 に対応しました。
154	11.30	ミラーディスクリソース、ハイブリッドディスクリソースに設定されたディスクが消失した場合の異常検知時間を短縮しました。
155	11.32	Tuxedo監視リソースがOracle Tuxedo 12c(12.1.3) に対応しました。
156	11.32	WebOTX監視リソースがWebOTX V9.3に対応しました。

157	11.32	JVM監視リソースが以下に対応しました。 ・WebOTX V9.3 ・Apache Tomcat 8.0 ・WebSAM SVF for PDF 9.2 ・WebSAM Report Director Enterprise 9.2 ・WebSAM Universal Connect/X 9.2
158	11.32	ミラーディスクリソースが記憶域スペースに対応しました。
159	11.32	ネットワーク初期化完了待ち時間の既定値を0分から3分に変更しました。
160	11.32	ダイナミックDNSリソースの更新間隔の既定値を 60秒から 60分に変更しました。
161	11.32	ディスクリソース、ミラーディスクリソース、ハイブリッドディスクリソースの活性リトライしきい値の既定値を0回から3回に変更しました。
162	11.32	CLUSTERPRO X Alert Service オプションの対応警告灯にPATLITE社のNH-FV1シリーズを追加しました。
163	11.32	CLUSTERPRO のプロセスの健全性を確認する機能を追加しました。
164	11.32	WebManager に不正なリクエストが要求された場合の脆弱性への対応を行いました。
165	11.32	ネットワークパーティション発生時のクラスタ停止処理を改善しました。
166	11.32	ハートビートの遅延警告の精度を向上しました。
167	11.32	ダイナミックDNSリソースにおいて、以下の機能を追加しました。 ・通常時、登録した仮想ホスト名と活性サーバのIPアドレスの定期的な動的更新を選択可能にしました。 ・非活性時、登録した仮想ホスト名と活性サーバのIPアドレスの削除を選択可能にしました。
168	11.32	ダイナミックDNS監視リソースにおいて、登録した仮想ホスト名の名前解決確認が設定可能になりました。
169	11.32	AWS仮想IPリソースを使用する場合、仮想IPを使わないサブネットに対する仮想IPのルーティング設定が不要になりました。
170	11.32	以下のリソース/モニタについて、IAMロールを使用してインスタンスを起動する場合、AWS CLI 設定ファイル(credentials)中のAWSアクセスキーIDとAWSシークレットアクセスキーが設定不要になりました。 ・AWS Elastic IPリソース ・AWS 仮想IPリソース ・AWS Elastic IP監視リソース ・AWS 仮想IP監視リソース ・AWS AZ監視リソース
171	11.32	以下の監視リソースの監視レベル2(update/selectでの監視)の監視処理を改善しました。 ・Oracle監視 ・PostgreSQL監視 ・SQL Server監視 ・ODBC監視 ・DB2監視

172	11.32	ディスクリソース、ミラーディスクリソース、ハイブリッドディスクリソースの非活性に伴うディスク切断処理のタイムアウトが設定可能になりました。
173	11.32	ミラーディスクリソース、ハイブリッドディスクリソースのミラー復帰処理の解析時間を短縮しました。
174	11.32	ミラーディスクリソース、ハイブリッドディスクリソースで初期構築に一度失敗した場合の再構築処理を改善しました。
175	11.32	ハイブリッドディスクリソース(非同期モード)のサーバグループ内のフェイルオーバー処理時間を改善しました。
176	11.32	clpstatコマンドで表示できるクラスタ設定情報を拡張しました。
177	11.33	Windows Server 2016 に対応しました。
178	11.33	PostgreSQL監視リソースが PostgreSQL 9.5 に対応しました。
179	11.33	SQL Server監視リソースが SQL Server 2016 に対応しました。
180	11.33	Weblogic監視リソースが Oracle WebLogic Server 12c R2 (12.2.1) に対応しました。
181	11.33	JVM監視リソースが Oracle WebLogic Server 12c R2 (12.2.1) に対応しました。
182	11.33	CIFSリソースの [フォルダがすでに共有済みの場合に活性異常としない] の既定値をオフからオンに変更しました。
183	11.33	ダイナミックDNSリソースのフェイルオーバーしきい値の既定値を [サーバ数に合わせる] から0回に変更しました。
184	11.33	AWS AZ監視リソースの最大再活性回数の既定値を3回から0回に変更しました。
185	11.33	Weblogic 監視リソースの追加コマンドオプションの既定値を "-Dwlst.offline.log=disable"から "-Dwlst.offline.log=disable -Duser.language=en_US"に変更しました。
186	11.33	強制停止機能を拡張し、任意のスクリプトの実行が可能になりました。
187	11.33	clplogccコマンドにイベントログの種類を指定してログ収集する機能を追加しました。
188	11.33	多重化されたディスクエージェント間通信の通信経路切り替え処理を改善しました。
189	11.33	AWS 仮想IPリソース、AWS Elastic IPリソース、AWS AZ監視リソースのAWS CLI 実行失敗時のアラートメッセージを改善しました。
190	11.33	Weblogic監視リソース、WebOTX監視リソースのポート番号に設定できる範囲を 1~65535 に拡張しました。
191	11.34	Windows Server 2016 のセキュアブートに対応しました。
192	11.34	PostgreSQL監視リソースが PostgreSQL 9.6 に対応しました。
193	11.34	DB2監視リソースが DB2 v11.1 に対応しました。
194	11.34	WebOTX監視リソースがWebOTX V9.4に対応しました。
195	11.34	WebSphere監視リソースが以下に対応しました。 ・WebSphere Application Server 8.5.5

		<ul style="list-style-type: none"> •WebSphere Application Server 9.0
196	11.34	<p>JVM監視リソースが以下に対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •Apache Tomcat 8.5 •WebOTX V9.4
197	11.34	<p>AWS上で以下のOSに対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •Windows Server 2016
198	11.34	<p>以下のグループリソース/監視リソースが AWS CLI 実行時に環境変数を渡せるよう対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •AWS 仮想IPリソース •AWS Elastic IPリソース •AWS 仮想IP監視リソース •AWS Elastic IP監視リソース •AWS AZ監視リソース
199	11.34	<p>以下のグループリソース/監視リソースが 3ノード以上の構成に対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •AWS 仮想IPリソース •AWS Elastic IPリソース •AWS 仮想IP監視リソース •AWS Elastic IP監視リソース •AWS AZ監視リソース
200	11.34	<p>Azure上で以下のOSに対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •Windows Server 2016
201	11.34	CIFSリソースの [キャッシュを可能にする] の既定値をオフからオンに変更しました。
202	11.34	システム監視リソースの[オープンファイル数の最大値を1440回以上更新した場合]の既定値をオンからオフに変更しました。
203	11.34	Builderで強制停止スクリプトの編集が可能になりました。
204	11.34	監視タイムアウト発生時の挙動を改善しました。
205	11.34	ユーザ空間監視リソースの監視開始待ち時間の設定が可能になりました。
206	11.34	ダイナミックDNSリソースにおいて、セカンダリDNSサーバの設定が可能になりました。
207	11.35	Oracle監視リソースがOracle 12c Release 2 (12.2)に対応しました。
208	11.35	WebOTX監視リソースがWebOTX V9.5に対応しました。
209	11.35	<p>JVM監視リソースが以下に対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •WebOTX V9.5
210	11.35	JVM監視リソースがJava 9に対応しました。
211	11.35	<p>SAP連携コネクタが以下のOSに対応しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> •Windows Server 2016
212	11.35	IP監視リソースの [Ping タイムアウト] の既定値を 1秒から 5秒に変更しました。
213	11.35	サイレントインストールに対応しました。
214	11.35	コマンドからのライセンス登録が可能になりました。

215	11.35	カーネルモードLANハートビートの送信処理を改善しました。
216	11.35	共有ディスク使用時の緊急シャットダウン処理(共有ディスクの閉塞処理)を改善しました。
217	11.35	以下のリソース使用時のクラスタ構成情報の確認処理を追加しました。 <ul style="list-style-type: none">・ディスクリソース・ミラーディスクリソース・ハイブリッドディスクリソース
218	11.35	以下のリソースのI/OエラーがREADアクセスだった場合に、運用が継続できるようになりました。 <ul style="list-style-type: none">・ミラーディスクリソース・ハイブリッドディスクリソース
219	11.35	スクリプトリソースの起動/停止完了までの時間を短縮しました。
220	11.35	監視リソースの異常検出時の最終動作にリソース停止を追加しました。
221	11.35	以下の監視リソースが擬似障害機能に対応しました。 <ul style="list-style-type: none">・AWS Elastic IP監視リソース・AWS 仮想IP監視リソース・AWS AZ監視リソース・Azure プローブポート監視リソース・Azure ロードバランス監視リソース

第 5 章 注意制限事項

本章では、注意事項や既知の問題とその回避策について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

• システム構成検討時.....	112
• CLUSTERPRO インストール前	117
• CLUSTERPRO の構成情報作成時.....	129
• CLUSTERPRO 運用後.....	133
• CLUSTERPRO の構成変更時	143
• CLUSTERPRO アップデート時	144
• 旧バージョンとの互換性	146

システム構成検討時

HW の手配、システム構成、共有ディスクの構成時に留意すべき事項について説明します。

Builder、WebManager の動作 OS について

- ◆ x86_64 のマシン上で Builder および、WebManager を動作させるには 32bit 用の Web ブラウザおよび Java Runtime を使用する必要があります。

ミラーディスク/ハイブリッドディスクの要件について

- ◆ ダイナミックディスクは使用できません。ベーシックディスクを使用してください。
- ◆ ミラーディスク/ハイブリッドディスク用のパーティション（データパーティションとクラスタパーティション）を NTFS フォルダにマウントして使用することはできません。
- ◆ ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースを使用するには、ミラー用のパーティション（データパーティションとクラスタパーティション）が必要です。
- ◆ ミラー用のパーティションのディスク上の配置には特に制限はありませんが、データパーティションのサイズはバイト単位で完全に一致する必要があります。またクラスタパーティションには 17MB 以上の容量が必要です。
- ◆ データパーティションを拡張パーティション上の論理パーティションとして作成する場合は、両サーバとも論理パーティションにしてください。基本パーティションと論理パーティションでは同じサイズを指定しても実サイズが若干異なることがあります。
- ◆ 負荷分散のため、クラスタパーティションとデータパーティションは別のディスク上に作成することを推奨します（同じディスク上に作成しても動作に支障はありませんが、非同期ミラーの場合やミラーリングを中断している状態での書き込み性能が若干低下します）。
- ◆ ミラーリソースでミラーリングするデータパーティションを確保するディスクは、両サーバでディスクのタイプを同じにしてください。

例)

組み合わせ	サーバ1	サーバ2
OK	SCSI	SCSI
OK	IDE	IDE
NG	IDE	SCSI

- ◆ [ディスクの管理]などで確保したパーティションサイズは、ディスクのシリンダあたりのブロック（ユニット）数でアラインされます。このため、ミラー用のディスクとして使用するディスクのジオメトリがサーバ間で異なると、データパーティションのサイズを完全に一致させることができない場合があります。このような問題を避けるため、データパーティションを確保するディスクは、RAID構成なども含め両サーバでHW構成を一致させることを推奨します。
- ◆ 両サーバでディスクのタイプやジオメトリを揃えられない場合は、ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースを設定する前に [clpvolsz] コマンドにより両サーバのデータパーティションの正確なサイズを確認し、もしサイズが一致しない場合は再度 [clpvolsz] コマンドを使用して大きいほうのパーティションを縮小してください。
- ◆ RAID 構成のディスクをミラーリングする場合、ディスクアレイコントローラのキャッシュを WRITE THRU にすると書き込み性能の低下が大きくなるため、WRITE BACK での使用をお勧めします。ただし、WRITE BACK で使用する場合は、バッテリーを搭載したディ

スクアレコントローラを用いるか、UPS を併用する必要があります。

- ◆ OS のページファイルがあるパーティションは、ミラーリングできません。

IPv6環境について

下記の機能は IPv6 環境では使用できません。

- ◆ BMCハートビートリソース

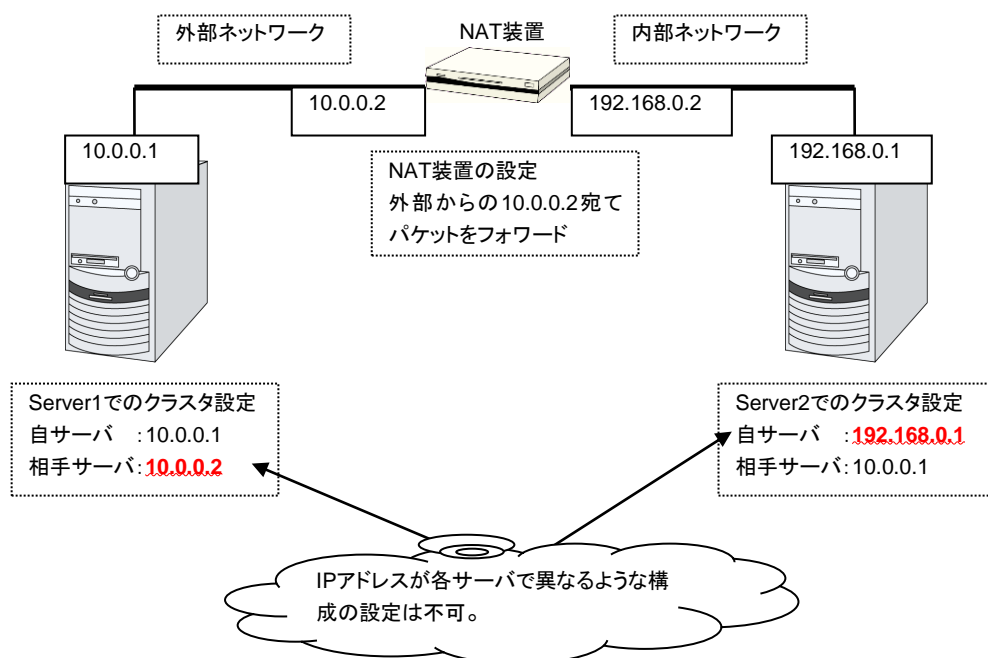
下記の機能はリンクローカルアドレスを使用できません。

- ◆ カーネルモードLANハートビートリソース
- ◆ ミラーディスクコネク
- ◆ PINGネットワークパーティション解決リソース
- ◆ FIPリソース
- ◆ VIPリソース

ネットワーク構成について

NAT 環境等のように、自サーバの IP アドレスおよび相手サーバの IP アドレスが、各サーバで異なるような構成においては、クラスタ構成を構築/運用できません。

《不可な構成の例》



共有ディスクの要件について

- ◆ ダイナミックディスクは使用できません。ベーシックディスクを使用してください。

- ◆ 共有ディスク用のパーティション（ディスクハートビート用パーティション、ディスクリソース用切替パーティション）を NTFS フォルダにマウントして使用することはできません。
- ◆ ソフトウェア RAID（ストライプセット、ミラーセット、パリティ付ストライプセット）やボリュームセットは使用できません。

NIC Link Up/Down 監視リソース

Windows Server 2008 R2 までの場合は DeviceIoControl 関数を使用しているため、NIC のドライバによっては、必要な DeviceIoControl 関数がサポートされていない場合があります。その場合にはこの監視リソースは使用できません。この監視リソースを使用する場合は、試用版ライセンス等を使用して事前に動作確認を行ってください。

Windows Server 2012 以降の場合は WMI を使用しているため、この監視リソースは使用可能です。

ミラーディスク/ハイブリッドディスクの write 性能について

ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースのディスクミラーリングには同期ミラーと非同期ミラーの 2 種類の方式があります。

同期ミラーの場合、ミラーリング対象のデータパーティションへの書き込み要求毎に、両サーバのディスクへの書き込みを実施し、その完了を待ち合わせます。各サーバへの書き込みは並行して実施されますが、他サーバのディスクへの書き込みはネットワークを介して実施されるため、ミラーリングしない通常のローカルディスクに比べ書き込み性能が低下します。特にネットワークの通信速度が低く遅延が大きい遠隔クラスタ構成などの場合は大幅に性能が低下することになります。

非同期ミラーの場合、自サーバへの書き出しは即時実行しますが、他サーバへの書き出しは一旦ローカルキューに保存し、バックグラウンドで書き出します。他サーバへの書き出しの完了を待ち合わせないため、ネットワーク性能が低い場合も書き込み性能が大きく低下することはありません。ただし、非同期ミラーの場合も書き込み要求毎に更新データをキューに保存するため、ミラーリングしない通常のローカルディスクや共有ディスクに比べると、書き込み性能が低下します。このため、ディスクへの書き込み処理に高いスループットが要求されるシステム（更新系が多いデータベースシステムなど）には共有ディスクの使用を推奨します。

また、非同期ミラーの場合、書き込み順序は保証されますが、現用系サーバがダウンした場合に最新の更新分が失われる可能性があります。このため、障害発生直前の情報を確実に引き継ぐ必要がある場合は、同期ミラーか共有ディスクを用いる必要があります。

非同期ミラーの履歴ファイルについて

非同期モードのミラーディスク/ハイブリッドディスクでは、メモリ上のキューに記録しきれない書き込みデータは、履歴ファイル格納フォルダとして指定されたフォルダに履歴ファイルとして一時的に記録されます。この履歴ファイルは、履歴ファイルのサイズ制限を設定していない場合、指定されたフォルダに制限なく書き出されます。このような設定の場合、回線速度が業務アプリケーションのディスク更新量に比べて低すぎると、リモートサーバへの書き込み処理がディスク更新に追いつかず、履歴ファイルでディスクが溢れてしまいます。このため、遠隔クラスタ構成でも業務 AP のディスク更新量に合わせて十分な速度の通信回線を確保する必要があります。

また、長時間の通信遅延や、ディスク更新の連続発生などにより、履歴ファイル格納フォルダが溢れた場合に備え、履歴ファイルの書き出し先に指定するドライブには十分な空き容量を確保し、履歴ファイルサイズ制限を設定するか、システムドライブとは別のドライブを指定する必要があります。

複数の非同期ミラー間のデータ整合性について

非同期モードのミラーディスク/ハイブリッドディスクでは、現用系のデータパーティションへの書き込みを、同じ順序で待機系のデータパーティションにも実施します。

ミラーディスクの初期構築中やミラーリング中断後の復帰（コピー）中以外は、この書き込み順序が保証されるため、待機系のデータパーティション上にあるファイル間のデータ整合性は保たれます。

しかし、複数のミラーディスク/ハイブリッドディスクリソース間では書き込み順序が保証されませんので、例えばデータベースのデータベースファイルとジャーナル（ログ）ファイルのように、一方のファイルが他方より古くなるとデータの整合性が保てないファイルを複数の非同期ミラーディスクに分散配置すると、サーバダウン等でフェイルオーバーした際に業務アプリケーションが正常に動作しなくなる可能性があります。

このため、このようなファイルは必ず同一の非同期ミラーディスク/ハイブリッドディスク上に配置してください。

マルチブートについて

他のブートディスクで起動すると、ミラーや共有ディスクのアクセス制限が外れてしまい、ミラーディスクの整合性保証や共有ディスクのデータ保護ができなくなるため、これらのリソースを使用している場合はマルチブートを使用しないでください。

JVM監視リソースについて

- ◆ 同時に監視可能な Java VM は最大 25 個です。同時に監視可能な Java VM とは Builder(監視(固有)タブ→識別名)で一意に識別する Java VM 数のことです。
- ◆ Java VM と Java Resource Agent 間のコネクションは SSL には対応していません。
- ◆ Java VM を監視する時、監視対象と同一の名称を持つ別のプロセスが存在する場合、異なる監視対象に対して C ヒープ監視をする可能性があります。
- ◆ スレッドのデッドロックは検出できない場合があります。これは、Java VM の既知で発生している不具合です。詳細は、Oracle の Bug Database の「Bug ID: 6380127 」を参照してください。

- ◆ WebOTX のプロセスグループを監視する時、プロセスの多重度が 2 以上になると監視を行うことはできません。WebOTX V8.4 以降では監視可能です。
- ◆ Java Resource Agent が監視できる Java VM は、JVM 監視リソースが動作中のサーバと同じサーバ内のみです。
- ◆ Builder(クラスタプロパティ→JVM 監視タブ→Java インストールパス)で設定した Java インストールパスは、クラスタ内のサーバにおいて、共通の設定となります。JVM 監視が使用する Java VM のバージョンおよびアップデートは、クラスタ内のサーバにおいて、同じものにしてください。
- ◆ Builder(クラスタプロパティ→JVM 監視タブ→接続設定ダイアログ→管理ポート番号)で設定した管理ポート番号は、クラスタ内のサーバにおいて、共通の設定となります。
- ◆ x86_64 版 OS 上において IA32 版の監視対象のアプリケーションを動作させている場合、または IA32 版 OS 上において x86_64 版の監視対象のアプリケーションを動作させている場合は、監視を行うことはできません。
- ◆ Builder(クラスタプロパティ→JVM 監視タブ→最大 Java ヒープサイズ)で設定した最大 Java ヒープサイズを 3000 など大きな値に設定すると、Java Resource Agent が起動に失敗します。システム環境に依存するため、システムのメモリ搭載量を元に決定してください。
- ◆ ロードバランサ連携の監視対象 Java VM の負荷算出機能を利用する場合は、SingleServerSafe での利用を推奨します。また、Red Hat Enterprise Linux でのみ動作可能です。
- ◆ 監視対象 Java VM の起動オプションに「-XX:+UseG1GC」が付加されている場合、Java 7 以前では JVM 監視リソースの[プロパティ]-[監視(固有)] タブ-[調整]プロパティ-[メモリ]タブ内の設定項目は監視できません。
Java 8 以降では JVM 監視リソースの[プロパティ]-[監視(固有)]タブ-[JVM 種別]に [Oracle Java(usage monitoring)]を選択することで監視可能です。

ネットワーク警告灯の要件について

- ◆ 「警子ちゃんミニ」、「警子ちゃん 4G」を使用する場合、警告灯にパスワードを設定しないで下さい。
- ◆ 音声ファイルの再生による警告を行う場合、あらかじめ音声ファイル再生に対応したネットワーク警告灯に音声ファイルを登録しておく必要があります。
音声ファイルの登録に関しては、各ネットワーク警告灯の取扱説明書を参照して下さい。
- ◆ ネットワーク警告灯にクラスタ内のサーバからの rsh コマンド実行を許可するように設定してください。

CLUSTERPRO インストール前

OS のインストールが完了した後、OS やディスクの設定を行うときに留意して頂きたいことです。

ファイルシステムについて

OS をインストールするパーティション、共有ディスクのディスクリソースとして使用するパーティション、ミラーディスク/ハイブリッドディスクリソースのデータパーティションのファイルシステムは NTFS を使用してください。

通信ポート番号

CLUSTERPRO では、デフォルトで以下のポート番号を使用します。このポート番号については Builder での変更が可能です。これらのポート番号には、CLUSTERPRO 以外のプログラムからアクセスしないようにしてください。

サーバにファイアウォールの設定を行う場合には、下記のポート番号にアクセスできるようにしてください。

AWS 環境の場合は、ファイアウォールの設定の他にセキュリティグループ設定においても、下記のポート番号にアクセスできるようにしてください。

[サーバ・サーバ間]

From		To	備考
サーバ	自動割り当て※2	→ サーバ 29001/TCP	内部通信
サーバ	自動割り当て	→ サーバ 29002/TCP	データ転送
サーバ	自動割り当て	→ サーバ 29003/UDP	アラート同期
サーバ	自動割り当て	→ サーバ 29004/TCP	ディスクエージェント間通信
サーバ	自動割り当て	→ サーバ 29005/TCP	ミラードライバ間通信
サーバ	29106/UDP	→ サーバ 29106/UDP	ハートビート

[サーバ・クライアント間]

From		To	備考
クライアント	自動割り当て	→ サーバ 29007/TCP 29007/UDP	クライアントサービス通信

[サーバ・WebManager 間]

From		To	備考
WebManager	自動割り当て	→ サーバ 29003/TCP	http 通信

※2 自動割り当てでは、その時点で使用されていないポート番号が割り当てられます。
セクション II リリースノート (CLUSTERPRO 最新情報)

[統合 WebManager でブラウザが接続しているサーバ・管理対象のサーバ間]

From		To	備考
ブラウザが接続しているサーバ	自動割り当て	→ サーバ	29003/TCP http 通信
統合 WebManager の管理対象となるサーバ	29003	→ クライアント	29010/UDP UDP 通信

[その他]

			備考
サーバ	自動割り当て	→ ネットワーク警告灯	各製品のマニュアルを参照 ネットワーク警告灯制御
サーバ	自動割り当て	→ サーバの BMC の管理 LAN	623/UDP BMC 制御 (強制停止/筐体ランプ連携)
サーバの BMC の管理 LAN	自動割り当て	→ サーバ	162/UDP BMC 連携用に設定された外部連携モニタの監視先
サーバの BMC の管理 LAN	自動割り当て	→ サーバの BMC の管理 LAN	5570/UDP BMC HB 通信
サーバ	自動割り当て	→ 監視先	icmp IP 監視リソース
サーバ	自動割り当て	→ NFS サーバ	icmp NAS リソースの NFS サーバ死活確認
サーバ	自動割り当て	→ 監視先	icmp Ping 方式ネットワークパーティション解決リソースの監視先
サーバ	自動割り当て	→ サーバ	Builder で設定した管理ポート番号 JVM 監視リソース
サーバ	自動割り当て	→ 監視先	Builder で設定した接続ポート番号 JVM 監視リソース
サーバ	自動割り当て	→ サーバ	Builder で設定したロードバランサ連携管理ポート番号 JVM 監視リソース
サーバ	自動割り当て	→ BIG-IP LTM	Builder で設定した通信ポート番号 JVM 監視リソース
サーバ	自動割り当て	→ サーバ	Builder で設定したプローブポート Azure プローブポートリソース

ミラーコネクト監視リソースを使用する場合、CLUSTERPRO はサーバ間で ping による疎通確認を行うため、icmp パケットを通すように設定する必要があります。ミラーコネクト監視リソースを使用する場合は、ファイアウォールの設定を変更して、サーバ間で ping による疎通確認ができるようにしてください。AWS 環境 の場合は、ファイアウォールの設定の他にセキュリティグループ設定も変更してください。

JVM 監視モニタでは以下の 4 つのポート番号を使用します。

- ◆ 管理ポート番号は JVM 監視モニタが動作する Java VM と通信するためのポート番号です。Builder の[クラスタプロパティ]-[JVM 監視]タブ-[接続設定] ダイアログで設定します。詳細については『リファレンスガイド』の「第 2 章 Builder の機能」を参照してください。
- ◆ 接続ポート番号は監視先(WebLogic Server, WebOTX)の Java VM と接続するためのポート番号です。Builder の該当する JVM 監視リソース名の[プロパティ]-[監視(固有)]タブで設定します。詳細については『リファレンスガイド』の「第 6 章 モニタリソースの詳細」を参照してください。
- ◆ ロードバランサ連携管理ポート番号はロードバランサ連携を行う場合に使用するためのポート番号です。ロードバランサ連携を使用しない場合は、設定不要です。Builder の[クラスタプロパティ]-[JVM 監視]タブ-[ロードバランサ連携設定] ダイアログで設定します。詳細については『リファレンスガイド』の「第 2 章 Builder の機能」を参照してください。
- ◆ 通信ポート番号は BIG-IP LTM によるロードバランサ連携を行う場合に使用するためのポート番号です。ロードバランサ連携を使用しない場合は、設定不要です。Builder の[クラスタプロパティ]-[JVM 監視]タブ-[ロードバランサ連携設定] ダイアログで設定します。詳細については『リファレンスガイド』の「第 2 章 Builder の機能」を参照してください。

Azure のロードバランサが、各サーバの死活監視に使用するポート番号がプローブポートです。

通信ポート番号の自動割り当て範囲の変更

OS が管理している通信ポート番号の自動割り当ての範囲が CLUSTERPRO が使用する通信ポート番号と重複する場合があります。

OS が管理している通信ポート番号の自動割り当ての範囲を以下の方法等により確認して、通信ポート番号が重複する場合には、CLUSTERPRO が使用する通信ポート番号と重複しないよう、CLUSTERPRO が使用するポート番号を変更するか、または OS が管理している通信ポート番号の自動割り当ての範囲を以下の方法等により変更してください。

Windows Server 2008 の場合

- ◆ Windows が提供する netsh コマンドにて、自動割り当ての範囲を表示/設定します。
 - OS が管理している通信ポート番号の自動割り当て範囲の確認方法


```
netsh interface <ipv4|ipv6> show dynamicportrange <tcp|udp>
```

 以下に実行例を示します。


```
-----
>netsh interface ipv4 show dynamicportrange tcp

プロトコル tcp の動的ポートの範囲
-----
```

開始ポート : 49152
ポート数 : 16384

上記は、ipv4、TCP プロトコルの通信ポート番号の自動割り当ての範囲が 49152 ~ 68835 (ポート番号 49152 から 16384 個のポートを割り当て) であることを示します。CLUSTERPRO が使用するポート番号がこの範囲内にある場合は、CLUSTERPRO が使用するポート番号を変更するか、後述の「OS が管理している通信ポート番号の自動割り当て範囲の設定方法」を実施してください。

- OS が管理している通信ポート番号の自動割り当て範囲の設定方法

```
netsh interface <ipv4|ipv6> set dynamicportrange <tcp|udp>
[startport=]<開始ポート番号> [numberOfports=]<自動割り当て範囲>
```

以下に実行例を示します。

```
>netsh interface ipv4 set dynamicportrange tcp startport=10000
numberOfports=1000
```

上記は、ipv4、TCP プロトコルの通信ポート番号の自動割り当ての範囲を 10000 ~ 10999 (ポート番号 10000 から 1000 個のポートを割り当て) に設定します。

Windows Server 2003 の場合

- ◆ レジストリの以下のキーにて、OS によって自動割り当てされないようにポート番号を予約します。予約したポート番号は、OS の自動割り当てポート番号の対象外となります。

- OS が管理している通信ポート番号の自動割り当て範囲の確認方法

Windows Server 2003 の既定の自動割り当て範囲は、1025 ~ 5000 です。以下のレジストリが存在しない場合は、自動割り当てされるポート番号の上限値は 5000 です。

```
キー: HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters
名前: MaxUserPort
種類: REG_DWORD
```

CLUSTERPRO が使用するポート番号がこの範囲内にある場合は、CLUSTERPRO が使用するポート番号を変更するか、後述の「CLUSTERPRO が使用する通信ポート番号の予約方法」を実施してください。

- CLUSTERPRO が使用する通信ポート番号の予約方法

CLUSTERPRO で使用するポートを予約するために、以下のレジストリを追加してください。すでに存在する場合は値を追加してください。

```
キー: HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters
名前: ReservedPorts
種類: REG_MULTI_SZ
値(設定例): 29001-29007
                29106-29106
```


ポート数不足を回避する設定について

CLUSTERPRO の構成において、多数のサーバ、多数のリソースを使用している場合、CLUSTERPRO の内部通信に使用する一時ポートが不足して、クラスターサーバとして正常に動作できなくなる可能性があります。

一時ポートとして使用できる範囲や、一時ポートが解放されるまでの時間を必要に応じて調整してください。

時刻同期の設定

クラスタシステムでは、複数のサーバの時刻を定期的に同期する運用を推奨します。タイムサーバなどを使用してサーバの時刻を同期させてください。

共有ディスクについて

- ◆ CLUSTERPRO によるアクセス制限を行っていない状態で、共有ディスクに接続されたサーバを複数起動すると、共有ディスク上のデータが破壊される危険があります。アクセス制限をかける前は、必ずいずれか 1 台のみ起動するようにしてください。
- ◆ ネットワークパーティション解決方式としてディスク方式を用いる場合、DISK ネットワークパーティション解決リソースが使用する 17MB 以上の RAW パーティション（ディスクハートビート用パーティション）を共有ディスク上に作成してください。
- ◆ ディスクリソースとしてサーバ間のデータ引き継ぎに使用するパーティション（切替パーティション）は NTFS でフォーマットしてください。
- ◆ 共有ディスク上の各パーティションには、全てのサーバで同一のドライブ文字を設定してください。
- ◆ 共有ディスク上のパーティション作成やフォーマットは、いずれか 1 台のサーバからのみ行います。各サーバで再作成・再フォーマットを行う必要はありません。ただし、ドライブ文字は各サーバで設定する必要があります。
- ◆ サーバの再インストール等で共有ディスク上のデータを引き続き使用する場合は、パーティションの確保やフォーマットは行わないでください。パーティションの確保やフォーマットを行うと共有ディスク上のデータは削除されます。

ミラーディスク用のパーティションについて

- ◆ ミラーディスクリソースの管理用パーティション（クラスターパーティション）として、17MB 以上の RAW パーティションを各サーバのローカルディスクに作成してください。
- ◆ ミラーリング対象のパーティション（データパーティション）を各サーバのローカルディスクに作成し、NTFS でフォーマットしてください（既存のパーティションをミラーリングする場合、パーティションを作り直す必要はありません）。
- ◆ データパーティションのサイズは、両サーバで等しくなるように設定してください。正確なパーティションサイズの確認と調整には [clpvolsz] コマンドを使用してください。
- ◆ クラスターパーティションとデータパーティションには、両サーバで同じドライブ文字を設定してください。

ハイブリッドディスク用のパーティションについて

- ◆ ハイブリッドディスクリソースの管理用パーティション（クラスタパーティション）として、17MB 以上の RAW パーティションを各サーバグループの共有ディスク（サーバグループのメンバサーバが 1 台の場合はローカルディスク）に作成してください。
- ◆ ミラーリング対象のパーティション（データパーティション）を各サーバグループの共有ディスク（サーバグループのメンバサーバが 1 台の場合はローカルディスク）に作成し、NTFS でフォーマットしてください（既存のパーティションをミラーリングする場合、パーティションを作り直す必要はありません）。
- ◆ データパーティションのサイズは、両サーバグループで等しくなるように設定してください。正確なパーティションサイズの確認と調整には [clpvolsz] コマンドを使用してください。
- ◆ クラスタパーティションとデータパーティションには、各サーバで同じドライブ文字を設定してください。

データパーティション上のフォルダやファイルのアクセス許可について

ワークグループ環境で、データパーティション上のフォルダやファイルにアクセス許可の設定を行う場合、そのデータパーティションにアクセスする全てのノードで、該当のユーザに対してアクセス許可を設定する必要があります。例えば server1, server2 の test というユーザに対してアクセス許可を与える場合、server1 および server2 にて test ユーザに対してアクセス許可を設定してください。

OS 起動時間の調整

電源が投入されてから、OS が起動するまでの時間が、下記の 2 つの時間より長くなるように調整してください^{※3}。

- ◆ 共有ディスクを使用する場合に、ディスクの電源が投入されてから使用可能になるまでの時間
- ◆ ハートビートタイムアウト時間

ネットワークの確認

- ◆ インタコネクトやミラーコネクトで使用するネットワークの確認をします。クラスタ内のすべてのサーバで確認します。
- ◆ [ipconfig] コマンドや [ping] コマンドを使用してネットワークの状態を確認してください。
 - public-LAN (他のマシンと通信を行う系)
 - インタコネクト専用 LAN (CLUSTERPRO のサーバ間接続に使用する系)
 - ミラーコネクト LAN (インタコネクトと共用)
 - ホスト名
- ◆ クラスタで使用するフローティング IP リソースの IP アドレスは、OS 側への設定は不要です。
- ◆ IPv6 のみの環境の場合、NIC がリンクダウンすると、その NIC に付与されている IP アドレスが見えなくなり、CLUSTERPRO の動作に影響を与えます。下記のコマンドを実行し、メディアセンス制御をオフにしてください。

^{※3} 具体的な手順は、『インストール & 設定ガイド』の「第 1 章 システム構成を決定する」の「OS 起動時間を調整する」を参照してください。

```
netsh interface ipv6 set global dhcpmediasense=disabled
```

ESMPRO/AutomaticRunningController との連携について

ESMPRO/AutomaticRunningController (以降 ESMPRO/AC と略します) と連携動作させる場合は、CLUSTERPRO の構築/設定に次の留意事項があります。これらが満たされていないと、ESMPRO/AC との連携機能が正しく動作しないことがあります。

- ◆ ネットワークパーティション解決リソースとして、DISK 方式のリソースのみを単独で指定することはできません。DISK 方式を指定する場合は、必ず PING 方式、COM 方式など、他のネットワークパーティション解決方式のリソースと組み合わせて指定してください。
- ◆ ディスク TUR 監視リソースを作成する際は、[最終動作] の設定値はデフォルト (何もしない) から変更しないでください。
- ◆ ディスク RW 監視リソースを作成する際、[ファイル名] の設定値に共有ディスク上のパスを指定する場合は、[監視タイミング] の設定値はデフォルト (活性時) から変更しないでください。
- ◆ 復電後再起動した際、次のアラートが CLUSTERPROのマネージャ上にエントリされることがあります。上記の設定により、実際の動作に支障はありませんので無視してください。
 - ID:18
モジュール名:nm
メッセージ:リソース<DiskNPのリソース名>の起動に失敗しました。(サーバ名:xx)
 - ID:1509
モジュール名:rm
メッセージ:監視 <ディスクTUR監視リソース名> は異常を検出しました。(4 : デバイスオープンに失敗しました。監視先ボリュームのディスク状態を確認してください。)
- ◆ ESMPRO/AC の設定方法、留意事項等については、『CLUSTERPRO X for Windows PPガイド』の「ESMPRO/AC」の章の記述を参照してください。

ipmiutil について

- ◆ 以下の機能では、BSD ライセンスのオープンソースとして公開されている IPMI Management Utilities (ipmiutil) を使用して、各サーバの BMC ファームウェアを制御します。このため、これらの機能を利用する場合は各クラスターサーバに ipmiutil をインストールする必要があります。
 - ・ 物理マシンの強制停止機能
 - ・ 筐体 ID ランプ連携
- ◆ 上記の機能を使用する場合、ベースボード管理コントローラー (BMC) のマネジメント用 LAN ポートの IP アドレスと OS が使用する IP アドレスの間で通信ができるように、各サーバの BMC を設定してください。サーバに BMC が搭載されていない場合や、BMC のマネジメント用のネットワークが閉塞している状態では、これらの機能は使用できません。BMC の設定方法については、各サーバのマニュアルを参照してください。
- ◆ CLUSTERPRO に ipmiutil は添付しておりません。ipmiutil の入手方法とインストール方法については『インストール&設定ガイド』の「第 1 章 システム構成を決定する」にある「9. BMC と ipmiutil をセットアップする」を参照してください。
- ◆ ipmiutil に関する以下の事項について、弊社は対応いたしません。ユーザ様の判断、責

任にてご使用ください。

- ipmiutil 自体に関するお問い合わせ
 - ipmiutil の動作保証
 - ipmiutil の不具合対応、不具合が原因の障害
 - 各サーバの ipmiutil の対応状況のお問い合わせ
- ◆ ご使用予定のサーバ (ハードウェア) の ipmiutil 対応可否についてはユーザー様にて事前に確認ください。ハードウェアとして IPMI 規格に準拠している場合でも、実際には ipmiutil が動作しない場合がありますので、ご注意ください。

Server Core へのインストールについて

- ◆ Windows Server 2008 の Server Core 環境に CLUSTERPRO をインストールする場合、コマンドプロンプトから、CD 媒体のルート直下にある menu.exe を実行してください。これによりメニュー画面が表示されます。
- 以降の手順は通常のインストールと同様ですが、ライセンス登録で [ライセンスファイルから登録] を選択することはできません。必ず [ライセンス項目を入力して登録] を選択してください。

メール通報について

- ◆ メール通報機能は、STARTTLSやSSLに対応していません。

システムディスクが接続された HBA のアクセス制限について

- ◆ システムディスクが接続された HBA を[クラスタで管理するHBA一覧]に設定すると、OS がインストールされたシステムパーティションなどにアクセス制限が行われ OS が起動しなくなる場合があります。
- SANブート環境などにおいて、システムディスクが接続された HBA を[クラスタで管理するHBA一覧] に設定する場合、システムパーティションを [クラスタ管理から除外するパーティション] に設定してアクセス制限の対象外とする必要があります。
- 詳細については『リファレンスガイド』の「第 2 章 Builder の機能」の「サーバプロパティ」を参照してください。

Microsoft Azure におけるクラスタ構築前の注意事項

クラシックデプロイモデルの場合、仮想マシンのインストール後、それぞれのネットワークのサブネット内で割り当てられる IP アドレスを固定化してください。これは、仮想マシンの起動順により、サブネット内で割当たる IP アドレスの変更を防ぐためです。

AWS環境における時刻同期

AWS Elastic IP リソース、AWS 仮想 IP リソース、AWS Elastic IP 監視リソース、AWS 仮想 IP 監視リソース、AWS AZ 監視リソースでは、活性時/非活性時/監視時に AWS CLI を実行しています。

インスタンスの日時が正しく設定されていない場合、AWS CLI の実行に失敗し、「Failed in the AWS CLI command.」というメッセージが出力される場合があります。これは AWS の仕様によるものです。

この場合、インスタンスの日時を正しく設定し、NTP などにより時刻同期を取るようになしてください。詳細は「Windows インスタンスの時刻を設定する」(http://docs.aws.amazon.com/ja_jp/AWSEC2/latest/WindowsGuide/windows-set-time.html)を参照してください。

AWS環境におけるIAMの設定について

AWS 環境における IAM (Identity & Access Management) の設定について説明します。

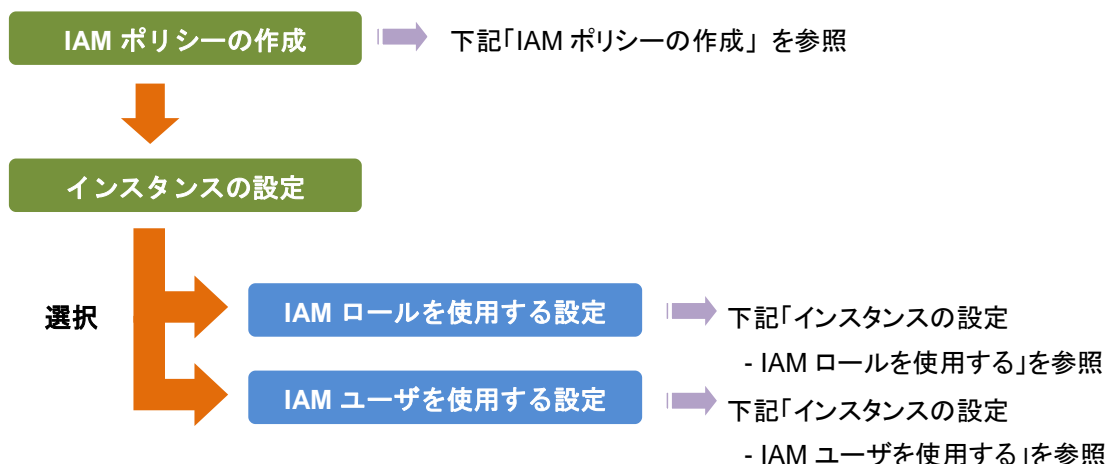
AWS 仮想 IP リソース などのリソースおよび監視リソースは、その処理のために AWS CLI を内部で実行します。AWS CLI が正常に実行されるためには、事前に IAM の設定が必要となります。

AWS CLI にアクセス許可を与える方法として、IAM ロールを使用する方針と、IAM ユーザを使用する方針の2通りがあります。基本的には各インスタンスに AWS アクセスキーID、AWS シークレットアクセスキーを保存する必要がなくセキュリティが高くなることから、前者の IAM ロールを使用する方針を推奨します。

それぞれの方針のメリット・デメリットは以下のとおりです。

	メリット	デメリット
IAM ロールを使用する方針	セキュリティ上安全 キー情報の管理が簡単	IAM ロールを変更できないため、 後からインスタンス別のアクセス 権限設定ができない。
IAM ユーザを使用する方針	後からインスタンス別のアクセス 権限設定が可能	キー情報漏えいのリスクが高い キー情報の管理が煩雑

IAM の設定手順は次の通りです。



IAM ポリシーの作成

AWS の EC2 や S3 などのサービスへのアクションに対するアクセス許可を記述したポリシーを作成します。CLUSTERPRO の AWS 関連リソースおよび監視リソースが AWS CLI を実行するために許可が必要なアクションは以下のとおりです。

必要なポリシーは将来変更される可能性があります。

◆ AWS 仮想 IP リソース/AWS 仮想 IP 監視リソース

アクション	説明
ec2:Describe*	VPC、ルートテーブル、ネットワークインタフェースの情報を取得する時に必要です。
ec2:ReplaceRoute	ルートテーブルを更新する時に必要です。

◆ AWS Elastic IP リソース/AWS Elastic IP 監視リソース

アクション	説明
ec2:Describe*	EIP、ネットワークインタフェースの情報を取得する時に必要です。
ec2:AssociateAddress	EIP を ENI に割り当てる際に必要です。
ec2:DisassociateAddress	EIP を ENI から切り離す際に必要です。

◆ AWS AZ 監視リソース

アクション	説明
ec2:Describe*	アベイラビリティゾーンの情報を取得する時に必要です。

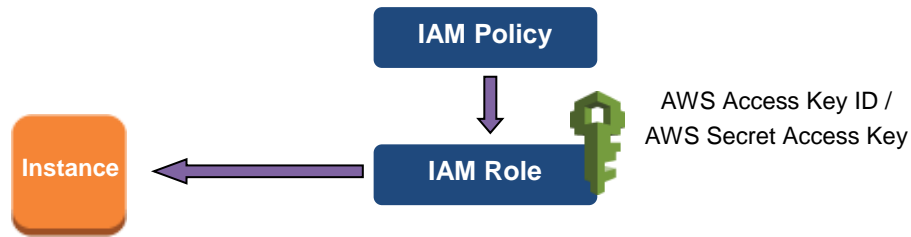
以下のカスタムポリシーの例では全ての AWS 関連リソースおよびモニタリソースが使用するアクションを許可しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "ec2:Describe*",
        "ec2:ReplaceRoute",
        "ec2:AssociateAddress",
        "ec2:DisassociateAddress"
      ],
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

IAM Management Console の [Policies] - [Create Policy] で カスタムポリシーを作成できます。

インスタンスの設定 - IAM ロールを使用する

IAM ロールを作成し、インスタンスに付与することで AWS CLI を実行可能にする方法です。



- 1) IAM ロールを作成します。作成したロールに IAM ポリシーをアタッチします。
IAM Management Console の [Roles] - [Create New Role] で IAM ロールを作成できます。
- 2) インスタンス作成時に、「IAM Role」に作成した IAM ロールを指定します。（インスタンス作成完了後に IAM ロールを後から付与することはできません）
- 3) インスタンスにログオンします。
- 4) Python をインストールします。

CLUSTERPRO が必要とする Python をインストールします。まず、Python がインストールされていることを確認します。未インストールの場合、以下から Python 2.7.x をダウンロードして、インストールします。インストール後、コントロールパネルにおいて環境変数 PATH に python.exe へのパスを追加します（通常、C:\Python27 にインストールされます）。

<https://www.python.org/downloads/>

- 5) AWS CLI をインストールします

以下から AWS CLI MSI Installer をダウンロードして、インストールします。環境変数 PATH にはインストーラが自動的に追加します。

<http://docs.aws.amazon.com/cli/latest/userguide/installing.html#install-msi-on-windows>

AWS CLI のセットアップ方法に関する詳細は下記を参照してください。

<http://docs.aws.amazon.com/cli/latest/userguide/installing.html>

（Python または AWS CLI のインストールを行った時点ですでに CLUSTERPRO がインストール済の場合は、OS を再起動してから CLUSTERPRO の操作を行ってください。）

- 6) Administrator ユーザでコマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
> aws configure
```

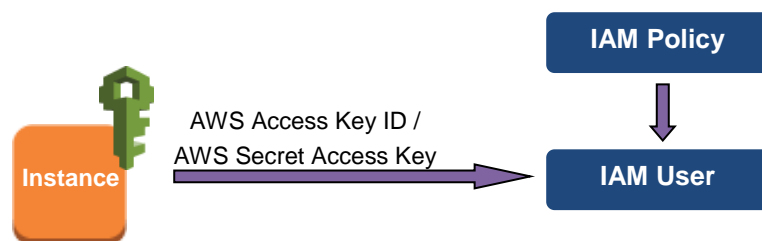
質問に対して AWS CLI の実行に必要な情報を入力します。AWS アクセスキー ID、AWS シークレットアクセスキーは入力しないことに注意してください。

```
AWS Access Key ID [None]: (Enter のみ)
AWS Secret Access Key [None]: (Enter のみ)
Default region name [None]: <既定のリージョン名>
Default output format [None]: text
```

誤った内容を設定してしまった場合は、%SystemDrive%\Users\Administrator\aws をディレクトリごと消去してから上記操作をやり直してください。

インスタンスの設定 - IAM ユーザを使用する

IAM ユーザを作成し、そのアクセスキーID、シークレットアクセスキーをインスタンス内に保存することで AWS CLI を実行可能にする方法です。インスタンス作成時の IAM ロールの付与は不要です。



- 1) IAM ユーザを作成します。作成したユーザに IAM ポリシーをアタッチします。

IAM Management Console の [Users] - [Create New Users] で IAM ユーザを作成できます。

- 2) インスタンスにログインします。

- 3) Python をインストールします。

CLUSTERPRO が必要とする Python をインストールします。まず、Python がインストールされていることを確認します。未インストールの場合、以下から Python 2.7.x をダウンロードして、インストールします。インストール後、コントロールパネルにおいて環境変数 PATH に python.exe へのパスを追加します（通常、C:\Python27 にインストールされます）。

<https://www.python.org/downloads/>

- 4) AWS CLI をインストールします

以下から AWS CLI MSI Installer をダウンロードして、インストールします。環境変数 PATH にはインストーラが自動的に追加します。

<http://docs.aws.amazon.com/cli/latest/userguide/installing.html#install-msi-on-windows>

AWS CLI のセットアップ方法に関する詳細は下記を参照してください。

<http://docs.aws.amazon.com/cli/latest/userguide/installing.html>

（Python または AWS CLI のインストールを行った時点ですでに CLUSTERPRO がインストール済の場合は、OS を再起動してから CLUSTERPRO の操作を行ってください。）

- 5) Administrator ユーザでコマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
> aws configure
```

質問に対して AWS CLI の実行に必要な情報を入力します。AWS アクセスキー ID、AWS シークレットアクセスキーは作成した IAM ユーザの詳細情報画面から取得したものをを入力します。

```

AWS Access Key ID [None]: <AWS アクセスキー>
AWS Secret Access Key [None]: <AWS シークレットアクセスキー>
Default region name [None]: <既定のリージョン名>
Default output format [None]: text
  
```

誤った内容を設定してしまった場合は、%SystemDrive%\Users\Administrator\aws をディレクトリごと消去してから上記操作をやり直してください。

CLUSTERPRO の構成情報作成時

CLUSTERPRO の構成情報の設計、作成前にシステムの構成に依存して確認、留意が必要な事項です。

CLUSTERPROインストールパス配下のフォルダやファイルについて

<CLUSTERPRO インストールパス>配下にあるフォルダやファイルは、CLUSTERPRO 以外から操作(編集/作成/追加/削除など)しないでください。

CLUSTERPRO 以外からフォルダやファイルを操作した場合の影響についてはサポート対象外とします。

グループリソースの非活性異常時の最終アクション

非活性異常検出時の最終動作に [何もしない] を選択すると、グループが非活性失敗のまま停止しません。

実際に業務で使用する際には、[何もしない] は設定しないように注意してください。

遅延警告割合

遅延警告割合を 0 または、100 に設定すれば以下のようなことを行うことが可能です。

- ◆ 遅延警告割合に 0 を設定した場合

監視毎に遅延警告がアラート通報されます。

この機能を利用し、サーバが高負荷状態でのモニタリソースへのポーリング時間を算出し、モニタリソースの監視タイムアウト時間を決定することができます。

- ◆ 遅延警告割合に 100 を設定した場合

遅延警告の通報を行いません。

テスト運用以外で、0% 等の低い値を設定しないように注意してください。

ディスク監視リソースとハイブリッドディスク TUR 監視リソースの監視方法 TUR について

- ◆ SCSI の Test Unit Ready コマンドをサポートしていないディスク、ディスクインターフェイス (HBA) では使用できません。
ハードウェアがサポートしている場合でもドライバがサポートしていない場合があるのでドライバの仕様も合わせて確認してください。
- ◆ Read 方式に比べて OS やディスクへの負荷は小さくなります。
- ◆ Test Unit Readyでは、実際のメディアへの I/O エラーは検出できない場合があります。

WebManager の画面更新間隔について

- ◆ [WebManager] タブの [画面データ更新インターバル] には、基本的に 30 秒より小さい値を設定しないでください。30 秒より小さい値を設定すると、CLUSTERPRO のパフォーマンスに影響を与えるおそれがあります。

ハートビートリソースの設定について

- ◆ カーネルモード LAN ハートビートリソースは最低 1 つ設定する必要があります。
- ◆ インタコネクト専用の LAN をカーネルモード LAN ハートビートリソースとして登録し、さらにパブリック LAN もカーネルモード LAN ハートビートリソースとして登録することを推奨します (カーネルモード LAN ハートビートリソースを 2 つ以上設定することを推奨します)。
- ◆ BMC ハートビートリソースを使用する場合、BMC のハードウェアやファームウェアが BMC ハートビートに対応している必要があります。利用可能な BMC については「第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境」の「Express5800/A1080a, A1040a シリーズとの連携に対応したサーバ」を参照してください。
- ◆ ハートビートタイムアウト時間は OS 再起動の所要時間より短くする必要があります。この条件を満たさない場合、クラスタ内の一部のサーバがリブートした際に、それを他のサーバが正しく検出できず、リブート後に動作異常が発生する場合があります。

統合 WebManager 用 IP アドレス (パブリック LAN IP アドレス) の設定について

- ◆ CLUSTERPRO X2.1 以前のバージョンの [パブリック LAN IP アドレス] の設定は [クラスタプロパティ] - [WebManager タブ] の [統合 WebManager 用 IP アドレス] で設定できます。

スクリプトのコメントなどで取り扱える 2 バイト系文字コードについて

- ◆ CLUSTERPRO では、Windows 環境で編集されたスクリプトは Shift-JIS、Linux 環境で編集されたスクリプトは EUC として扱われます。その他の文字コードを利用した場合、環境によっては文字化けが発生する可能性があります。

グループの起動可能サーバに設定可能なサーバグループ数について

- ◆ 1つのグループの起動可能サーバに設定可能なサーバグループ数は 2 となっています。3 つ以上のサーバグループを設定した場合、CLUSTERPRO Disk Agent サービス (clpdiskagent.exe) が正しく動作しない可能性があります。

JVM監視の設定について

- ◆ 監視対象がWebLogicの場合、JVM監視リソースの以下の設定値については、システム環境(メモリ搭載量など)により、設定範囲の上限に制限がかかることがあります。
 - [ワークマネージャのリクエストを監視する]-[リクエスト数]
 - [ワークマネージャのリクエストを監視する]-[平均値]
 - [スレッドプールのリクエストを監視する]-[待機リクエスト リクエスト数]
 - [スレッドプールのリクエストを監視する]-[待機リクエスト 平均値]
 - [スレッドプールのリクエストを監視する]-[実行リクエスト リクエスト数]
 - [スレッドプールのリクエストを監視する]-[実行リクエスト 平均値]
- ◆ Java Resource Agentを使用するには、「CLUSTERPRO の動作環境」の「JVM監視の動作環境」に記載しているJRE(Java Runtime Environment)もしくはJDK(Java CLUSTERPRO X 3.3 for Windows スタートアップガイド

Development Kit)をインストールしてください。監視対象(WebLogic ServerやWebOTX)が使用するJREやJDKと同じ物件を使用することも、別の物件を使用することも可能です。1つのサーバにJREとJDKの両方をインストールしている場合、どちらを使用することも可能です。

- ◆ モニタリソース名に空白を含まないでください。
- ◆ 異常検出時に障害原因別にコマンドを実行するための[コマンド]とロードバランサ連携機能は併用できません。

システム監視の設定について

- ◆ リソース監視の検出パターン

System Resource Agent では、「しきい値」、「監視継続時間」という2つのパラメータを組み合わせて検出を行います。

各システムリソース(メモリ使用量、CPU 使用率、仮想メモリ使用量)を継続して収集し、一定時間(継続時間として指定した時間)しきい値を超えていた場合に異常を検出します。

Windows Server 2008 R2 における OS の Server サービスについて

- ◆ Windows Server 2008 R2 (Windows Server 2003 及び Windows Server 2008, Windows Server 2008 R2 SP1 以降は対象外) において、ディスクリソース/ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースで管理しているドライブが、システム環境変数 "PATH" に含まれる場合、OS の Server サービスが起動しないことがあります。本サービスが起動していない場合、仮想コンピュータ名リソースの活性に失敗するため、上記の条件を満たす場合、ディスクリソース/ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソースが起動後に、サービスリソースやスクリプトリソースで Server サービスを起動するなどの対処を行ってください。

PostgreSQL監視の設定について

- ◆ モニタリソース名に空白を含まないでください。

AWS Elastic IPリソースの設定について

- ◆ データミラー構成のみ可能です。共有ディスク構成、ハイブリッド構成はサポートしていません。
- ◆ IPv6はサポートしていません。
- ◆ AWS Elastic IPリソース はクラスタにつき1つしか使用できません。
- ◆ AWS 環境では、フローティング IP リソース、フローティング IP 監視リソース、仮想 IP リソース、仮想 IP 監視リソース、仮想コンピュータ名リソース、仮想コンピュータ名監視リソースは利用できません。
- ◆ AWS Elastic IPリソースはASCII文字以外の文字に対応していません。下記のコマンドの実行結果にASCII文字以外の文字が含まれないことを確認してください。
aws ec2 describe-addresses --allocation-ids <EIP ALLOCATION ID>

AWS 仮想IPリソースの設定について

- ◆ データミラー構成のみ可能です。共有ディスク構成、ハイブリッド構成はサポートしていません。
- ◆ IPv6はサポートしていません。
- ◆ AWS 環境では、フローティング IP リソース、フローティング IP 監視リソース、仮想 IP リソース、仮想 IP 監視リソース、仮想コンピュータ名リソース、仮想コンピュータ名監視リソースは利用できません。
- ◆ AWS 仮想 IPリソースはASCII文字以外の文字に対応していません。下記のコマンドの実行結果にASCII文字以外の文字が含まれないことを確認してください。

```
aws ec2 describe-vpcs --vpc-ids <VPC ID>
aws ec2 describe-route-tables --filters Name=vpc-id,Values=<VPC ID>
aws ec2 describe-network-interfaces --network-interface-ids <ENI ID>
```

Azure プローブポートリソースの設定について

- ◆ 2ノード構成のみサポートしています。
- ◆ データミラー構成のみ可能です。共有ディスク構成、ハイブリッド構成はサポートしていません。
- ◆ IPv6はサポートしていません。
- ◆ Azure 環境では、フローティング IP リソース、フローティング IP 監視リソース、仮想 IP リソース、仮想 IP 監視リソース、仮想コンピュータ名リソース、仮想コンピュータ名監視リソースは利用できません。

Azure ロードバランス監視リソースの設定について

- ◆ Azure ロードバランスモニタリソースが異常を検知した場合、Azureのロードバランサからの現用系と待機系の切り替えが正しく行われな可能性もあります。そのため、Azure ロードバランスモニタリソースの[最終動作]には[クラスタサービス停止と OS シャットダウン]を選択することを推奨とします。

Windows Server 2012 ベースのシステムにおけるサービス失敗時の回復操作について

Windows Server 2012 ベースのシステムにおいて、サービスが失敗(異常終了)した時に行われる回復操作として[コンピューターを再起動する]が設定されている場合、実際にサービスが失敗した際の動作が従来(Windows Server 2008以前)のOS再起動からSTOPエラーを伴うOS再起動へ変更されています。

本件の詳細については、下記の情報を参照してください。
参考: <http://support.microsoft.com/kb/2848819>

回復操作として既定で[コンピューターを再起動する]が設定されているCLUSTERPRO のサービスは下記です。

- ◆ CLUSTERPRO Disk Agent サービス
- ◆ CLUSTERPRO Server サービス
- ◆ CLUSTERPRO Transaction サービス

CLUSTERPRO 運用後

クラスタとして運用を開始した後に発生する事象で留意して頂きたい事項です。

回復動作中の操作制限

モニタリソースの異常検出時の設定で回復対象にグループリソース（ディスクリソース、アプリケーションリソースなど）を指定し、モニタリソースが異常を検出した場合の回復動作遷移中（再活性化 → フェイルオーバ → 最終動作）には、WebManager やコマンドによる以下の操作は行わないでください。

- ◆ クラスタの停止/サスペンド
- ◆ グループの開始/停止/移動

モニタリソース異常による回復動作遷移中に上記の制御を行うと、そのグループの他のグループリソースが停止しないことがあります。

また、モニタリソース異常状態であっても最終動作実行後であれば上記制御を行うことが可能です。

コマンドリファレンスに記載されていない実行形式ファイルやスクリプトファイルについて

インストールディレクトリ配下にコマンドリファレンスに記載されていない実行形式ファイルやスクリプトファイルがありますが、CLUSTERPRO 以外からは実行しないでください。

実行した場合の影響については、サポート対象外とします。

クラスタシャットダウン・クラスタシャットダウンリブート

ミラーディスク使用時は、グループ活性処理中に [clpstdn] コマンドまたは WebManager からクラスタシャットダウン、クラスタシャットダウンリブートを実行しないでください。

グループ活性処理中はグループ非活性ができません。このため、ミラーディスクリソースが正常に非活性されていない状態で OS がシャットダウンされ、ミラーブレイクが発生することがあります。

特定サーバのシャットダウン、リブート

ミラーディスク使用時は、コマンドまたは WebManager からサーバのシャットダウン、シャットダウンリブートコマンドを実行するとミラーブレイクが発生します。

ネットワークパーティション状態からの復旧

ネットワークパーティションが発生している状態では、クラスタを構成するサーバ間で互いの状態が確認できないため、この状態でグループの操作（起動/停止/移動）を行ったり、サーバを再起動したりすると、サーバ間でクラスタの状態についての認識にずれが生じます。このように異なる状態認識のサーバが複数起動している状態でネットワークが復旧すると、その後のグループ操作が正しく動作しなくなりますので、ネットワークパーティション状態にある間は、ネットワークから切り離された（クライアントと通信できない）方のサーバはシャットダウンするか、CLUSTERPRO Server サービスを停止しておき、ネットワークが復旧してから再起動してクラスタに復帰してください。万一、複数のサーバが起動した状態でネットワークが復旧した場合は、クラスタの状態認識が異なるサーバを再起動することにより、正常状態に復帰できます。

なお、ネットワークパーティション解決リソースを使用している場合は、ネットワークパーティションが発生しても、通常はいずれかの（あるいは全ての）サーバが緊急シャットダウンして、互いに通信できないサーバが複数起動するのを回避します。緊急シャットダウンされたサーバを手動で再起動したり、緊急シャットダウン時の動作を再起動に設定していたりした場合も、再起動したサーバは再度緊急シャットダウンされます（Ping 方式や多数決方式の場合は CLUSTERPRO Server サービスが停止されます）。ただし、DISK 方式で複数のディスクハートビート用パーティションを使用している場合、ディスクパス障害によりディスクを介した通信ができない状態でネットワークパーティションが発生すると、両サーバが保留状態で動作を継続する場合があります。

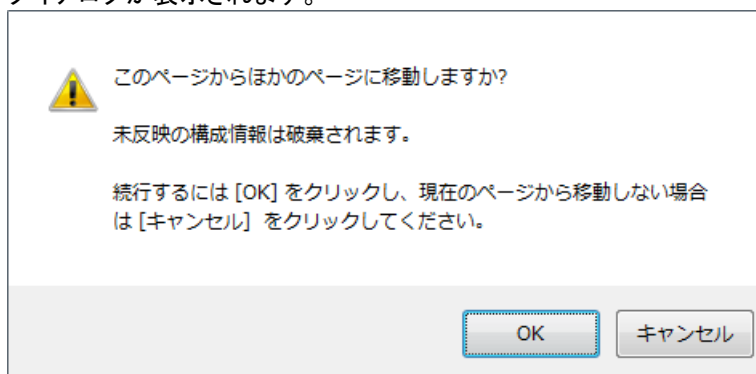
WebManager について

- ◆ WebManager の [クライアントデータ更新方法] の設定が、[Polling] に設定されている場合、WebManager で表示される内容は定期的に更新され、状態が変化しても即座には表示に反映されません。最新の情報を取得したい場合、[リロード] を選択して最新の内容を取得してください。
- ◆ WebManager が情報を取得中にサーバダウン等発生すると、情報の取得に失敗し、一部オブジェクトが正しく表示できない場合があります。
WebManager の [クライアントデータ更新方法] の設定が、[Polling] に設定されている場合、次の自動更新まで待つか、[リロード] を選択して最新の内容を再取得してください。[Realtime] に設定されている場合、自動的に最新の内容に更新されます。
- ◆ CLUSTERPRO のログ収集は複数の WebManager から同時に実行することはできません。
- ◆ 接続先と通信できない状態で操作を行うと、制御が戻ってくるまでしばらく時間が必要な場合があります。
- ◆ マウスポインタが処理中を表す、腕時計や砂時計になっている状態で、ブラウザ外にカーソルを移動すると、処理中であってもカーソルが矢印の状態にもどってしまうことがあります。
- ◆ Proxy サーバを経由する場合は、WebManager のポート番号を中継できるように、Proxy サーバの設定をしてください。

- ◆ Reverse Proxy サーバを経由する場合、WebManager は正常に動作しません。
- ◆ CLUSTERPRO のアップデートを行った場合、起動している全てのブラウザを一旦終了してください。
Java のキャッシュ（ブラウザ側のキャッシュではありません）をクリアし、ブラウザを起動してください。
- ◆ Javaのアップデートを行った場合、起動している全てのブラウザを一旦終了してください。
Java のキャッシュ（ブラウザ側のキャッシュではありません）をクリアして、ブラウザを起動してください。

Builder について

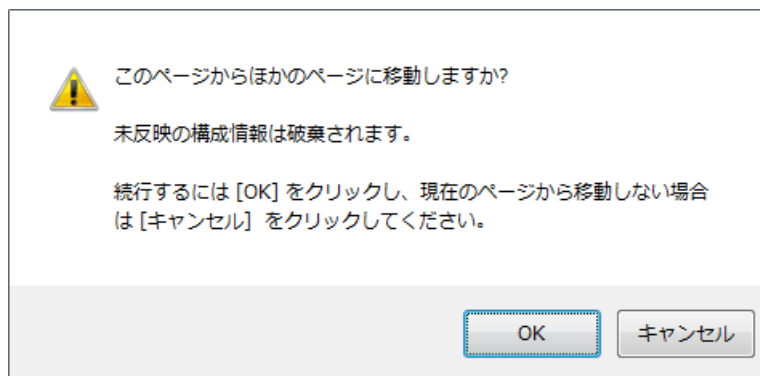
- ◆ 以下の製品とはクラスタ構成情報の互換性がありません。
 - ・ CLUSTERPRO X 3.3 for Windows 以外の Builder
 - ・ CLUSTERPRO for Linux の Builder
 - ・ CLUSTERPRO for Windows Value Edition の Builder
- ◆ 本製品より新しいバージョンで作成されたクラスタ構成情報は、本製品で利用することはできません。
- ◆ CLUSTERPRO X1.0 / 2.0 / 2.1 / 3.0 / 3.1 / 3.2 / 3.3 for Windows のクラスタ構成情報は本製品で利用することができます。
利用する場合は、Builder の [ファイル] メニューで [設定のインポート] をクリックします。
- ◆ Web ブラウザを終了すると（メニューの [終了] やウィンドウフレームの [X] 等）、確認ダイアログが表示されます。



設定を続行する場合は [キャンセル] を選択してください。

注: JavaScript を無効にしている場合、本画面は表示されません。

- ◆ Web ブラウザをリロードすると（メニューの [最新の情報に更新] やツールバーの [現在のページを再読み込み] 等）、確認ダイアログが表示されます。



設定を続行する場合は [キャンセル] を選択してください。

注: JavaScript を無効にしている場合、本画面は表示されません。

- ◆ Reverse Proxy サーバを経由する場合、Builder は正常に動作しません。

CLUSTERPRO Disk Agent サービスについて

CLUSTERPRO Disk Agent サービスは停止しないでください。停止した場合、手動での起動はできません。OS を再起動し CLUSTERPRO Disk Agent サービスを起動しなおす必要があります。

ミラー構築中のクラスタ構成情報の変更について

ミラー構築中（初期構築を含む）はクラスタ構成情報を変更しないでください。クラスタ構成情報を変更した場合、ドライバが不正な動作を行う場合があります。

ミラーディスクの待機系のクラスタ復帰について

ミラーディスク活性時に待機系がクラスタサービス（CLUSTERPRO Server サービス）を停止した状態で移動していた場合、サービスを開始してクラスタに復帰する前に一度待機系サーバを再起動してください。そのまま復帰させるとミラーの差分情報が不正となり、ミラーディスクに不整合が生じます。

ミラーディスク-ハイブリッドディスク間の構成変更について

ミラーディスクリソースでミラーリングしていたディスクをハイブリッドディスクリソースでミラーリングするように構成変更する場合、まず既存のミラーディスクリソースを削除した構成情報をアップロードして、既存のリソースが削除された状態に変更してから、ハイブリッドディスクリソースを追加した構成情報をアップロードしてください。ハイブリッドディスクをミラーディスクに変更する場合も同様です。

上記の手順で既存のリソースを削除せずに、新規のリソースに入れ替えた構成情報をアップロードした場合、ディスクミラーリングの設定変更が正しく行えず不正な動作を行う場合があります。

[chkdsk] コマンドとデフラグについて

ディスクリソースで制御している共有ディスク上の切替パーティションや、ミラーディスクリソースでミラーリングしているデータパーティションに対して、[chkdsk] コマンドやデフラグを実行する場合、リソースが起動済みのサーバで実行する必要があります。起動していない状態では、アクセス制限により実行できません。

また、[chkdsk] コマンドを修復モード (/f オプション) で実行する場合、対象パーティション上のファイルやフォルダが開かれていると実行が失敗するため、フェイルオーバーグループを停止し、対象のディスクリソース/ミラーディスクリソースを単体起動した状態で実行します。もし対象パーティションに対して監視を行うディスク RW 監視リソースがある場合は、このモニタリソースを一時停止しておく必要があります。

インデックスサービスについて

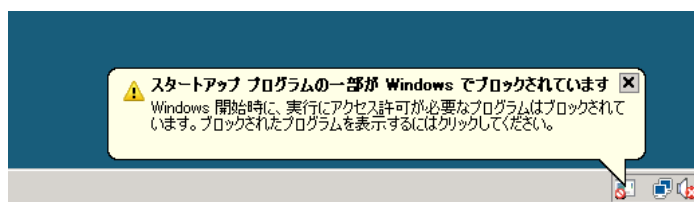
インデックスサービスのカタログに共有ディスク/ミラーディスク上のディレクトリを作成して、共有ディスク/ミラーディスク上のフォルダに対してインデックスを作成する場合、インデックスサービスを手動起動に設定して、共有ディスク/ミラーディスクの活性化後に起動するように CLUSTERPRO から制御する必要があります。インデックスサービスを自動起動にしていると、インデックスサービスが対象ボリュームを OPEN することにより、その後の活性化処理においてマウント処理が失敗し、アプリケーションやエクスプローラからのディスクアクセスが [パラメータが間違っています] (エラーコード 87) というエラーで失敗します。

Windows Server 2008 環境におけるユーザーアカウント制御の影響について

Windows Server 2008 では、既定値でユーザーアカウント制御 (User Account Control, 以下 UAC と略します) が有効となっています。UAC が有効となっている場合、下記の機能に影響があります。

スタートアッププログラム

ビルトイン Administrator 以外のアカウントでログオンすると、下記の画面が表示され、スタートアップに登録されている CLUSTERPRO のモジュール (clpaltui.exe, clphookstdn.exe) の実行がブロックされます。



ブロックされたモジュールの機能は使用できませんが、クラスタとしての動作に支障はありません。以下に各モジュールの機能概要を示します。

clpaltui.exe

アラートサービスの通報アイコンです。詳細については、『リファレンスガイド』の「第 9 章 その他の監視設定情報 アラートサービス」を参照してください。

clphookstdn.exe

ログオンユーザが [スタート] メニューからシャットダウンを選択した場合に、警告ダイアログを出力するための機能です。

なお、UAC を無効にしても、ログイン時には上記モジュールは実行されません。

モニタリソース

下記のモニタリソースに影響があります。

Oracle 監視リソース

Oracle 監視リソースにおいて「認証方式」を [OS 認証] とした場合、監視ユーザに Administrators グループ以外のユーザが設定されていると、Oracle 監視の処理は失敗します。

「認証方式」に [OS 認証] を設定する場合は、「監視ユーザ」に設定するユーザは Administrators グループに属するようにしてください。

互換コマンド

下記の互換コマンドに影響があります。

armload.exe

上記コマンドの /U オプションで、ビルトイン Administrator 以外のユーザを指定すると、コマンドの実行に失敗する場合があります。

Windows Server 2008 / 2012 環境におけるアプリケーションリソース / スクリプトリソースの画面表示について

CLUSTERPRO のアプリケーションリソース・スクリプトリソースから起動したプロセスはセッション 0 で実行されるため、GUI を持つプロセスを起動した場合、Windows Server 2008 / 2012 では [対話型サービスダイアログの検出] ポップアップが表示され、このポップアップで [メッセージを表示する] を選択しないと GUI が表示されません。

ネットワークインターフェイスカード (NIC) が二重化されている環境について

NIC が二重化されている環境の場合、OS 起動時の NIC の初期化に時間がかかることがあります。初期化が完了する前にクラスタが起動すると、カーネルモード LAN ハートビートリソース (lankhb) の起動に失敗することがあります。この場合、NIC の初期化が完了しても、カーネルモード LAN ハートビートリソースの状態は正常に戻りません。この状態から復旧させるためには、クラスタをサスペンドした後、クラスタをリジュームする必要があります。

また、上記の現象を回避するためにネットワーク初期化完了待ち時間の設定、または ARMDELAY コマンドでクラスタの起動を遅らせることを推奨します。

- ◆ ネットワーク初期化完了待ち時間

クラスタを構成する全サーバで共通の設定です。設定した時間に達していない場合でも、ネットワークの初期化が完了すると、クラスタの起動を開始します。

- ◆ ARMDELAY コマンド

クラスタを構成する各サーバの個別の設定です。設定した時間に達していない場合、ネットワークの初期化が完了しても、クラスタの起動を開始しません。

ネットワーク初期化完了待ち時間、ARMDELAY コマンドの詳細については、『リファレンスガイド』を参照してください。

CLUSTERPROのサービスのログオンアカウントについて

CLUSTERPRO のサービスのログオンアカウントは [ローカル システム アカウント] に設定されています。このログオンアカウントの設定を変更すると、クラスタとして正しく動作しない可能性があります。

CLUSTERPROの常駐プロセスの監視について

プロセスを監視するようなソフトウェアにより、CLUSTERPRO の常駐プロセスを監視すること自体には問題はありませんが、プロセスの異常終了時などにプロセスの再起動などの回復動作は行わないでください。

外部連携モニタリソースについて

- ◆ 外部連携モニタリソースに異常を通知するには、[clprexec] コマンドを用いる方法、BMC 連携機能を用いる方法、サーバ管理基盤連携機能を用いる方法の三つの方法があります。
- ◆ [clprexec] コマンドを用いる場合は CLUSTERPRO CD に同梱されているファイルを利用します。通知元サーバの OS やアーキテクチャに合わせて利用してください。また、通知元サーバと通知先サーバの通信が可能である必要があります。
- ◆ BMC 連携機能を利用する場合、BMC のハードウェアやファームウェアが対応している必要があります。利用可能な BMC については本ガイドの 62 ページ「第 3 章 CLUSTERPRO の動作環境」の「Express5800/A1080a,A1040a シリーズとの連携に対応したサーバ」を参照してください。また、BMC の管理用 IP アドレスから OS の IP アドレスへの通信が可能である必要があります。

JVM監視リソースについて

- ◆ 監視対象の Java VM を再起動する場合は JVM 監視リソースをサスペンドするか、クラスタ停止を行った後に行ってください。
- ◆ 設定内容を変更時にクラスタサスペンドおよびクラスタリジュームを行う必要があります。
- ◆ モニタリソースの遅延警告には対応していません。

システム監視リソースについて

- ◆ 設定内容を変更時にクラスタサスペンドを行う必要があります。
- ◆ モニタリソースの遅延警告には対応していません。
- ◆ 動作中に OS の日付/時刻を変更した場合、10分間隔で行っている解析処理のタイミングが日付/時刻変更後の最初の 1 回だけずれてしまいます。以下のようなことが発生するため、必要に応じてクラスタのサスペンド・リジュームを行ってください。
 - ・ 異常として検出する経過時間を過ぎても、異常検出が行われない。
 - ・ 異常として検出する経過時間前に、異常検出が行われる。
- ◆ ディスクリソース監視機能で同時に監視できる最大のディスク数は26台です。

ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携に伴うイベントログ出力について

- 内部バージョン 11.16 以前からアップデートした環境の場合、アプリケーションイベントログに下記のエラーが出力されることがあります。

➤ イベントID:1008

ソース:Perflib

メッセージ: サービス "clpdiskperf" (DLL "<CLUSTERPRO インストールパス>%bin%\clpdiskperf.dll") の Open プロシージャに失敗しました。このサービスのパフォーマンス データは利用できません。データ セクションの最初の 4 バイト (DWORD) に、エラー コードが含まれています。

ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携機能を使用する場合、コマンドプロンプトから以下のコマンドを実行することで、本メッセージが出力されなくなります。

```
> lodctr.exe <CLUSTERPRO インストールパス>%perf%\clpdiskperf.ini
```

連携機能を使用しない場合、本メッセージが出力されても CLUSTERPRO およびパフォーマンスモニタの動作に支障はありませんが、本メッセージの出力が多発する場合はコマンドプロンプトから以下の2つのコマンドを実行することで、本メッセージが出力されなくなります。

```
> unloadctr.exe clpdiskperf
```

```
> reg delete
```

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\clpdiskperf
```

- ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携機能が有効化されている場合、アプリケーションイベントログに下記のエラーが出力されることがあります。

➤ イベントID:4806

ソース:CLUSTERPRO X

メッセージ: パフォーマンスモニタのプロセス数が多すぎるため、ミラー統計情報は採取できません。

連携機能を使用しない場合、本メッセージが出力されても CLUSTERPRO およびパフォーマンスモニタの動作に支障はありませんが、本メッセージの出力が多発する場合はコマンドプロンプトから以下の2つのコマンドを実行することで、本メッセージが出力されなくなります。

```
> unloadctr.exe clpdiskperf
```

```
> reg delete
```

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\clpdiskperf
```

なお、ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携機能については、以下を参照してください。

『リファレンスガイド』

第 10 章 保守情報

ミラー統計情報採取機能

ミラー統計情報採取機能と OS 標準機能との連携

Windows Server 2008 / 2012 環境における[対話型サービスダイアログの検出]ポップアップ表示について

Windows Server 2008/2012 の環境でアプリケーションリソース/スクリプトリソースの[デスクトップとの対話を許可する]を設定し、[対話型サービスダイアログの検出]ポップアップを表示させるには「Interactive Service Derection」サービスが起動している必要があります。

Windows Server 2012 では既定値で「Interactive Service Derection」サービスの起動が無効となっているため、以下の手順に従い有効化してください。

参考: [http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/ms683502\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/ms683502(v=vs.85).aspx)
→[Using an Interactive Service]

AWS 環境におけるAMIのリストアについて

AWS 仮想 IP リソースの ENI ID にプライマリネットワークインターフェイスの ENI ID を設定している場合、AMI などからのリストア時には、AWS 仮想 IP リソースの設定を変更する必要があります。

なお、セカンダリネットワークインターフェイスの ENI ID を設定している場合、AMI などからのリストア時にはデタッチ/アタッチ処理によって同一 ENI ID の引き継ぎが可能なため、AWS 仮想 IP リソースの再設定は不要です。

CLUSTERPROの構成変更時

クラスタとして運用を開始した後に構成を変更する場合に発生する事象で留意して頂きたい事項です。

グループプロパティのフェイルオーバー排他属性について

フェイルオーバー排他属性を変更した場合、クラスタサスペンド、リジュームにより変更が反映されます。

フェイルオーバー排他属性を「排他なし」または「通常排他」から「完全排他」に変更した場合、サスペンド前のグループの起動状態により完全排他のグループが同一サーバ上で複数起動した状態になることがあります。

次回グループ起動時から正しく排他制御が行われるようになります。

リソースプロパティの依存関係について

リソースの依存関係を変更した場合、クラスタサスペンド、リジュームにより変更が反映されます。

リソースの依存関係と反映方法としてリソース停止が必要な設定変更をした場合、リジューム後のリソースの起動状態が依存関係を考慮したものになっていない場合があります。

次回グループ起動時から正しく依存関係の制御が行われるようになります。

グループリソースの追加、削除について

同一グループリソース名を別のグループへ移す設定変更を行う場合、以下の手順にて行ってください。

以下の手順にて行わなかった場合、正常に動作できなくなる可能性があります。

例) フローティング IP リソース fip1 をグループ failover1 から別のグループ failover2 に移す場合

1. グループ failover1 から fip1 を削除します。
2. 設定の反映を行います。
3. fip1 をグループ failover2 へ追加します。
4. 設定の反映を行います。

CLUSTERPROアップデート時

クラスタとして運用を開始した後に CLUSTERPRO をアップデートする際に留意して頂きたい事項です。

アップデートに伴う既定値の変更について

アップデートにより既定値が変更されるパラメータがあります。

- ◆ 下記 [対象バージョン] より前のバージョンから、[対象バージョン] またはそれ以降のバージョンへアップデートする場合、各パラメータの既定値が変更されます。
- ◆ アップデート後も [変更前の既定値] の設定を継続したい場合は、アップデート後に改めてその値に再設定してください。
- ◆ [変更前の既定値] 以外の値を設定していた場合、アップデート後もそれ以前の設定値が継承されます。再設定の必要はありません。

パラメータ	対象バージョン	変更前の既定値	変更後の既定値
[クラスタプロパティ] - [タイムアウト] - [ネットワーク初期化完了待ち時間]	11.32	0分	3分
[ダイナミックDNSリソース] - [更新間隔]	11.32	60秒	60分 (*1)
[ディスクリソース/ミラーディスクリソース/ハイブリッドディスクリソース] - [活性リトライしきい値]	11.32	0	3
[ダイナミックDNSリソース] - [フェイルオーバーしきい値]	11.33	サーバ数に合わせる	0回
[CIFSリソース] - [フォルダがすでに共有済みの場合に活性異常としない]	11.33	オフ	オン
[Weblogic監視リソース] - [追加コマンドオプション]	11.33	-Dwlst.offline.log=disable	-Dwlst.offline.log=disable -Duser.language=en_US
[AWS AZ監視リソース] - [最大再活性回数]	11.33	3回	0回
[ミラーディスク監視リソース] - [リトライ回数]	11.33	0回	1回
[ハイブリッドディスク監視リソース] - [リトライ回数]	11.33	0回	1回
[CIFSリソース] - [調整プロパティ] - [キャッシュタブ] - [キャッシュを可能にする]	11.34	オフ	オン

[システム監視リソース] - [起動しているプロセスの監視条件] - [オープンファイル数の最大値を1440回以上更新した場合]	11.34	オン	オフ
[IP監視リソース] - [監視 (固有) タブ] - [Ping タイムアウト]	11.35	1000ミリ秒	5000ミリ秒

(*1) 単位が秒から分に変更となりました。既存バージョンにて60秒を指定していた場合、設定保存時に自動的に1分へ変換します。既存バージョンにて90秒を指定していた場合、設定保存時に自動的に2分へ変換します(分以下の端数は切り上げ)。

旧バージョンとの互換性

CLUSTERPRO X 1.0/2.0/2.1/3.0/3.1/3.2 との互換性について

X 1.0/2.0/2.1/3.0/3.1/3.2 の Builder で作成したクラスタ構成情報は X 3.3 以降でも使用できます。ただし、X 2.0 以降ではグループリソース・モニタリソースの異常検出時のフェイルオーバー先サーバ選択方式が既定値の [安定動作サーバ] となるため、3 ノード以上の構成の場合にフェイルオーバー先の選択結果が X 1.0 と異なる場合があります。

フェイルオーバー先が複数ある場合に、[安定動作サーバ] に設定していると、フェイルオーバー先でさらに異常が発生した場合に、まだ異常が発生していないサーバに優先的にフェイルオーバーすることができます。これに対し、X 1.0 の場合、移動可能なサーバの中で最もプライオリティの高いサーバにフェイルオーバーしますので、最初に異常が発生していたサーバにフェイルバックしてしまい、3 台目のサーバにフェイルオーバーできない場合があります。

このため、通常は [安定動作サーバ] に設定することを推奨していますが、X 1.0 と同じ動作にする必要がある場合は、各リソースのプロパティの設定タブで、フェイルオーバー先サーバ設定を [最高プライオリティサーバ] に変更してください。

CLUSTERPRO Ver8.0 以前との互換機能について

以下の機能を使用する場合、クラスタ名、サーバ名、グループ名は、Ver8.0 の命名規則に従って設定する必要があります。

- ◆ CLUSTERPRO Alert Service (通報アイコン)
- ◆ CLUSTERPRO クライアント
- ◆ ESMPRO/AC 連携機能
- ◆ ESMPRO/SM 連携機能
- ◆ 仮想コンピュータ名リソース
- ◆ 互換 API
- ◆ 互換コマンド

従来バージョンの命名規則は以下の通りです。

- ◆ クラスタ名
 - 15 文字以内
 - 使用可能な文字は、半角英数字、ハイフン(-)、アンダーバー(_)です。
 - PRN などの DOS 入出力デバイス名は指定しないでください。
 - 大文字、小文字を区別しません。
- ◆ サーバ名
 - 15 文字以内
 - 使用可能な文字は、半角英数字、ハイフン(-)、アンダーバー(_)です。
 - 大文字、小文字を区別しません。
- ◆ グループ名
 - 15 文字以内
 - 使用可能な文字は、半角英数字、ハイフン(-)、アンダーバー(_)です。

- PRN などの DOS 入出力デバイス名は指定しないでください。
- 大文字、小文字を区別しません。

互換 API について

互換 API は、CLUSTERPRO Ver8.0 以前で使用可能であった API を指します。互換 API は CLUSTERPRO X でも使用可能ですが、以下の制限事項があります。

下記に示すリソースのみ対応しています。その他のリソースは設定しても互換 API から参照することはできません。

- ディスクリソース
- ミラーディスクリソース
- 仮想コンピュータ名リソース
- フローティング IP リソース (IPv4 アドレスのみ)
- 仮想 IP リソース (IPv4 アドレスのみ)
- プリントスプーラリソース

クラスタ名、サーバ名、グループ名は、従来バージョンの規則に従い設定する必要があります。従来バージョン規則外の名称を指定された場合は、互換 API で参照することはできません。

Builder で指定されたリソース名を使用して、互換 API を使用することはできません。

クラスタイベントの発生タイミングは、完全互換ではありません。イベントの種類は同じですが、通知されるイベントの数、順序は従来バージョンと異なる場合があります。

常駐プロセスから互換 API を使用している場合、[CLUSTERPRO Server] サービスの停止 → 再起動時に、ArmTerminateApi → ArminitializeApi を実行し、互換 API の再初期化を行う必要があります。原則として、スクリプトリソースの開始・終了スクリプトでプロセスを起動・停止するように設定してください。

Ver3.0 互換 I/F は使用できません。

スクリプトファイルについて

CLUSTERPRO Ver8.0 以前で使用していたスクリプトファイルを移植する場合、環境変数名の最初の "ARMS_" を "CLP_" に置換してください。

```
例) IF "%ARMS_EVENT%" == "START" GOTO NORMAL
      ↓
      IF "%CLP_EVENT%" == "START" GOTO NORMAL
```


付録

- 付録 A 用語集
- 付録 B 索引

付録 A 用語集

あ

インタコネクト クラスタ サーバ間の通信パス
(関連) プライベート LAN、パブリック LAN

か

仮想 IP アドレス 遠隔地クラスタを構築する場合に使用するリソース
(IP アドレス)

管理クライアント WebManager が起動されているマシン

起動属性 クラスタ起動時、自動的にフェイルオーバーグループを
起動するか、手動で起動するかを決定するフェイル
オーバー グループの属性
管理クライアントより設定が可能

共有ディスク 複数サーバよりアクセス可能なディスク

共有ディスク型クラスタ 共有ディスクを使用するクラスタシステム

切替パーティション 複数のコンピュータに接続され、切り替えながら使用
可能なディスクパーティション
(関連) ディスクハートビート用パーティション

クラスタシステム 複数のコンピュータを LAN などをつないで、1つのシ
ステムのように振る舞わせるシステム形態

クラスタシャットダウン クラスタシステム全体 (クラスタを構成する全サーバ)
をシャットダウンさせること

クラスタパーティション ミラーディスクに設定するパーティション。ミラーディス
クの管理に使用する。
(関連) ディスクハートビート用パーティション

現用系 ある 1 つの業務セットについて、業務が動作してい
るサーバ
(関連) 待機系

さ

サーバグループ 同じネットワークや共有ディスク装置に接続しているサーバの集合

セカンダリ (サーバ) 通常運用時、フェイルオーバーグループがフェイルオーバーする先のサーバ
(関連) プライマリ (サーバ)

た

待機系 現用系ではない方のサーバ
(関連) 現用系

ディスクハートビート用パーティション 共有ディスク型クラスターで、ハートビート通信に使用するためのパーティション

データパーティション 共有ディスクの切替パーティションのように使用することが可能なローカルディスク
ミラーディスクに設定するデータ用のパーティション
(関連) クラスターパーティション

な

ネットワークパーティション 全てのハートビートが途切れてしまうこと
(関連) インタコネクト、ハートビート

ノード クラスタシステムでは、クラスターを構成するサーバを指す。ネットワーク用語では、データを他の機器に経路することのできる、コンピュータやルータなどの機器を指す。

は

ハートビート サーバの監視のために、サーバ間で定期的にお互いに通信を行うこと
(関連) インタコネクト、ネットワークパーティション

パブリック LAN サーバ/クライアント間通信パスのこと
(関連) インタコネクト、プライベート LAN

フェイルオーバー 障害検出により待機系が、現用系上の業務アプリケーションを引き継ぐこと

フェイルバック あるサーバで起動していた業務アプリケーションがフェイルオーバーにより他のサーバに引き継がれた後、業務アプリケーションを起動していたサーバに再び業務を戻すこと

フェイルオーバーグループ 業務を実行するのに必要なクラスタリソース、属性の集合

フェイルオーバーグループの移動	ユーザが意図的に業務アプリケーションを現用系から待機系に移動させること
フェイルオーバーポリシー	フェイルオーバー可能なサーバリストとその中でのフェイルオーバー優先順位を持つ属性
プライベート LAN	クラスタを構成するサーバのみが接続された LAN (関連) インタコネクト、パブリック LAN
プライマリ (サーバ)	フェイルオーバーグループでの基準で主となるサーバ (関連) セカンダリ (サーバ)
フローティング IP アドレス	フェイルオーバーが発生したとき、クライアントのアプリケーションが接続先サーバの切り替えを意識することなく使用できる IP アドレス クラスタサーバが所属する LAN と同一のネットワーク アドレス内で、他に使用されていないホストアドレスを割り当てる

ま

マスタサーバ	Builder の [サーバ共通のプロパティ]-[マスタサーバ] で先頭に表示されているサーバ
ミラーコネクト	データミラー型クラスタでデータのミラーリングを行うために使用する LAN。プライマリインタコネクトと兼用で設定することが可能。
ミラーディスクシステム	共有ディスクを使用しないクラスタシステム サーバのローカルディスクをサーバ間でミラーリングする

付録 B 索引

2

2バイト系文字コード, 130

A

AWS Elastic IP リソース, 131
AWS Elastic IP リソース、AWS 仮想IP リソースの動作環境, 83
AWS 仮想IP リソース, 131
Azure プローブポートリソース, 132
Azure プローブポートリソースの動作環境, 83
Azure ロードバランス監視リソース, 132

B

Builder, 61, 85, 112, 135

C

chkdskコマンド, 136
CLUSTERPRO, 35, 36
CLUSTERPRO Disk Agentサービス, 136

E

ESMPRO/AC, 123
Express5800/A1080a,A1040aシリーズ連携に対応したサーバ, 62

H

HA クラスタ, 17

I

ipmiutil, 123
IPv6アドレス, 113
IPアドレスの引き継ぎ, 27

J

Java実行環境, 87, 91, 94
JVM監視, 75, 130
JVM監視リソース, 140

N

NIC Link Up/Down監視リソース, 114

O

OS, 63, 85, 89, 92, 95
OS起動時間, 122

P

PostgreSQL監視, 131

S

SAP連携コネクタの動作環境, 84
Server Core, 124
Single Point of Failure (SPOF), 15, 29

T

TUR, 129

W

WebManager, 61, 89, 92, 112, 134
WebManager Mobile, 61, 95
write性能, 114

あ

アプリケーションの引き継ぎ, 27

い

依存関係, 143
インデックスサービス, 137

え

AMIのリストア, 142

か

回復動作中の操作制限, 133
外部連携モニタリソース, 140
画面更新間隔, 129
監視できる障害とできない障害, 40

き

旧バージョン互換機能, 146
業務監視, 39
共有ディスク, 121
共有ディスク要件, 113

く

クラスタオブジェクト, 49
クラスタシステム, 15, 16
クラスタシャットダウン, 133
クラスタシャットダウンリポート, 133
クラスタリソースの引き継ぎ, 26
グループリソース, 50, 129

グループリソースの追加、削除, 143

け

検出できる障害とできない障害, 40

こ

互換API, 147

さ

サーバ監視, 39

サービス失敗時の回復操作, 132

最終アクション, 129

し

時刻同期, 121

システム構成, 21

実行形式ファイル, 133

障害監視, 33, 38

障害検出, 15, 24

す

スクリプトファイル, 133

スペック, 62

せ

製品構成, 37

そ

ソフトウェア, 63

ソフトウェア構成, 38

た

対話型サービスダイアログの検出ポップアップ表示,
142

ち

遅延警告割合, 129

つ

通信ポート番号, 117

通信ポート番号の自動割り当て範囲の変更, 119

て

ディスクサイズ, 64

ディスク容量, 87, 91, 94

データ整合性, 115

データの引き継ぎ, 26

デフラグ, 136

と

統合WebManager用IPアドレス, 130

動作OS, 112

動作確認済アプリケーション情報, 64

特定サーバのシャットダウン, 134

特定サーバのシャットダウンリブート, 134

な

内部監視, 40

ね

ネットワーク, 122

ネットワーク警告灯, 116

ネットワーク構成, 113

ネットワークパーティション解決リソース, 50

ネットワークパーティション症状, 25

ネットワークパーティション状態からの復旧, 134

は

ハードウェア, 62

ハードウェア構成, 44, 45, 47

ハートビートリソース, 50, 130

ハイブリッドディスク要件, 112

ハイブリッドディスク用パーティション, 121

ふ

ファイルシステム, 117

フェイルオーバー, 28, 42

フェイルオーバー排他属性, 143

ブラウザ, 85, 89, 92, 95

ほ

ポート数不足を回避する設定, 121

ボリュームマネージャリソース, 144

み

ミラーディスク要件, 112

ミラーディスク用パーティション, 121

め

メール通報, 124

メモリ容量, 64, 87, 91, 94

も

モニタリソース, 53

り

リソース, 35, 50
履歴ファイル, 115